

第24回全国ボランティア フェスティバル ふくしま 報告書



ごあいさつ



平成27年11月21日・22日及び前日特別企画を含めた3日間、「第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま」にご参加いただきました全国の皆様、本当にありがとうございました。また、実行委員会委員をはじめ運営に携っていただいたスタッフ・ボランティアの皆様には心から感謝申し上げます。

大会の開催に向け平成26年5月1日に実行委員会及び専門部会を立ち上げ、「“ありがとう” 未来につなごう ふくしまから」を大会テーマに議論を重ね、全体会や分科会等の準備をしてまいりました。これまでご支援いただいた多くの方々に感謝をお伝えするとともに、ボランティアの経験から復興を支える〈復興知（知恵）〉を紡ぎ出し、それを将来につないでいく大会、これからの未来を創造する大会になったのではないのでしょうか。

振り返ってみますと、前日特別企画のスタディ・ツアーでは原子力災害対応の拠点地域を巡り、ふくしまの“今”を視察することで本大会の学びを深めることができました。1日目の基調講演では、これからは人権・命を大切に作る成熟した社会への転換をはかり、次世代へ繋いでいくことの大切さという大きな課題提供をいただきました。シンポジウムでは、そうした新しい社会をつくるためには、お互いが大切にしているものを理解しながら相互に繋がることの大切さを改めて確認しました。2日目の分科会では「たすけあい・支え合いのまちづくり」「つながり・次世代ボランティア」「ふくしまの今と未来」という3つの柱を設け、フィールドワークも交えた多様な企画の分科会を行い議論しました。

ボランティアの皆様は地域の課題に一番近い存在でもありますので、この大会で考えたことを皆様の地域に持ち帰り、未来へのつなぎ手として活動されることを期待しています。

最後に、皆様の今後益々のご活躍とご健勝を心からお祈りし、大会の御礼のご挨拶とさせていただきます。またお会いできますことを楽しみにしています。

第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま 中 田 スウラ
実行委員長
(国立大学法人福島大学うつくしまふくしま未来支援センター センター長)



前日特別企画を含め、平成27年11月21日・22日の3日間開催した「第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま」は、全国からボランティアの皆様をお迎えし、運営スタッフ等も含め2,300名の参加により盛況のうちに大会を終えることができました。これも参加者の皆様、実行委員会をはじめとする運営スタッフ・ボランティアの皆様、協賛・寄付をいただきました企業・団体等の皆様のおかげです。心から感謝申し上げます。

平成25年11月に開催された高知大会の視察から始まり、平成26年5月1日に実行委員会と専門部会を立ち上げ、平成26年9月に開催された岐阜大会には実行委員が赴き、次期開催地として引き受けとPRを行いました。その後本格的に大会の開催準備を開始し、今回の開催に至りました。

この3日間の企画を通し、今大会のテーマ「“ありがとう” 未来につなごう ふくしまから」に込めた思いである、発災直後から今に至るまで全国のボランティアの皆様からいただいている温かいご支援に対する感謝を申し上げることができ、また「ありがとう」の力とボランティア活動の原点を再確認することができたと思います。

また、様々な復興支援の取り組みが広がる中で、今後の復興支援活動のあり方を皆様と一緒に考え共有できたことは、福島が学んだことを風化させることなく未来につなげていくことにもつながったのではないのでしょうか。

今大会を開催する過程を通し、実行委員・運営スタッフが相互理解と交流を深めることができ、私たちにとても大変良い経験となりました。たくさんのお会いとつながりを大切にし、これからも震災復興とボランティア・市民活動の推進に取り組んでまいりたいと思います。

最後になりましたが、皆様の今後益々のご健勝とご活躍を祈念しますとともに、ご参加とご協力をいただきました多くの皆様に厚く御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

社会福祉法人福島県社会福祉協議会 瀬 谷 俊 雄
会 長

目次

2	大会概要
3	大会運営体制
4	大会運営のあゆみ
5	大会テーマ・コンセプト
6	大会プログラム
8	前日特別企画 スタディ・ツアー
12	ウェルカム演奏・開会式
13	基調講演
20	シンポジウム
36	交流会
37	分科会
64	大会振り返り
72	閉会式
73	展示・販売コーナー
74	参加者アンケート結果
83	広報実績
84	絵手紙募集
86	大会制作物
88	寄付・協賛
90	参考資料 (実行委員会設置要綱・実行委員会名簿・専門部会設置規程・専門部会名簿)

大会概要

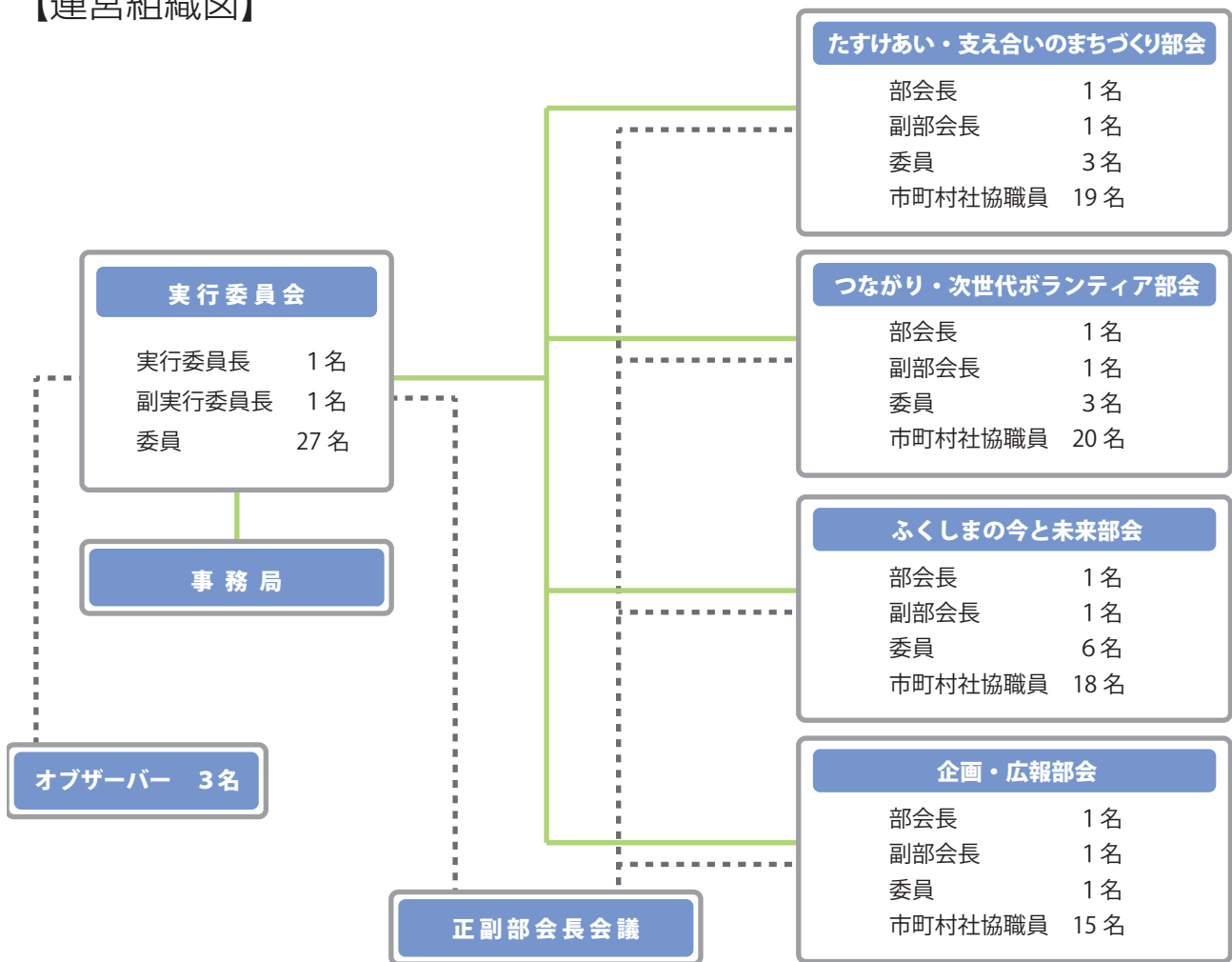
大会テーマ	 “ありがとう” 未来につなごう ふくしまから
開催期日	平成27年11月21日^土～22日^日 (前日特別企画 平成27年11月20日 ^金 ～21日 ^土)
会場	前日 11月20日^金 前日特別企画／大熊町・楡葉町・いわき市内 1日目 11月21日^土 全体会・交流会／ビッグパレットふくしま 2日目 11月22日^日 分科会／ビッグパレットふくしま、日本大学工学部、 JICA 二本松訓練所、昭和村・金山町内、 会津若松市内 全体会／ビッグパレットふくしま
内容	前日 11月20日^金 前日特別企画 スタディ・ツアー 1日目 11月21日^土 ウェルカム演奏／開会式／基調講演／シンポジウム／交流会 2日目 11月22日^日 分科会（22分科会）／大会振り返り／閉会式
参加費	3,000円 （大学生以下無料） 交流会は別途5,000円 スタディ・ツアーは別途5,000円 フィールドワークは別途3,000円
参加者	一般参加者 1,561名 （うち、大学生以下24名） 実行委員・専門部会委員 35名 運営スタッフ 182名（うち市町村社協104名） 運営ボランティア 162名（うち学生ボランティア63名） 講師・出演者等 221名 来賓等 76名 その他 68名 合計 2,305名
主催	第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会 社会福祉法人福島県社会福祉協議会 「広がれボランティアの輪」連絡会議 社会福祉法人全国社会福祉協議会
後援	文部科学省、福島県、福島県教育委員会、郡山市、郡山市教育委員会、 NHK 福島放送局、福島テレビ、福島中央テレビ、福島放送、テレビユー福島、 ラジオ福島、ふくしま FM、福島民報社、福島民友新聞社、朝日新聞福島総局、 毎日新聞福島支局、読売新聞東京本社福島支局、産経新聞社福島支局、 共同通信社福島支局、時事通信社福島支局、河北新報社
事務局	第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会事務局 （福島県社会福祉協議会内） 〒960-8141 福島県福島市渡利字七社宮111 TEL：024-523-1254 FAX：024-523-4477

大会運営体制

第24回全国ボランティアフェスティバルを開催するにあたり、実行委員会及び実行委員会を組織する機関・団体で構成する専門部会を設置しました。専門部会は、4つの部会に分かれて大会全体及び分科会の企画立案を行い、県内59市町村社会福祉協議会から職員の協力も得て運営しました。各専門部会で企画立案された内容は、実行委員会で共有と意見集約がなされ、最終決定しました。

また、県内企業の社会貢献活動を推進するとともに寄付の文化を醸成するため、寄付金と協賛広告を募集しました。

【運営組織図】



寄付 企業・団体 93団体
個人 7名

協賛団体 団体・企業等 90団体

後援団体 行政機関、関係団体等 21団体

協力団体 県内市町村社会福祉協議会、ボランティア・市民活動団体、福祉・観光・教育・報道関係団体等

大会運営のあゆみ

- 平成25年 6月 第24回全国ボランティアフェスティバルの福島県開催を決定
12月 第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま（仮称）準備委員会設置
第1回準備委員会開催
- 平成26年 2月 第2回準備委員会開催
4月 業務委託業者の決定
5月 第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会設置
第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会専門部会設置
第1回実行委員会開催
6月 第2回実行委員会開催
大会コンセプト及び大会テーマ「“ありがとう”未来につなごう ふくしまから」等の決定
第1回専門部会開催
8月 第3回実行委員会開催、第2回専門部会開催
大会シンボルマークの決定、大会 PR のぼり・はっぴ等の作成
9月 Facebook での大会情報の配信開始
第23回全国ボランティアフェスティバルぎふにおいて福島大会開催 PR
（開催告知チラシ、シールを配布。交流会にて開催 PR）
10月 第3回専門部会開催
11月 全社協発行「ボランティア情報」での PR 開始、第4回専門部会開催
12月 第4回実行委員会開催
- 平成27年 1月 第5回専門部会開催
2月 第6回専門部会開催
3月 第5回実行委員会開催
4月 寄付金・協賛広告募集開始（～9月30日）
第7回専門部会開催
5月 第8回専門部会開催
福島県社協発行「はあとふるふくしま」で開催 PR 掲載
大会専用ホームページを開設
各都道府県行政・社協、県内市町村行政・社協へ広報誌等への開催 PR 掲載依頼
6月 絵手紙募集開始（～9月30日）、第6回実行委員会開催
7月 開催案内・チラシ・ポスターの送付、開催 PR 用缶バッジ作成
参加申込受付開始（～10月21日）
8月 第9回専門部会開催、ラジオ・テレビ等で開催 PR
隣接県社協へ訪問して開催 PR、参加促進依頼
9月 新聞等にて開催 PR 及び参加者募集案内掲載
10月 Facebook にて「わが街紹介」配信開始
第7回実行委員会開催、第10回専門部会開催
11月 第8回実行委員会開催、第11回専門部会開催
第24回全国ボランティアフェスティバルふくしまの開催
- 平成28年 1月 第12回専門部会開催
2月 第9回実行委員会開催
3月 報告書作成・配布

大会テーマ・コンセプト

大会を開催するにあたり、実行委員会で協議を重ね、大会テーマを決定しました。

これまで23回開催された「全国ボランティアフェスティバル」で大切にされてきた、ボランティア活動に関する全国的な情報交換、実践の交流と相互研鑽、社会へのPRを通じてボランティア活動の振興を図るとともに、開催県におけるボランティア活動の推進、発展を図るという目的を引き継ぎつつ、本県で開催する意義を考えました。

本県での開催にあたっては、東日本大震災により支援いただいた全国のボランティアの皆さまへ感謝の意を表するとともに、本県におけるボランティア活動に対する関心を高め、ボランティア活動のすそ野を広げさらなる活性化へと繋げることを目指しました。また、この想いをこれからの大会、そして未来へつなげていくことを目標としました。

大会テーマ “ありがとう” 未来につなごう ふくしまから

(1) 全国のボランティアのみなさまへの感謝

東日本大震災以降、ご支援いただいている全国のボランティアの皆さまに「ありがとう」の気持ちを表すとともに、「ありがとう」の言葉が持つチカラ、ボランタリーな活動の原点を再確認する。

(2) 復興に向けた取り組みのあり方を考える

東日本大震災以降、様々な復興支援の取り組みが行われているが、今、そして今後どのような取り組みが求められているのかを考える。

(3) 未来へつなげる

現在の福島県の状況や東日本大震災での経験を風化させることなく未来につないでいくとともに、震災の経験を踏まえ、新しい社会づくりにつなげていく。

“ありがとう”

未来につなごう ふくしまから



大会マーク

コンセプト

手を取り合って心を通わす。そこにあたたかな交流と希望に満ちた福島県の未来が広がる。全国の皆さまへの感謝とつなぐ心、そこにある喜びを大会マークとしてシンボライズしました。

大会プログラム

前日特別企画 11月20日(金) 13:00~21日(土) 10:30

スタディ・ツアー ～原子力災害対応の拠点地域を巡り 想いを未来につなげよう～

1日目 大熊町(車窓より)～楢葉町(天神岬)～楢葉遠隔技術開発センター～いわき市(浜風商店街)

2日目 いわき市(豊間・薄磯地区)～いわき市(下神白復興公営住宅)

1日目 11月21日(土) 全体会 会場/ビッグパレットふくしま 多目的展示ホールC

13:00~13:20 ウェルカム演奏 山木屋太鼓

開会式

- 開催地代表挨拶 第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会
実行委員長 中田 スウラ
- 主催者代表挨拶 社会福祉法人福島県社会福祉協議会 会長 瀬谷 俊雄
社会福祉法人全国社会福祉協議会 会長 斎藤 十朗
- 来賓祝辞 厚生労働大臣 塩崎 恭久 氏
(代理:厚生労働省 社会・援護局 局長 石井 淳子 氏)
福島県知事 内堀 雅雄 氏
(代理:福島県副知事 畠 利行 氏)
- ボランティア功労者厚生労働大臣表彰
個人代表 東 久美子 氏(岩手県)
個人代表 吉岡 英子 氏(宮城県)
グループ・団体代表 会津手話サークルみみごえ会(福島県)
中央推薦代表 UBSグループ(東京都)
- 受賞者代表挨拶 星 るつ子 氏(会津手話サークルみみごえ会 代表)

14:30~15:20 基調講演 菅野 典雄 氏(福島県飯館村長)

「お金の世界」から「いのちの世界」「成長社会」から「成熟社会」へ

シンポジウム 未来につなぐ日ごろのつながり・支え合い

- シンポジスト 鈴木麻千子 氏
(社会福祉法人石巻市社会福祉協議会 復興支援課 地域福祉コーディネーター)
- 栗林知絵子 氏
(特定非営利活動法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク 理事長)
- 開沼 博 氏
(国立大学法人福島大学うつくしまふくしま未来支援センター 特任研究員)
- コーディネーター 加留部貴行 氏
(認定特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会 運営委員
国立大学法人九州大学大学院 統合新領域学府 客員准教授)

交流会(会場/ビッグパレットふくしま 多目的展示ホールA)

- 司 会 なすび 氏(福島県出身タレント)
齋藤 美佐(企画・広報部会副部会長)
- フラダンス披露 あさか開成高校フラダンス同好会 ALOHA のみなさん
 - 開会の挨拶 山崎美貴子(「広がれボランティアの輪」連絡会議 会長)
 - 乾 杯 品川 萬里 氏(郡山市長)
 - 閉会の挨拶 山田 秀昭(社会福祉法人全国社会福祉協議会 常務理事)

2日目 11月22日(日)	
9:00~12:00	分科会 (22分科会) たすけあい・支え合いのまちづくり部会5分科会+フィールドワーク2分科会 つながり・次世代ボランティア部会7分科会 ふくしまの今と未来部会8分科会 ※一部、時間が異なる分科会あり (分科会会場/ビッグパレットふくしま、日本大学工学部、JICA 二本松訓練所) (フィールドワーク会場/会津若松市内、昭和村・金山町内)
13:30~14:20	大会振り返り (会場/ビッグパレットふくしま 多目的展示ホールC) ●大会振り返り映像上映 ●大会振り返り ~福島からのメッセージ~ 出演者 第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会 実行委員長 中田 スウラ (国立大学法人福島大学うつくしまふくしま未来支援センター センター長) たすけあい・支え合いのまちづくり部会長 添田 祐司 (社会福祉法人郡山市社会福祉協議会 地域福祉課長) つながり・次世代ボランティア部会長 遠藤 徳雄 (日本労働組合総連合会福島県連合会 副事務局長) ふくしまの今と未来部会長 中鉢 博之 (一般社団法人ふくしま連携復興センター 理事)
14:30~15:00	閉会式 ●主催者代表挨拶 第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会 副実行委員長 古川 雅之 ●主催団体代表挨拶 社会福祉法人全国社会福祉協議会 常務理事 山田 秀昭 ●大会フラッグの引き継ぎ ●合唱披露 郡山市立郡山第二中学校合唱部のみなさん ●全員合唱 (復興支援ソング「花は咲く」) ●閉会挨拶 第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会 実行委員長 中田 スウラ

展示・販売 会場/ビッグパレットふくしま 多目的展示ホールB 他		
11月21日	12:00~17:30	絵手紙展示 団体紹介 (5団体)
11月22日	8:30~15:30	販売 (県物産品販売1施設、授産製品販売12施設) 東日本大震災写真パネル展示 (2ヶ所)

前日特別企画 スタディ・ツアー

～原子力災害対応の拠点地域を巡り 想いを未来につなげよう～

(11月20日(金) 13:00～21日(土) 10:30 会場／大熊町・楡葉町・いわき市内)

東日本大震災は、地震、津波そして原子力発電所事故が重なった世界に類を見ない広域複合災害として、福島県に甚大な被害を及ぼしました。本分科会では、“福島第一原発”からいわき市へ、原発災害対応の拠点地域を巡り、被災者、避難者等を支える社協等の取り組みなどを学びながら、新聞やテレビ報道では得ることのできない“生のふくしま”の現状を視察していただきました。本企画は、今の「ふくしま」について理解がより一層深まるよう開会に先立って実施しました。

- 講師 【1号車説明担当】 渡部 正勝さん(大熊町社会福祉協議会 会長／福島県)
佐藤 裕之さん(いわき市社会福祉協議会 生活支援課長／福島県)
- 【2号車説明担当】 吉田 利孝さん(大熊町社会福祉協議会 いわき連絡所長／福島県)
草野 淳さん(いわき市社会福祉協議会 地域福祉課長／福島県)
- 【現地説明担当】 松本 和也さん(楡葉町社会福祉協議会 事務局長／福島県)
青木 洋さん(楡葉町役場 放射線対策課長／福島県)
渡邊 文生さん(楡葉町役場 新産業創造室係長／福島県)
野口 真一さん(楡葉遠隔技術開発センター(モックアップ試験施設) 施設運用課長／福島県)
高木 京子さん(いわき復興支援・観光事務所 震災語り部／福島県)
赤池 孝行さん(3.11被災者を支援するいわき連絡協議会 事務局長／福島県)

◎1日目

受付・出発式

スタディ・ツアーの参加受付として、いわき市社会福祉センターの5階大会議室にて、いわき市災害救援ボランティアセンターの活動状況DVDの上映及び福島県の復興応援ソングの猪苗代湖ズの「I love you & I need you ふくしま」を流しながら迎え入れ、強口暢子いわき市社会福祉協議会長より来県(来市)への感謝のメッセージでスタディ・ツアーの幕が上がりました。(バス：いわき市から大熊町、そして楡葉町へ)

【いわき市→大熊町】

常磐道四倉インターチェンジまでは、いわき市社協職員より、2日間の行程内容と福島県の概要説明(面積、人口、気候、震災の被害、震災前後の比較)を行いました。

【大熊町】

四倉インターチェンジからは、大熊町社協の役職員より、大熊町の状況(震災当時の体験談、避難の状況、現在の残された家屋の状況、今の避難者が抱える問題、ボランティアの受け入れ状況等)について、車中から大熊町の現状を視察しながら説明



出発式



を行いました。

震災当時、詳しい状況が分からず、着の身着のまま行政等の指示に従い避難しました。その後、なかなか自宅に戻れず、いらだちや不安を感じていました。一時帰宅が許され、戻ってみると、大切な物が自宅から消えたり（盗難）、ネズミ等により家屋が傷んだり、壊れていく古里や自宅を見るたび、涙を流し心が痛みました。また、仮設住宅は決して住みやすい環境ではありませんでしたが、全国から心温まるメッセージや支援物資、そして、ボランティアの方々によるイベント等（炊き出しやコンサート、レクリエーション）により、少しずつ「笑うこと」「楽しむこと」を思い出した町民も少なくありませんでした。

まだまだ大熊町の状況は厳しく、これからもずっと仮設住宅に住み続けるのか、復興公営住宅に住むのか、別の土地に新たに家を建てるのかなど、それぞれに抱えている問題は複雑ではありますが、支援者の協力をいただきながら町民が一丸となって今の現実を受け止め、震災前のような生活を取り戻すまで頑張っていきたいという想いを伝えました。

【楢葉町】

楢葉町の天神岬からは、町役場及び町社協職員より、楢葉町の現状と除染作業の状況等について説明を行い、楢葉遠隔技術開発センター（モックアップ試験施設）では、担当職員より施設の概要とこれからの除染や廃炉に向けた課題等の説明を行いました。

現在、帰町に向けてさまざまな整備を図っていますが、時間の経過とともに「町に戻る」という人が減っています。震災から4年以上が経過し、古里に戻りたいという気持ちを抱えながら、不慣れな場所に根を下し、それぞれが生活をしています。これから、復興（廃炉や除染）に向けた拠点として、ハード面等の整備に取り組んでいますが、そこに人が交流し、笑顔で会話ができ、何より、震災前の楢葉町に少しでも戻れるよう支援者はもとより、関係機関・団体とともに全力で活動していくと力強く参加者に伝えました。

【楢葉町→いわき市】

楢葉町からいわき市への移動中に、DVD「久之浜・大久地区4年の月日が過ぎて」を上映し、震災直後の市民の生の声や津波被災の恐ろしさを感じていただきました。

【いわき市】

1日目の最後として、久之浜町の浜風商店街（震災後に久之浜第一小学校内に仮設の商店街として設置）にて震災語り部の口話（震災当時の体験談）、商店街見学・買い物を通して被災者と直接ふれあい、生の声を聞くことができました。



天神岬にて視察



楢葉遠隔技術開発センター視察



浜風商店街にて

粉雪が舞う中、余震の恐怖に震えながら、津波により自分たちの家や車など、ありとあらゆるものが流され、必死で逃げ回る人、水を掻き分け高台に避難する人、家族を探す人をただただ、見つめるだけで、自分の力の無さを感じました。そして、住んでいた場所や逃げた方向により、人生の分かれ道が数多く存在していたと感じました。家族を亡くした方、家や車を失った方、古里が変わり果ててしまったことにより、目の前が真っ暗だったが、全国の支援者の方々の優しさにふれることで、仮設住宅に、浜風商店街に、被災地に、そして人々の顔に少しずつ光が灯りました。

今、この浜風商店街は、地域の方と他愛もない話をし、全国のボランティアの方々と交流をする拠点として、私たちは、元気を発信していきたいです。

◎2日目

【いわき市豊間・薄磯地区】

いわき市で一番被害の大きかったと言われている「豊間・薄磯地区」に向かう車中において、いわき市の状況説明（被災状況、市災害救援ボランティアセンターの取り組み）を行いました。その後、被災から4年以上経過し、復興過程にある豊間、薄磯地区を車中から視察するとともに、希望者は、塩屋崎灯台に足を運び、高台から被災地（復興地）を視察しました。

いわき市災害救援ボランティアセンターには、6万人を超えるボランティアが復興のために活動してくださいました。

全国から集まった数多くのボランティアの方々をスムーズに活動場所へつなぐため、3月26日から九州をはじめ、全国各地の社会福祉協議会や関係機関・団体の協力を得て、本センターの運営を行い、7,500件のニーズに対応することができました。また、ボランティア活動中には、つらいながらもボランティアの方とともに片付けをしながら、目に涙を浮かべ、震災時の状況をお話する被災された方、そして、その隣に寄り添いながら、涙するボランティアの方など、災害救援ボランティアセンターは片付けだけではなく、寄り添い活動にも力を入れ、被災された方とボランティアの方々との多くのエピソードが生まれたことを伝えました。

【いわき市下神白復興公営住宅】

下神白復興公営住宅集会所において、NPO 法人3.11被災者を支援するいわき連絡協議会職員より災害公営住宅・復興公営住宅の違い（被災者・避難者）、コミュニティ交流員の取り組み、ボランティア活動内容等について説明を行いました。

主に原子力発電所の事故による避難者支援活動に取り組み、復興公営住宅の敷地内にある集会所を利用し、定期的に交流サロン（イベント）を開催するとともに、心に寄り添う相談活動



語り部による震災体験談



塩屋崎灯台視察



災害公営住宅にて
みんぷくによる講話

を実施しています。特にサロン活動では、ボランティアさんや地域住民とともに、ハロウィンやクリスマスなど季節の行事や将棋やオセロなどの大会も開催し、子どもからお年寄りまで誰もが楽しめるサロンを開催していることを伝えました。

【いわき市→郡山市ビッグパレットふくしま】

いわき市復興支援ボランティアセンターの取り組み（生活支援相談員による被災者の見守り支援）を説明後、DVD「いわき市復興のあゆみ」を上映し、これまでのいわき市における復興支援活動の振り返りを行いました。3月16日に開所したいわき市災害救援ボランティアセンターは、同年、8月8日に復興支援ボランティアセンターに名称と機能を変更し、災害救援活動を行うとともに、生活支援相談員を配置しながら、被災者の生活支援活動に取り組みました。これまで、みなし仮設住宅や災害公営住宅、津波被害地区に住み続けている住宅に、延べで12万回以上訪問し、被災者の心に寄り添うとともに、相談や傾聴活動を実施しました。

また、訪問活動から得たニーズをもとに、ボランティアさんの協力を得ながら、地域集会所において誰もが気軽に集えるサロン（交流会）を開催しました。現在、そのサロンは地域に根付き、地域福祉活動としてのサロン活動に転換していることを伝えました。



担当者のコメント

開催前は、本スタディ・ツアーにどれだけ参加者が集まってくれるかが心配でしたが、結果的に募集案内後すぐに定員を超える申し込みがあり、それだけ多くの皆さんが福島に関心を持っているということでした。参加者の方々は、ツアーを通して、東日本大震災の爪痕、地震・津波・原発事故による放射能汚染の実態、被災者がどのような想いで仮設住宅や災害公営住宅等で生活を送っているのか等々、マスコミでは報じられない福島県浜通りの真実をそれぞれ感じた上で、本フェスティバルに臨むことができたと思います。

そして、いま自分たちができることを考え、それぞれの立場で今後のボランティア活動等で活かしていただければと思います。

〈専門部会委員〉 志賀 大祐（いわき市社協）

〈運営スタッフ〉 佐藤 裕之、國井 順子、二瓶 泰然、黒田美加子、
石井真美子、木田美奈子（いわき市社協）
遠藤 仁美（大熊町社協）

ウェルカム演奏・開会式

今大会のテーマ「“ありがとう” 未来につなごう Fukushimaから」には、発災直後から、全国のボランティアの皆さまにいただきました温かいご支援に対するお礼と感謝を伝えるとともに、ボランティアの経験から復興を支える〈復興知（知恵）〉を紡ぎ出し、それを将来につないでいく大会、これからの未来を創造する大会にしたいという思いを込めました。

大会テーマに込められた私たちの意気込みと、福島でしか見ることのできない現状を多くの方々と共有し、ご参集の皆さまと積極的な交流や活発な議論をし、福島が学んだことを風化させることなく未来につなげたい…そんな思いの中大会の幕が上がりました。



ウェルカム演奏

東京電力福島第一原子力発電所事故により、計画的避難区域に指定され避難を余儀なくされた福島県川俣町山木屋地区で活動していた山木屋太鼓。故郷を離れても、山木屋の風景を思い出して欲しいとのメンバーの想いから、練習場所を転々としながら演奏活動を続けています。迫力ある演奏が、メンバーの魂、そして故郷への想いが会場中に響きわたりました。



開会式

主催者挨拶



中田スウラ実行委員長



瀬谷俊雄県社協会長



斎藤十朗全社協会長

来賓祝辞

ご来賓の方々から祝辞を賜り、ボランティア功労者厚生労働大臣表彰を行いました。



厚生労働省社会・援護局
局長 石井淳子氏（代理）



福島県副知事 畠利行氏（代理）

ボランティア功労者厚生労働大臣表彰



東久美子氏



吉岡英子氏



会津手話サークル
みみごえ会



UBS グループ

基調講演

「お金の世界」から「いのちの世界」 「成長社会」から「成熟社会」へ

講演者 福島県飯舘村長 菅野 典雄 さん



飯舘村は、「までい」を合言葉に、人と人、人と地域のつながりを大切にした「までいライフ」の村づくりを進めてきました。しかし、東京電力福島第一原子力発電所事故により、全村民が避難を余儀なくされています。避難生活を送る中で改めて感じた「までいライフ」という考え方の大切さ、未来につなげたい故郷との絆、そして、これからの地域づくりのあり方について、講演していただきました。

先ほど紹介いただいたように、飯舘村は6,000人の純農村の村であるが、現在、福島第一原子力発電所事故による全村避難を強いられて間もなく5年が過ぎようとしている。今回はこれまでの過程やこの避難生活で考えたこと、考えさせられたことなどを皆さんにお話しさせていただければと思っている。

日本の歴史

1. 第1の変革期
2. 第2の変革期
3. 第3の変革期

日本の歴史を見てみると、今から20年程前に日本は第3の転換期に入っていると多くの有識者が言っている。第3ということであるから、第1と第2があるわけだが、第1は明治維新である。それからまた70～80年過ぎ、日本は第二次世界大戦で戦争に敗れ、そこからまた新しい日本が生ま

れたということが第2であることは、皆さんで存じだろう。

さて、第1の転換期で何が減じたのかというと、おそらく武士の時代が終わりを告げたと言っているのではないかな。では、第2の転換期で何が減じたのかというと、軍人の時代が終わりを告げたと言っているだろう。まだ世界には軍人が幅を利かせて戦争やクーデターをしている国があるが、日本はあの敗戦から軍人の時代が終わりを告げ、平和な日本に我々はこうして生きていられる、暮らしているということである。

軍人の時代が終わりを告げ、この第3の転換期は残念ながら、何が減じたのか見えないままに来てしまった。第1、第2のように全国的な動き、あるいは血を見ることがなかったため、気づかないで来てしまったのだろう。この第3の転換期はいったい何が減びていくのかというと、なかなか一言では言えないが、おそらく時代の流れを読めない者が減びていく、こう言っているのだろう。

今までは十年ひと昔、ゆったりと流れてきたのが、最近は時代の流れが速い。そのため、時代の流れをしっかりと読む柔軟な考え方や先見性がこ

れから必要になってくるだろう。

今回震災に遭って、多くの方から支援をいただいた。改めて御礼申し上げたい。

山形のあるお坊さんから、「負けない」と書かれた手ぬぐいを飯舘村にもいただき、住民の皆さんに配った。



この手ぬぐいにはもう一つの意味が隠されている。普通の手ぬぐいの半分もない大きさのため、これでは頭にも首にも「巻けない」という意味である。お坊さんでさえという言い方は失礼だが、頭を柔らかくしていると、こうしたユーモアの中に「頑張れ」という意味を持つものができる。

それからもう一つ、私は日本に生まれて本当に良かったとずっと思ってきた。日本は世界一安全な国と言われているからである。少なくとも、物を忘れても名前を書いていけば戻ってくる。小さいエリアであれば名前を書いていなくても、「これはあの人の物よ」という感じで戻ってくるはずだが、外国ではそうはいかない。少なくとも自分のものは絶対身から離すな、取られたら取った人よりも取られた人が悪いぐらいの話である。

ところが、現在の日本はどうも“危ない国”に近づいているのではないかという気がしてならない。自分さえ良ければ他人はどうなってもいいという考えが増えているような気がする。他人だけではなく、自分の子どもでさえも、どうなってもいいという考えも多くなっている。今から6年程前に、青森県だったと思うが、小学校4年生の男

の子をお母さんが首を絞めて殺してしまった事件があった。この男の子は小学校2年生のときに「お母さん」という題の詩を書いて賞を取っているという記事が新聞に載った。

おかあさんは／どこでもふわふわ／ほっぺは
ぷにぷに／ふくらはぎは ぽよぽよ／ふとも
もは ぽよん／うでは もちもち／おなかは 小
人さんが／トランポリンをしたら／とおくへとん
でいくくらい／はずんでいる／おかあさんは／
とってもやわらかい／ぼくがさわったら／あたた
かい 気持ちいい／ベッドになってくれる

いかがだろうか。自分を産んでくれたお母さんをこれほど、ありがたいな、うれしいな、あるいは本当に愛おしいと思う子どもの言葉、これ以上の言葉を私は知らない。このような理不尽なことが日本ではどんどんと増えている。

近ごろであればマンションの基礎杭の問題や車のエアバッグの問題など、自分さえ儲かればいいという事案がある。食品の偽装も、これだけ騒がれても後を絶たない。さらに、オレオレ詐欺から、今は振り込め詐欺に変わっているが、年間400億円もお年寄りから巻き上げている事件が発生している。

また、スピードという点でも、もっとゆっくりすればいいのにスピードを出し過ぎてしまうという事案もある。何年前だろうか、JR 福知山線の脱線事故は皆さんご存じだろう。カーブでスピードを出し過ぎて脱線し、600人を超える死者・負傷者が出た未だかつてない事故だった。

今お話ししたようなことは、少なくとも効率一辺倒、スピーディーに、お金がすべてという戦後の価値観で走ってきたことにより発生した事案であり、これからの時代は、それだけでいいのかということである。

したがって、これからは少し考えを変えていく必要があるだろう。しかし、変えるといっても世の中が簡単に変わるわけではないから、一人ひとりがそこに意識を持つことが大切だと思う。飯舘村の10年計画を作るときに、「“スローライフ”というコンセプトで作って欲しくないか」という話を

したところ、早速職員から疑問が出た。「もう道路はつくらなくていいのか、農業振興はしなくていいのか」と。「いや、違うよ」と言っても伝わらない。今度は住民から「役場の悪いところはスローなことなのに、もっとスローにする気か」と、こうなる。そんなことも言っていない。このような誤解は、今までスピードは善でスローは悪だという固定観念を持ってきたためである。「スローライフがなかなか理解してもらえない」と思っていたのだが、ある職員から「では、“まदैライフ”にしたらどうか」という提案があった。

“まदै”とは、私たちが小さいころよく使われていた方言である。「まदैに子どもを育てないとあとで苦労するよ」とか、「まदैに仕事しろよ」などと言われていた。この“まदै”という言葉、東北では使っているところもあるようだが、ただの方言なのか気になり、調べてみたところ、辞書に載っていた。真実の真に手と書いて「真手（まて）」、これがなまって「まで」だったり、「まदै」だったり、「までえ」になっている。意味は「左右そろった手、両手」と出ている。そういえば、小さい頃キャッチボールをしていて、グローブで捕る基本はもう片方の手をきちんと添えれば、万が一の落球も防げると教えられた。つまり、「両手」というところから、「丁寧に、大切に、念入りに、じっくりと、手間ひまを惜しまず、心を込めて、つつましく、もったいない」、なかなかいい言葉が揃う。スローライフとぴったりにいうわけにはいかないかもしれないが、この「両手」という考えは、非常に大切な考え方だと思い、「まदैライフいたて」というキャッチコピーで一生懸命思いを込めて様々な事業を展開してきた。

簡単にいえば、ないものねだりをするだけではなく、「あるもの探し」、「あるもの活かし」をやっていくべきではないのか。あるいは、物であったり、お金であったり、人が循環するような流れをつくっていくべきではないのか。結果的に「心の循環」をつくっていくことが大切ではないかという思いで、様々なことをやってきた。

しかし、「まदैライフいたて」を掲げて7年



目を迎え、うまくいきかけていたときに、2011年3月11日、まさに今までにない大きな地震が東北に起き、そして、テレビを見ている限りは本物とは思えないあの津波が来た。そのことで絶対安全だといわれた原発が爆発して、まさに今、多くの人たちが避難生活を強いられている。

こういった状況の中で、先ほど柔軟な考え方が必要だという話をしたが、月日が経過するとともに、そのことの重要性が自分なりにわかってきた。

震災発生直後、他の多くの自治体にある医療施設や福祉施設などは、飯舘村よりも避難がかなり早かった。7～8時間かけて遠くにばらばらに避難し、介護や看護の手が変わったり、転院させられたことで患者に負担がかかり、亡くなっていくということが多かった。

そういった状況を見ていて、全村避難することが飯舘村の住民にとって最善の策なのか疑問に思い、国の避難の基準である年間20ミリシーベルトを超えない範囲の中で、何か他の自治体とは違う動きができないのかを一生懸命に考えた。結果、室内は非常に線量が低いことに目をつけ、福祉施設をはじめ、室内で仕事をする6～7つぐらいの会社を残し、避難先から通って操業する、仕事をするができるということを国との協議の中で実現させた。

また、避難の際も、原子力発電所からできるだけ遠くへという考え方もあるが、ある程度線量が低ければ、生活の変化のリスクと放射能のリスクとどのようにバランスを取るかを考え、1次避難、

2次避難という組み立てを行った。現在、村から1時間以内のところに90%の方が避難していただいているため、様々な会合をすることが他の自治体と比べ、容易である。これはすべて、先ほど言ったように、ある一点は正しいが、その一点だけで物事が解決するような単純な世の中ではないということではないか。それによって今、何かと助かっているという気がする。

どうも日本人は極論に酔う国民になりつつあるのではないかと心配もしている。「コンクリートから人へ」というと、一方に考えが流れる。そしてまた、原発事故が起すれば脱原発に一気に流れる。すべて正しいが、それだけで物事が解決するような単純な世の中ではもうない。白か黒かだけではない、柔軟な考え方を常に頭の中に置きながらやっていかなければならない時代とっていいのではないかと考えている。

避難生活も年を重ねていくと、身も心も病んでくる。萎えていく。今まで農村で暮らし、健康でいろいろなことに汗をかきながらやってきたものが、だんだんできなくなる、あるいは人との会話が少なくなる。そういった状況になっている。

また、一方で原発事故の避難生活の特異性について思うことがある。災害には様々あり、津波、地震、台風や噴火もある。それぞれ亡くなった方がおり、私は災害の重い軽いをいえば、間違いなくそちらの方が何倍も何十倍も重いだろうと思う。

しかし、それとは全く違う原発災害の特異性があるといっているのではないかと考えている。例えば、自然災害であれば、何年か後に、すべてとは言わないが、「ゼロからスタートしようか」ということになる。だが、原発事故はゼロからのスタートではなく、マイナスからゼロに向かってのスタートなのだ。世代を超えて不安と闘いながら、汚された土地の生活と闘いながら、これから長い間ゼロに向かっていかなければならないということである。

飯舘村も線量の違いで3つに区分けをしている。当然そこには線引きがあり、またその線引きによって今までのコミュニティが崩されてしまうことも

原発事故の特異性といっているだろう。

さらに、特に大変だと思うのは子ども・若者である。これまでの災害であれば、「元には戻っていないが、このぐらいだからあなたも戻っていらっしゃいよ」とか、「親を見捨てていいのか」という話はできるが、残念ながら放射能の災害はそういうことは全く言えない。100人いれば100人の考え方が違って、それがみんな正しい。危ないと思う人はその人にとって正しい判断であり、大丈夫だという人もその人にとって正しい判断である。

現在、飯舘村の約50%近くの子どもたちが、村外にある村立の仮設校舎に通っているが、他の避難している自治体には、2%~10%程度しか避難自治体が建てた仮設校舎に通っていないところもある。飯舘村とて村に戻るときにはまた数が少なくなるだろう。そこからスタートしなければならないということである。そのような中で、われわれは復興を進めていくということである。

だからといって愚痴だけを言っていて事が済むかということ、決してそうではない。家や家族をなくした方もおり、それに比べればまだわれわれは家族だっているということを村民に必死になって



話しながら、前を向いてもらおうと頑張っているところである。

それから、こんな話も村民にしている。3年前に大阪の新聞に小学校6年生の作文が載り、センセーションを起こしたという話である。「わたしの願い」という題である。

口が うまく うごかない／手も 足も 自分の思ったとおり うごいてくれない／一番 つらいのは シャベれないこと／言いたいことは 自分の中に たくさんある／でも うまく 伝えることができない／先生や お母さんに 文字盤を指でさしながら／ちょっとずつ 文ができあがっていく感じ／自分の 言いたかったことが やっと 言葉に なっていく／神様が 1日だけ 魔法をかけて／シャベれるようにしてくれたら…／家族と いっぱい おしゃべりしたい／学校から帰る車をおりて お母さんに／「ただいま！」って言う／「わたし、シャベれるよ！」って言う／お母さん びっくりして 腰を めかすだろうな／お父さんと お兄ちゃんに 電話して／「琴音だよ！ 早く、帰ってきて♪」って言う／2人とも とんで帰ってくるかな／家族みんなが そろったら みんなで ゲームをしながら おしゃべりしたい／お母さんだけは ゲームがへたやから 負けるやろうな／「まあ、まあ、元気出して」って わたしが 言う／魔法が とける前に／家族みんなに／「おやすみ」って言う／それで じゅうぶん

このような大変な子どもだって前を向いて頑張っているのに、われわれが頑張れないはずはないのではないか、こんな話をしている。

「までいライフ」は7年目に入るという話をしたが、このようにまとめていこうと考えていた。



1つ目は、大量生産、大量消費、そして、大量廃棄、この組み立てで日本の経済は発展してきた。それはそれでこれからも大切だが、少なくとも少し暮らし方を変えていかなければならない時代になっているのではないだろうか。

2つ目は、自分さえ良ければ、あるいは自分の子どもが良ければという考えが増えつつある。もう一度、新しい時代の、お互いに相手を気遣い、そして、まさにおたがいさまという気持ちの環境、土壌をつくっていくことが、住みよい社会、居心地のいい居場所をつくっていくことになるのではないか。

そして、3つ目だが、最近はどうも自分で考え、自分で判断し、自分で責任を取ることが薄い国民に少しずつなっているのではないかと思う。権利だけを主張して義務を果たさないということである。自主・自立、自分のできることは自分でしっかりやるということが大切ではないか。

ということで、平成27年11月25日、飯舘村内に村民が避難し、お世話になっている自治体の汚泥と農業廃棄物を燃やす焼却炉を日本で初めてつくらせていただいた。これは、飯舘村はずっと先輩たちが「おたがいさま」の気持ちを大切にやってきただろうということを言い続け、なんとか実現したことである。

この3つの「までいライフ」は、小さな村の生き残り策だと思ってやってきたが、避難生活を送ってみると、日本の20年、30年先のあり様が「までいライフ」ではないのかと思えるようになってきた。

現在、震災前の2倍、3倍の仕事量を、職員たちと、あるいは助けていただいている皆さんと対

応に明け暮れている。毎日忙しいため、その忙しさにかまけて、「一番大切なことを忘れていないか」との思いがある。それはどういうことかという、われわれがもっと便利に、もっと豊かにと、もっともつとを追求をしていけば、必ずそこには大量のエネルギーが必要になる。その結果、“もっと危ない”日本を次の世代にバトンタッチするということになりはしないかということである。私はなにも一気に脱原発などと言うつもりはないが、少なくともこれほど危ないものは少しでも減らし、次の世代にバトンタッチしなければならないと思っている。

今、日本は自動販売機が260万台あり、24時間動いている。また、コンビニは5万店が24時間営業している。私も助かったことがたくさんあるが、果たして世界でどの程度24時間稼働している国があるのだろうか。この前、フランスに行ってきたが、少なくとも夜はほとんど店が閉まる。日曜日にも閉まっている。電気もうっすら点いている。24時間明るいところをどんどんつくって、あのきれいな星空が見えない場所を増やしていくことが本当の幸せなのか。少なくともそう考えると、もっと便利に、もっと豊かにだけを言う時代ではなくなっているのではないか。まさに足し算的な発想だけではなく、引き算的な考え方も必要になってくるだろうし、成長だけが日本を救うという考え方ではなく、成熟社会の中で緩やかな成長、あるいは横ばいで行くという考え方をしなければ、次々とエネルギーが必要になり、“もっと危ない”日本を私たちの子孫にバトンタッチすることになりはしないか。

また、アメリカのインディアンにはこんな言葉がある。「地球は子孫から借りているもので、先祖から受け継いでいるものではない。未来に生きる子どもたちから借りているものを汚したり、傷つけたり、壊したりしてはならない」と。こういった言葉からも、もう一度考えていかなければならないのではないかという思いである。

さて、時代の変化とともに固定観念を持っていたはどうしようもない時代になってきていると、

私は考えることがある。毎年新聞の2面を使って



広告を出している会社があり、東日本大震災のときに出していた広告のキャッチコピーが「いい国つくろう、何度でも」である。バックの絵には、教科書で何度も見たあのマッカーサーが、プロペラ機からパイプをくわえて降りてくる写真である。良い悪いは別にしても、今の豊かな日本はここから誕生した。だからもう一度、この震災、原発事故からいい国をつくって、次の世代により安全・安心な日本をバトンタッチしようではないかというのがこのキャッチコピーである。まさにそうだなと改めて思う。

さて、そろそろ時間になってきた。先ほど足し算から引き算という話をした。今は人生80年、90年生きられる時代である。昔より長生きできるわけである。一方で、昔のお母さんは、洗濯するのに洗濯板で洗濯していたが、今はスイッチひとつでできる。現在は、間違いなく自由な時間が増えている世代といっていいたいだろう。おおむね80年生きられるとして、時間にすると70万時間程あるそうだ。1日8時間働くと8万時間が働く時間である。そうすると「70マイナス8」がわれわれに自由に与えられた時間である。もちろん寝る時間、化粧をする時間、トイレに入る時間も必要だろうから、すべて自由とは言えないが、昔に比べれば自由に使える時間が増えている。その増えた時間を何に使うかというのがこれからのポイントになるのではないかとと思っている。

これから求められる豊かさとは何なのだろう。今までは数で数えられる豊かさであった。もう1

着背広が欲しいな、もう1台車が欲しいな、もう1つ何か欲しいな、単価は違うが全て数えられる。しかし、これから求められる豊かさは数で数えられない豊かさではないだろうか。やりきったという達成感であったり、うれしいなとか面白いなとか、数では数えられないものである。そういった数で数えられない豊かさを求めるために、昔の人よりも多くの時間を使うことができる。その時に自由に使える時間を自分のためにだけ使っていて数で数えられない豊かさが求められるかという、それはできないだろう。

そう考えるとできるだけ少し余った時間を、自分のこと、自分の仕事、家庭のため以外に使っていくことが、数で数えられない豊かさを求められることになるのではないかなと思う。まさに「ボランティア」という言葉になるのではないだろうか。ボランティアはちょっと時間のあるちょっと裕福な方が、誰かに手を差し伸べる行為と思っていた方も以前はいたが、そうではなく、ボランティアは、

自分を高める行為、あるいは自分の心の豊かさを求める行為、数で数えられない、人間として生まれてきて良かったなという思いを感じることができ行為である。

皆さんはその趣旨をきちんと心の中に入れて活動をされてきた方ではないだろうか。皆さんのそれらの活動に感謝し、敬意を表する。皆さんの様々な活動が、間違いなく新しい日本をつくるひとつの流れになるだろうと思うし、私たちもこの原発事故から、少しでもこの日本の方向性が変わっていけば、10年、20年後に大きな変化になるのではないかな。そうしなければ私たちの子どもに、孫に、ひ孫に、“もっと危ない”日本をバトンタッチすることになりはしないのか、そんな思いを避難生活の中で抱いているところである。

そういった意味で、今日お集まりの皆さまに大いに期待を申し上げ、そして、これからも素晴らしいボランティア活動をしていただくことをお願いして、私からの話は終わりにさせていただく。



シンポジウム

「未来につなぐ日ごろのつながり・支え合い」

“つながり”“支え合い”をキーワードに、3人のシンポジストから実践事例から見てきた地域の課題を参加者に投げかけ、参加者が自分の地域に置き換えて、それぞれの課題を考えました。

「どのようにつながりを広げたらいいのか」「どのように地域の課題を把握したらいいのか」を会場全体で考える機会としました。



シンポジスト

鈴木麻千子 さん

(社会福祉法人石巻市社会福祉協議会復興支援課 地域福祉コーディネーター)

栗林知絵子 さん

(特定非営利活動法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク 理事長)

開沼 博 さん

(国立大学法人福島大学 うつくしまふくしま未来支援センター 特任研究員)



コーディネーター

加留部貴行 さん

認定特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会 運営委員
国立大学法人九州大学大学院統合新領域学府 客員准教授

■ねらい

○加留部貴行 さん (以下、加留部)

ここからの時間は、シンポジウムという形で3人の方のお話を伺いつつ、これまでのつながり、これからのつながりを皆さんと考えていく時間にしていきたいと思います。

テーマは「未来につなぐ日ごろのつながり・支え合い」です。未来につなぐということで考えると、現状はどうでしょうか。私自身もいろいろな現場に伺わせていただきます。地域のこともありますが、さまざまな職場や組織に伺うこともあります。

ます。それは産学官民を問わず、そして全国を問わず、伺わせていただきます。そこへ行って感じるのは、あらゆる現場や職場などの「場」が限界集落化しつつあるということです。もっと言えば、すでに限界集落になっています。

限界集落というのは、一般的には農山村漁村、離島・半島、中山間地がイメージされがちですが、決してそういうところだけではありません。この郡山の街のど真ん中だろうが、福岡だろうが、東京だろうが、大阪だろうが存在します。

いったいどのようなところに現れるのか。それ

は人と人との関係や人と人とのつながりが切れてしまったところには、いかなる地域であれ、組織であれ、職場であれ、家庭の中であれ、限界集落なるものは忽然と現れます。

高齢者福祉で使っている言葉も、老若男女問わず他人事ではなくなっています。例えば、いろいろな集まりごと、研修会、協議会をやるたびに、久しぶりに集まったメンバーが、「あら、久しぶりだけど元気だった？」とお互いに声をかけ合っています。これはお互いの安否確認です。もうすでに挨拶ひとつが安否確認状態になっています。

これに限界集落まで加えると、他人事ではない状態になってきています。人が人と話をしていない、つながっていないところは、どうも話をしていない状況があるのではないかと思います。そこで、今日は3人のお話から、「つながる」というところの実際はどういうことなのかを考えてみていただければと思っています。せめて、「未来につなぐ日ごろのつながり・支え合い」というテーマを掲げるからには、ここにいる皆さんもは少しでもつながっていただこうと考えています。3人のお話の合間で、今日ご参加の皆さん方同士、隣同士、前後左右の方たちと、ささやかではありますが、この時間の中でどのようなことをお互いに感じたかお話をする時間を取っていきたいと思っています。

そして、シンポジウムの後、交流会があります。ご参加の方は、ぜひここまでの話をネタに「おたくはどうよ」と、そんな話もしていただきたいと思います。また、大事なのは明日の分科会です。今日ここまで見聞きしたこと、この後のお話も含め、ぜひ問題意識や課題意識、感じたことを分科会につなげていただきたいと思います。いいことばかりではないかもしれませんが、もやもやすることもあるかもしれませんし、ちょっと引っかかることもあるかもしれません。しかし、その引っかけりやもやもやが次の何かにつながるかもしれません。ひょっとしたらそういったヒントが明日あ

るかもしれません。ご自身の中で明日につながる、そんな時間にしていただければと思います。

そして、もう一つ、横につながって、明日につなげてというところで、この大会が終わるとそれぞれの地域に戻られると思います。戻った後にまた各地域の方たちにその話をつなげていただきたと考えています。今からの時間をそういったつなぎの時間にしていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

さて、それでは今から3人の方からそれぞれの日ごろの状況を伺いたいと思います。それぞれのお立場や取り組みから、ご参加の皆さんと考えたり、共有したい課題などをお話しいたします。

では、最初に石巻市社協の鈴木さんからお話ししていただきます。

■「共感」からつながる

○鈴木麻千子さん（以下、鈴木）

私は、震災後、石巻市の障害福祉課で手話通訳をしていました。そのときに耳が聞こえない人たちの生活支援や生活不安を解消するためにそれぞれのお宅に訪問していました。その中で、どうしても近所とのつながりが必要な場面が多々ありました。でも、どのように仕組みをつくっていけばいいのかわからず、悩んでいました。そのようなときに社会福祉協議会の中に地域福祉コーディネーターという仕事があることを知り、やってみようと思志すことにしました。そんな私の事例も含めて、今日は「支え合いって何？つながりって何？」というテーマで進めていきたいと思っています。

地域福祉コーディネーターは、福祉の人材育成や被災者の支援、また市民の新たな地域づくり、地域福祉活動への相互支援を目的に配置されています。

次に石巻市についてお話しします。皆さん石巻の場所はわかりますか。全国から来ていらっしゃるの、ぴんと来ない方もいると思いますが、仙

台が宮城県の真ん中であって、仙台湾の端の方のリアス式海岸の部分です。



ご存じの通り、東日本大震災では津波の影響で多くの被害が出て、現在でもプレハブ仮設やみなし仮設での生活を続けている方がいらっしゃいます。また、今年度に入ってから、復興公営住宅の建設が進み、そこへ移っていく方々も多くなっています。

平成17年4月 1市6町合併

人口 148,922人 60,455世帯
H27.10.31現在

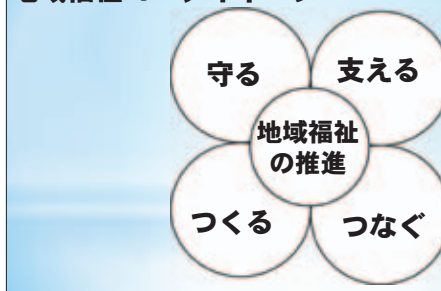
プレハブ仮設 4,650件 9,850人
H27.10.1現在

みなし仮設 3,405件 8,747人
H27.9.30現在

石巻には、沿岸部、内陸部、市街地などさまざまな景色があります。そんな石巻で、私たちは地域の文化や歴史、人口構成、また、暮らしている人の気質を大事にしながら地域の特色に合わせた支援をするという目的と、生活上の課題の解決方法を暮らしている方々と一緒に考える身近な相談者になろうと、この2つを目標として頑張っています。

私たち地域福祉コーディネーターは、“守る”、“支える”、“つくる”、“つなぐ”、この4つをキーワードに活動しています。

地域福祉コーディネーター



私が担当している釜・大街道地区は、東松島市との境にあり、沿岸部から内陸部に向けて被災の状況もかなり違います。現状としては、濃い赤の丸印になっているのが復興公営住宅です。皆さんはアパート型のような大きな復興公営住宅への集団移転をイメージするかもしれませんが、町内会の中に何戸かアパートが建つような、点在した建ち方をしています。

釜・大街道地区

人口：約15,000名 約6,200世帯
町内会数：11
民生委員児童委員：25名

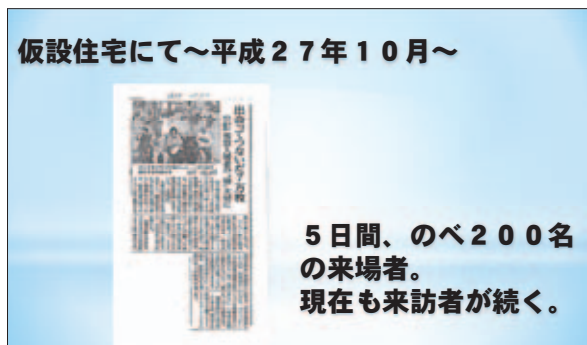


今からお話ししていく1つの事例は、地図のオレンジ色の部分にある5つの仮設住宅の事例です。この5つの仮設住宅には、141世帯の方々が移ってこられました。

平成25年7月の仮設住宅にお住まいの方の言葉です。「ボランティアさんが来なくなったら楽しめる場がなくなっちゃうよ」と。仮設住宅が建った後、そのコミュニティ支援をするということで、多くのボランティアさんに集いの場やイベントをしていただき、仮設住宅の住民の中でだんだんつながりができてきました。すごく楽しんでおり、本当にありがたいと言っていたんですが、時間の経過とともにボランティアさんの数も減ってきて、自分たちでどうやって楽しみをつくれればいいのか

という不安が、この言葉に出ていました。

これは、平成27年10月の記事ですが、今お話しした仮設住宅のことです。この新聞に載ったように5日間で延べ200人にこの仮設住宅に足を運んでいただきました。何をしたかというユニット折りの折り紙展です。皆さんが自分で楽しみを見つけて、取り組んだことです。現在もこの仮設住宅には来訪者が続いています。



石巻市社会福祉協議会は、仮設住宅が建ったときから訪問支援や巡回をしていましたので、各団地の班長さんと顔なじみになっていました。ですので、「ちょっとみんなで集まってみませんか」と声をかけると、「ああ、いいよ」という感じで、スムーズに集まることができました。

そこで私は、「他の団地との違いをみんなで出し合おうよ」とグループワークを行いました。でも、この方法に皆さん疲れてしまい、「こういうことはいいから」と最後には言われてしまいました。



結局は1人の役員さんから「ああいう会議みたいなのはいいんだよ。豚汁を作って、みんなでご飯を食べて顔が合わせられればいいんだよ」と言

われました。それで、おばちゃんたちがおにぎりや豚汁の材料を持ち寄ったり、畑から持ってきたからという感じで、毎月1回みんなで昼食会をしようということになりました。その中で仮設住宅の課題やそれぞれの悩みを話したり、お互いに携帯の番号を交換したり、そういった形の活動が始まりました。私が何かをみんなでしようと持ちかけるのではなく、みんながやりたいことでつながりづくりができたかなと思っていました。



実は、この5つの仮設住宅は、1つの大きな町内会の中に5班ある形だったので、元の町内会にも「仮設住宅の人たちが集まっていますよ」と伝えてありました。

もともとあった町内会では月1回老人クラブの活動をしており、みんなでご飯を食べる取り組みをしていました。

私は、仮設住宅の人たちは何か楽しみが欲しいと言っているし、老人クラブのこの活動につながればいいのではないかと思い、老人クラブの役員さんたちに「仮設住宅の集会所に行ってみませんか」と声をかけました。ところが、「なんで行かなきゃいけないの?」と言われてしまい、私が1人で空回りしたかなという感じになりました。

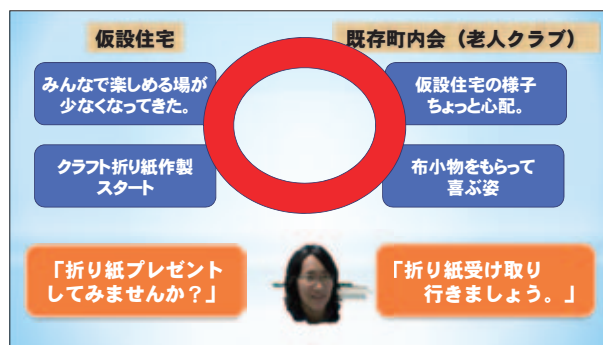


一方で、このときに仮設住宅ではクラフト折り紙が始まっていて、男性もプラモデルをやるような感覚を好んで楽しんだり、凝り性な人はいろいろな小物を作っていました。これが何百個と出来上がったので、今まで来てくれたボランティアさんに送ろうという活動を自分たちでされていたんです。

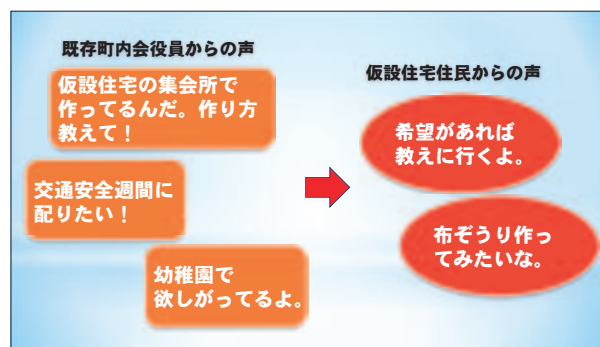
自分たちで始めたクラフト折り紙



今年の2月ですが、老人クラブの活動の中で参加者が作った小物を楽しんでいる情景を目にする場面があり、もう1回チャレンジしてみようと思いました。仮設住宅ではみんなが楽しめる場がなくなってきてしまったと感じており、町内会では、仮設住宅の様子を心配していました。仮設住宅でクラフト折り紙がスタートし、老人クラブでは小物をもって喜ぶ姿を見ていましたので、仮設住宅の人には「折り紙をプレゼントしませんか」と声をかけ、老人クラブには「折り紙でとても素敵なものがあるから、仮設住宅に取りに行きましょうよ」と声をかけました。すると、すぐに「じゃあ、行ってみるかな」となり、私がこれまでいくら声をかけてもだめだったことがスムーズに展開されました。やはり、お互いに興味のあることには反応があり、私たちの目標とする支援というのはこういうところにあるんだと感じました。

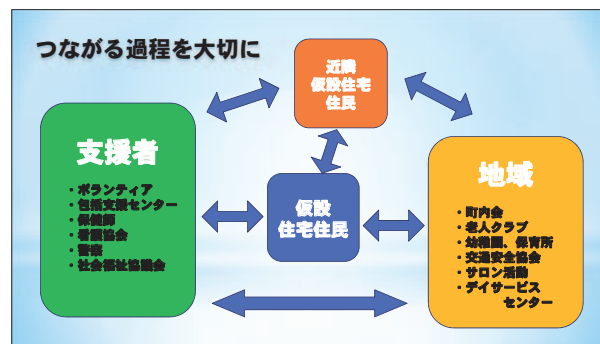


その後は、町内会長さんたちから「幼稚園で欲しいっているよ」というように、地域の方自身がコーディネーターとなって、いろいろなところにつなげてくれました。その声を受けると、仮設住宅の人たちはやる気になり、「じゃあ、私があそこへ行くよ」、「ここへ行くよ」、「鈴木さん、教える場があったら言ってよ」といった声かけになって幅が広がり、「他のこともやってみたいな」という声でまた幅が広がりました。そういった形で、最初にお話した作品展は成功に至ったわけです。



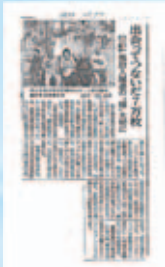
支援する中で2つ大切にしていることがあります。

1つはつながる過程です。お互いが望む姿を考えながら、時間とタイミングを図りながらつないでいくことを心がけています。



もう1つは、変化と成長を共に実感するということです。反省会のようなものをするのではなく、「ちょっと来てみました」とお茶を飲みながら、今できていること、こうしたいなという話をじっくりしています。

変化・成長を共に実感する



「ボランティアさんが来なくなったら、集まって楽しめる場なくなる」
平成25年7月



「自分たちで楽しめる場がつくれて」
平成27年10月

すると、日ごろ仮設住宅の人たちのためだけにやっていたボランティア活動を地域の会館で行い、地域の人たちも楽しめるような場になっていったり、老人クラブの活動の活性化につながったかなと思います。これは、する、されるという関係ではなく、お互いに得がある関係、これこそ支え合いの種ではないかこの活動を見て改めて思いました。

地域の方々も楽しめる場づくり



今後も環境の変化はあると思います。支援の中で「最近あの人ちょっと認知症の症状が出ている」とか、「あそこのお子さんの家庭がね」といった声が聞こえているので、環境の変化に対して、どのようにつながりを持っていくか、生活相談をどのように私たちが受け、どのように地域の人たちと一緒に解決していくかということが今後の課題です。

今回は、つながりが広がった事例を話しました。今日来ていらっしゃる皆さんの活動はどんな人とつながっていますか。私からの投げかけはその一言だけです。私は社会福祉協議会の職員です。「つながりや支え合いって何？」といいながら活動している職員が皆さんの周りにも現れることがあるかもしれません。ぜひそのときには声をかけてみ

てください。

**みなさんの活動は、
どんな人たちと
つながっていますか？**

○加留部

では、会場の皆さん、隣近所3～4人ぐらいで、最後のスライドにあった「皆さんの活動はどんな人たちとつながっているか」話をしてみましょう。

(話し合い)

鈴木さんのお話の中には、お互いのそれぞれのやりたいことをどのように自発性を引き出していくかということから、共感をキーワードにつながっていった事例でした。

引き続きまして、豊島子どもWAKUWAKUネットワークの栗林さんにお話しいただきたいと思います。

■つぶやきをキャッチできる地域へ

○栗林知絵子さん（以下、栗林）

私たちの活動は「貧困」という問題に向き合っています。「貧困」という言葉は経済的な貧困だけを表しているわけではありません。貧困の中には、つながりの貧困、文化的貧困の意味も含まれています。

12年前から子どもたちが伸び伸びと遊べる遊び場を運営しています。その中で昨日から何も食べていない子ども、母親がDVを受けている子どもに会いました。私の知らない環境で暮らしている子どもがこの町にはいる、テレビで見た貧困、ワーキングプア、格差社会といった問題が自分の地域

にもあることをそこで知りました。

それから、貧困問題を学ぶ中でそこで初めて労働の問題、社会構造の問題、雇用の問題、様々な問題があり、その問題が今、自分の目の前にいる子どもたちの問題となっていると考えるようになりました。

子どもは困難を抱えていても、生まれた時からその環境で育っているため、その困難が当たり前で困難だと思っていません。そのため、簡単に「昨日もカップラーメン食べたんだよ」、「お腹がすいている」といったSOSをつぶやいてくれます。そのつぶやきをこちらからキャッチしていくにはどうしたらいいんだろうと思ったとき、地域の中に子どもの居場所をつくろうと思いました。

子どもは基本、家と学校を行き来する毎日で、ほかに居場所がありません。しかし、学校で何か嫌なことがあったり、成績が悪くて勉強が嫌いになったりすると、学校がつまらない場所になってしまいます。

また、ひとり親家庭で夜親が仕事に行ってしまうとひとりぼっちで過ごす、そのような家庭の子どもは家にいたくないとすることが多い。学校や家に居場所がない子どもにとって、最後の行き場所は地域ではないかと思うようになりました。

そこで、地域の大人が子どもの困ったこと、つぶやきを聞けるような子どもが遊ぶ場所、無料で勉強ができる場所、みんなで団らんできる場所をつくりました。

今年、「子どもの貧困対策法」という法律が施行されたことをご存じでしょうか。子どもの貧困は最近よく聞くようになりました。子どもの相対的貧困率を見ると6人に1人が貧困であると言われています。しかし、その問題はなかなか表には見えてきません。だとしたら、子どもを温かく見守るような、地域の大人が親に代わって子どもを支えるような居場所を地域につくることによって、子どもたちの将来は大きく変わるのではないかと考えて活動しています。

活動の中でいろいろな子どもたちに会いました。その中の子どもが「高校に行けないかもしれない」と私につぶやきました。そのつぶやきから、大学

生のボランティアや地域の人たちで学習支援を始めました。その結果、高校に合格することができました。

また、その学習支援をした子どもは母子家庭で、お母さんは仕事でほとんど家におらず、毎日500円をもらってご飯を買って食べていました。今はコンビニも自動販売機もあるので、その子どもは500円さえもらえば困らない状況でした。

その状況に気づいた私たちは、いつも1人で冷たいご飯を食べている子どもが将来大きくなったときにどのような家庭を築くのだろうか、果たして団らんを経験しないまま大きくなっていいのかと思い、地域で団らんを経験できる「子ども食堂」をつくりました。

現在、子ども食堂を運営している場所は、山田さんという方の自宅です。山田さんが定年退職して、「さあ地域に戻って何かやろう」というときに奥さんが亡くなり、息子さん夫婦は遠くへ引っ越ししてしまい、一人暮らしをしていました。

そんな山田さんが「うちを使って、みんなでご飯を食べられる場所をつくりたい」と言ってくれました。それから地域の人たちと子ども食堂を始め、孤食の子どもも、そうではない子どももやってきて、みんなでご飯を食べるようになりました。そこでいろいろなつながりでき、まるで家庭のような雰囲気の中で、「誰でもここにいていいよ」という場になっています。

もし1人の子どもが自立しないまま成長して、死ぬまでに福祉的な制度を利用することでかかる税金は、1人につき1億円といわれています。それだけ日本の経済にも損失を与えてしまう問題です。



つまり、将来私たちの子どもや孫がそういうことを全て背負わなければならない中で、今、大人が何を考えて何をしなければいけないかということと一緒に考えていきたいと思っています。「仕方がない」では済まされないのではないのでしょうか。私は、常に子どもたちの近くにいて一緒に遊んでいます。その子どもたちの声を代弁し、「仕方がない」では済まされない問題をどうしたらいいのか一緒に考えていければと思います。

○加留部

では、今の栗林さんの話を聞いて、皆さん何を感じたのか、どういうことを受け止めたのか感想をまた隣近所の方と話をしてみてください。

(話し合い)

では、ここまでにしたいと思います。いかがだったでしょうか。

それぞれの地域の事情や抱えている課題の程度はいろいろあるかと思いますが、貧困の問題は決して東京だけの話ではなく、いろいろなところとうごめいているものかなと感じています。特に「つぶやき」という言葉がありましたが、「つぶやきは未来に対する予兆だ」と言った方がいらっしゃいます。ひょっとしたらその1つが、1つではないかもしれないということです。

では、続きまして福島大学の開沼さんにお話しいただきたいと思います。

■自分の周囲の問題として捉える

○開沼博さん（以下、開沼）

みなさんのお手元にある大会プログラムの15ページを開いていただくと、テスト問題のようなものがあります。今から少し時間を取りますので、自分の中のイメージで解いてみていただけますでしょうか。

(問題回答) ※1 < p28 >

では、今解いていただいた問題の解説をしていきますが、2つ目的があります。1つ目は、福島のことを勉強していただきたいということ、2つ目は、そこから自分の身の回りの社会課題、地域の問題について、自分の身の回りにもこんなに理解できていなかったことがあったんだ、この問題はどうなっているのかということを考えていただく機会を提供できたらと思っています。

1問目です。避難による人口流出は何%でしょうか。答えは、2.3%です。多くの方が2桁で書いていると思います。もともと福島県の人口は約200万人で、現在、避難している方が4.5万人を切っています。

ここで言いたいのは、避難の問題が小さいということではありません。私たちは「福島」と聞いたときに思い浮かべるイメージと現実ギャップがあるということ、私たちは地域の課題を本当に理解できているのかということです。そして、避難している方が孤立している状況がある一方で、多くの方がこの地域に暮らし続けている状況を捉えなければならないということです。

人口

Q1. 避難による人口流出は何%？

震災前に福島県で暮らしていた人のうち、
現在福島県外に避難を余儀なくされる
人の割合は？

2.3%

・202.4万人(2011/3/1)

・4.7万人(2015/4/1)

※1（問題回答）

福島を知るための15問（開沼博『はじめての福島学』より）

Q1. 震災前に福島県で暮らしていた人のうち、いま県外に避難して暮らしている人の割合は？

（≡「福島が100人の村だったら、震災後に県外で暮らすようになった人は何人？」）

福島県の人口が100人だとすると、県外避難者は [] 人（＝何％？）

Q2. 福島県の米の生産高は、2010年と2011年で、47都道府県中、生産高が多い方から数えて何位？

2010年 [] 位 → 2011年 [] 位

Q3. 福島県では年間1000万袋ほど作られる県内産米の放射線について全量全袋検査を行っている。

そのうち放射線量の法定基準値（1kgあたり100Bq）を超えるのは何袋？（または何％くらい？）

[] 袋／1000万袋（または、1000万袋の [] ％）

Q4. 福島県の漁業の水揚量は、2010年度に比べて、2013年度は何％回復した？

2010年を100%とすると、2013年度は [] ％

Q5. 福島県の材木の生産量（≡林産物素材生産量）は、2010年度に比べて、2013年度は何％回復した？

2010年を100%とすると、2013年度は [] ％

Q6. 福島県の一次／二次／三次（産業別就業者数構成比）はそれぞれ何％？（合計するとほぼ100％です）

一次 [] ％（農林水産業） 二次 [] ％（製造・工業） 三次 [] ％（サービス業）

Q7. 福島県の観光客（＝観光客入込数）は、2010年度に比べて、2013年度は何％回復した？

2010年を100%とすると、2013年度は [] ％

Q8. 2014年11月の福島の有効求人倍率（就業地別）は、47都道府県中、高いほうから数えて何位？

（有効求人倍率＝職を探す人1人に対して、人を雇いたい会社は何社あるか示す数字。1位＝就職先が一番多い）

[] 位

Q9. 正しいと思ったら「○」を、間違っていると思ったら「×」を、丸で囲んでください。

「3・11後の福島では中絶や流産は増えた」[○・×]

「3・11後の福島では離婚率が上がった」[○・×]

「3・11後の福島では合計特殊出生率が下がった」[○・×]

Q10. 福島県の平均初婚年齢は、2013年では、47都道府県中、何位？（1位＝初婚年齢が一番若い）

[] 位

Q11. いま、立ち入りができないエリア（＝帰還困難区域）は福島県全体の面積の何％？

[] ％

Q12. 原発から20キロ地点にある広野町（3・11前の人口は5500人ほど）に、いま住んでいる人は何人？

[] 人

Q13. 双葉郡にできる中間貯蔵施設の容積は、東京ドーム何杯分？

[] 杯

Q14. 福島県の予算は、3・11前に比べて、2014年度は、何倍？

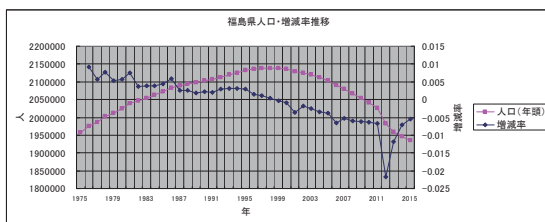
[] 倍

Q15. 福島県の震災関連死は、2014年9月末までに、のべ何人？

[] 人

福島県では人口が減っているという捉えられ方が多いですが、実は、いわき市や郡山市などでは人口が増えており、企業などが進出して地価が高騰していることや医療福祉サービスが受けにくい状況が問題になっています。人口の増減率の点でいうと、震災前のレベルに戻ってきています。だからと言って、問題がないわけではありません。今言ったように、その地域にまた別な問題が生まれていることをどれだけご理解いただいていたでしょうか。

- 人口増減率：震災前水準
- 拠点的地域への人口集中：いわき・郡山などで地価高騰



次に米の収穫量について、正解は4位から7位です。震災前に米を生産していた人のうち85.8%は現在も生産できていますが、残りの15%は4年経っても再開できていません。もともと農業は厳しい状況にありましたが、震災・原発事故によって、担い手不足がさらに厳しくなっていることが大きな問題です。

農業

Q2. コメの収穫量の回復は？

2010年4位
→2011年7位
85.8%

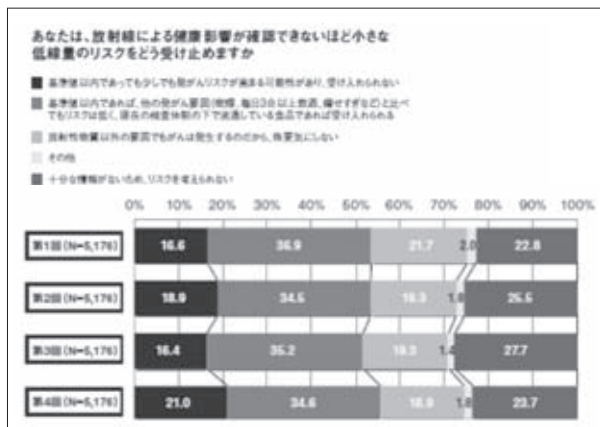
- 44万5700t(2010)
- 38万2600t(2013)

放射線の問題を思い浮かべる方もいると思います。次の問題ですが、福島県は1年間約1,000万袋の米が生産されていますが、全量全袋検査で法定基準値を超えた袋は1年間で何袋ぐらいでしょうかという問題です。答えをすばり知っている方も結構出てきております。その知識のギャップが非常に重要なのですけれども、2014年になって、実はゼロというところまで来ました。

食についての放射線

Q3. 年間1000万袋に及ぶコメの全量全袋検査の結果、法定基準値超えは何袋？

ここは非常に認識のギャップがあるのかなと思います。やはりニュースで福島の問題と聞くと、福島の農作物から変なのが出たよということばかりがクローズアップされ、それがあたかも全体かのようになるわけです。白い紙の中に黒い点が1点あって、そこをぐっとクローズアップしたら紙全体が黒いかのように見えるわけですが、必ずしもそうではないということです。だから問題がないというわけでももちろんなく、今でも若干出してしまうところ、そして、信頼回復はなかなかできていないという福島の農業に対する問題も、まだ継続的に見ていく必要があるでしょう。



消費者庁が毎年取っている福島県1次産品に関するアンケートの中で「健康に影響が確認できないほど低線量リスクをどう受け止めますか」という問いがあります。

注目したいのは、一番左側の黒い部分ですが、基準値外であっても、つまりデータの上では示されても、がんのリスクがあるから受け入れられないという方がだいたい2割ぐらいいらっしゃいます。しかも、これは変わっていないということです。時間の経過とともに変わるものでもないということです。おそらくこれは持続化すると言えるでしょう。

ただ、一方で、8割の方は応援してくれるんじゃないかと思っています。つまり、向かって左の黒いところ以外の部分の方というのは、そもそも気にしていないよとか、福島のをむしろ食べて応援したいよという方、あるいは不安はあるけれども、ちゃんと説明されたら自分は食べてもいいかなという方だったんですね。そういったところの溝があります。ぜひいろいろな状況をご理解いただければなと思っています。

次に漁業です。水揚げ量の回復はどのぐらいでしょうか。答えが2つあって、福島に水揚げをした量でいうと9%、福島の漁師さんが水揚げしたのが57%です。なぜ答えが2つあるかというと、福島の漁師さんは魚をとるようになってきたけれども、福島には水揚げができませんよということです。ここに一番大きな課題があります。福島に揚げてしまうと値段がつかない。だから福島以外に揚げてしまおうということになっているわけです。そういう中でこういう数字のギャップが出て

きているということです。

漁業

Q4. 水揚げ量の回復は？

9% 57%

- ・福島県内への水揚げ: 9%
- ・福島の所在地を置く漁業経営体: 57%

4つ目です。林業の生産高の回復は97.7%です。なぜ回復が早いのかというと、新設住宅着工戸数と書いていますけれども、住宅を建てたいという人が震災後ぐっと増えているんです。そういった建設バブル的なものがあるということが一つの要因です。

林業

Q4. 林業(木材)生産の回復は？

97.7%

- ・2013年 林産物素材生産量
- ・建築着工統計 (福島県新設住宅着工戸数)

月別着工戸数	
2009年度	9604
2010年度	8912
2011年度	8093
2012年度	12421
2013年度	15954

1次、2次、3次産業の割合、これはどうでしょう。1次産業は7.5%です。2次では3割、3次が6割という感じです。

これもまたやはり福島の問題という、イメージがどうしても1次産業を通してばかりになってしまいがちですが、実はそれだけの問題ではない、もっと広い視野で見ていきたいと思います。

産業

Q5. 一次／二次／三次産業の割合は？

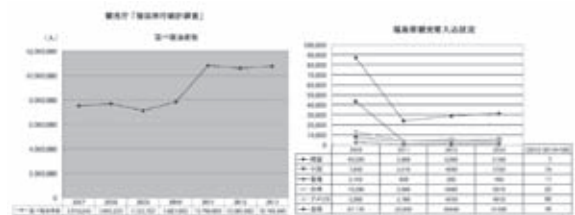
一次産業：7.6%
二次産業：29.2%
三次産業：60%

では、もっと広い視野で観光業を見ていくとどうでしょうか。これは8割5分ぐらい回復しています。ただ、あとの1割5分はどうやらなかなか回復しづらくなってきているということが見えています。理由が2つあります。1つは学校教育旅行、つまり修学旅行などは、2014年になっても震災前の半分ぐらいしか回復していない状況があります。もう1つが外国人の方です。やはり子どもたちにとって、あるいは外国の方にとって、福島イメージはなかなか回復しない。観光に行くというところでは選択されない状況が続いています。

観光業

Q6. 観光業の回復は？

84.5%



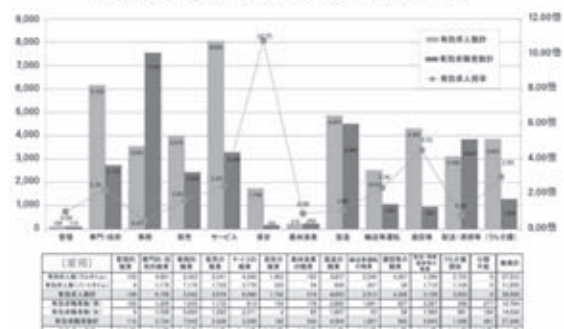
次は有効求人倍率です。福島県はずっと1位です。これも大きく2つポイントがあります。1つはやはり土木建設業です。大きな公共事業がいくつも動いており、そこで雇用が発生しているのが1点、もう1点が医療福祉関係です。

雇用・労働への影響

Q8. 都道府県別の有効求人倍率(就業地別)は全国何位？

1位

常用有効求人数及び常用有効求職者の状況(平成26年11月)



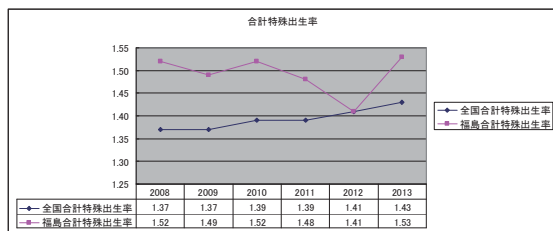
問9ですけれども、これは出生率が下がったというもののだけが正しいんです。中絶や流産は、厚生労働省や福島県立医大が震災前から全国統一の同じ基準で測っているところで明確に増えたという傾向が出ておらず、数字だけ見ればむしろ微減している状況です。離婚率も、全体として見るとむしろ絆を確かめ合ったというような傾向が出ています。

出生率ですけれども、これは確かに下がりました。赤いラインが福島県の出生率の変化です。2011年にガクッと下がっています。また、注目したいのは2013年で、これはV字回復しています。さらに、実は2014年もここから上がって1.57までいっています。ですから、震災前より子どもが生まれるような状況になっている。福島県は子どもを生み育てることに意欲が高い県、震災前から高かったのですけれども、震災前より高くなってきているということが現状です。

家族・子どもへの影響

Q9.
「3・11後、中絶や流産は増えた」
「3・11後、離婚率が上がった」
「3・11後、出生率が下がった」
のうち正しいのはどれ？

・「3・11後、中絶や流産は増えた」×
・「3・11後、離婚率が上がった」×
・「3・11後、出生率が下がった」○



ほかの数字もここに出しておりますので、気になる方は10問目以降もご覧いただければと思います。

その他の数字

- ・福島県の平均初婚年齢の全国順位は？
1位
- ・いまも立ち入りができないエリア(=帰還困難区域)は福島県全体の面積の何%ぐらい？
2. 4%
- ・原発から20キロ地点にある広野町(3・11前の人口は5500人ほど)には、現在何人ぐらい住んでいる？
5000人以上
- ・双葉郡にできる中間貯蔵施設には東京ドーム何杯分の容積？
18杯分
- ・2014年度の福島県の予算は3・11前の何倍ぐらい？
1. 9倍
- ・福島県の直接死:震災関連死は何人ぐらい？(2015/3末)
直接死:1612人(2015/3) 震災関連死:1884人(2015/3)

最後にまとめの話になります。皆さんの周りでもイメージとだいぶ違う現状というのがあると思います。ステレオタイプに惑わされずに自分自身の身の回りの課題を再度捉え直して、その解決をしていくにはどうすればいいのかということを考えていただければと思います。

○加留部

言われてみれば確かにそうかなということだったり、初めて知るようなことも多くあったかと思っています。皆さんで自身の地域をどれぐらいで存じですか。またちょっと近所と話をしてみてください。よろしくお願いします。

(話し合い)

では、ここまで明解なところまではないかもしれませんが、ただ意外と自分たちの場というものをどのように客観的に捉えているかというところは、今、求められているところでもあります。

今年、地方創生のという中で必ず言われているのは、自分たちの地域のことを少し数字で見емしょうと、何となくの感覚ではなくて、実際はどうなんだということの実際を見てみましょうかということです。数字はあくまで数字ですから、それがまたどう変化するのか我々の見立て一つというところもあるかもしれませんが、少なからず今どうなっているんだろう、これまでどうなっていたんだろうというところを垣間見てみようというところでは大事な視点だと思います。

(ここから会話形式)

○加留部

三者三様、皆さま方に投げかけをしていただきました。今回少しシンポジウムのやり方を変えたのは、皆さま方にも少し考えていただきたいという趣旨です。我々は、いろいろな状況、課題、疑問、いろいろなものを抱えながら活動していたり、向き合っている状態があるということです。そういった状況を一つの例で終わらせるのではなく、ご自身の地域や場に引き戻してみたときに、果たしてそれは他人事かと、あるいは、引き戻してみるとひょっとして似たようなことはないだろうかと、そんなことを少し考えていただければと思っています。

鈴木さんの最初のお話に対して、栗林さんと開沼さん、どのような感想を持たれたか一言ずついただければと思います。

では、栗林さんからいきましょうか。

○栗林

やはり知っている人のつぶやきからみんなが考えて、そのつぶやきに対して何ができるか考えるというところは同じだなと思いました。

○加留部

開沼さんいかがでしょうか。

○開沼

人が交流するというのはとても難しいことで、しばしば勘違いしてしまうのが、場をつくれればそれで人が動くんじゃないかということです。でも、そうではないと思います。人が動く仕掛けをつくらなくてはだめで、それが折り紙であったり食べ物であったり、試行錯誤されてきたということがとても勉強になりました。私自身も、次に何か起きたらどういうことをしようかなというところで参考になりました。

○加留部

では、鈴木さん、今お二人のお話を聞かれてい

かがでしたか。

○鈴木

地域福祉とかそういったことが実はわかっているようでわかっていない面が多くて、私は皆さんのような活動をしている方の声をよく聞くことを一生懸命しようと思っています。皆さんの活動も一番最初はこういうきっかけから始めたということだったりとか、何かがあるはずだと思うんです。どういう思いからやり始めたのかを大切に、その思いから派生していく仕事かなと今は思っています。

○加留部

皆さん方もどこかに何かきっかけがあったと思います。最初はどうだったっけと思い起こせないこともあったりしますから、時々、こんなこと何でやっているんだろうと少し考えてみるのも大事なこともかもしれません。

今度は栗林さんの話に対して鈴木さんはどんなことをお感じになりましたか。

○鈴木

つぶやきのことを言っていたいたんですけれども、やはり似ているなと思ったところと、少数派の声、子どもの声をどうやって聞くか。その声なき声や小さい声をどうやって大きくしていくかというのが私もあるほど思いながら、聞かせていただきました。



○加留部

開沼さんは、いかがでしょう。

○開沼

見えないような貧困、あるいは、見えないような問題があるというのを常に掘り起こしていくということが重要で、その意味でとても貴重な活動をされているかなと思いました。

○加留部

栗林さんいかがですか。

○栗林

子どもたちからは見えないし、親も見えないようになるべくひた隠しにしている。親御さんにいろんなことを語ってもらうんですが、そういった中から見えてきたことを可視化する、なるべくいろいろな人たちに伝える、そうすることによって、目の前の地域の子どもがそんな思いをしているんだっただらというところで、地域がつながったり、何か次の場ができていくのかなと思っています。

親御さんが語ると、今までの苦労がすごく整理されて、整理する中で、あのときよりも今のほうがとても楽だとか、話しているうちにいろいろな気づきができて、そこからまた一歩前に出たりとか、親同士が話す場があるというのはすごくいいねということで、親御さんたちが自ら話す場をつくりました。そうやって当事者の人たちが自分たちのことを語って、こういうところを変えてほしい、こんな制度が本当に役に立ったということ、やはりきちんと真摯に聞いて、そういうものが大きくなったときにもしかして大きく社会が変わるんじゃないかなと思っています。

○加留部

鈴木さんは、開沼さんの話を聞いていかがでしたか。

○鈴木

数値化することで、福島の実況が少し視点が変わった形で理解ができるなと思いました。

○加留部

栗林さんはいかがですか。

○栗林

こうやって数値で知るということは、すごく明確でわかりやすく、そこから何か考えるということとても有効ですし、この数値をこうしていこうというように目標も立てやすいなと思いました。

○加留部

開沼さん、いかがでしょうか。

○開沼

この数字の裏に私はたくさんの言葉を聞いてきた実践があったというふうに思っています。

聞く中で思うのが、それって震災後に起こったことなのかなということです。若い人がどんどん出ていったと言われますが、震災前も若い人は都会に行ってたし、この辺も空き家だらけになっていたし、でも病院は混んでいたし、農業や漁業も苦しかった。それに輪をかけて、さらに上乗せする形で原発事故や地震・津波というのが来ているということを考えていかないと、これは、何でも3.11のせいでこうなっているんだという話で課題を見えなくしてしまいます。そうではない部分、震災前からずっと解決できなかった、あるいは福島でなくても、被災地ではなくてもある問題で私たちは解決できないでいたから、これにどうやってアプローチしていこうかということを考えなくてはという気づきから、こういう数値を使うようになりました。福島から遠いところから来られている方もいると思いますが、そういった方も福島で起こっている問題と自分の足元とは地続きなん



だなということを感じていただければと思っています。

○加留部

それぞれ地域と立ち位置が違って提供した話題は違いますが、お互いのことをいろいろ話してみると、感じ合うところがあったり、思うところもいろいろあるかと思うわけです。おそらく会場の皆さん方も今の3人の方の中で、それぞれの距離感は少しあるかもしれませんが、それなりに思うところがあったのではないかなと思うわけです。

では、最後に一言ずつコメントをいただきますよう。

○鈴木

皆さんの周りにも、私のような職員、私のように皆さんをどうやって支援したらいいか、応援したらいいか考えている職員がきついていると思うんです。その職員にぜひ声をかけてもらえればなというのが私からのメッセージです。

○加留部

では、栗林さん、お願いいたします。

○栗林

知らない子どもにも声をかけているうちに知っている子どもになって、知っている子どものことは放っておけなくなる。何か困っていたら何かしなくちゃと思うようになる。それは全国どこでも同じなのかなと思います。アンテナを高く、10年後、20年後のために何ができるか、これからも地域でも考えていただけたらと思います。

○加留部

それでは、開沼さんお願いします。

○開沼

見えていなかった課題がぱっと見えた瞬間、思っていたものと違う現状が見えてきた瞬間、何か気持ちが盛り上がったりするときがあると思うんです。なぜかという、これを解決できるかもと、

ちょっと取っ手をつかんだような気持ちになるかもしれないですね。こういうことだったらこの部分を攻めていけばいいんだといったような思いを持つことはとても重要で、その前の段階でとどまってしまうがゆえに解決できない問題はともあるのだと思います。どこに課題があるのか自体をしっかりと課題として認識していくということが重要だと思います。

○加留部

私もお三方の話を聞いて、思い出した言葉があります。これは、山形市役所の後藤好邦さんという方が言っている言葉ですが、「地域は知域」と。お互いに知り合うという意味での知域ということもありますし、データという形で知域ということもあると思います。知り合うということもあるでしょう。果たしてどれだけ知り合えるかということもあるかと思っています。そういう意味で地域の捉え方は、どれだけ知っているか知られているか、あるいは自分が知識を持っているか、知的な関心があるかとか、いろいろなものを内在している言葉だなと感じています。ぜひ皆さんもそれぞれの地域にお戻りになったときに、まずお互いにどんなことを考えているか、そこに少し客観的な話題を加えてみたとかいう何か工夫を加えながら、新しいつながりづくり、支え合いの場というものをつくっていただければありがたいと思っています。課題をしっかりと課題として認識していくということが重要だと思います。



交流会

交流会は、メイン会場ビッグパレットふくしまの1階多目的展示ホールCで開催し、全国から約400人が参加しました。

オープニングでは、郡山市にあるあさか開成高校フラダンス同好会 ALOHA のみなさんがフラダンスを披露。福島県出身であるタレントのなすびさんの司会のもと、福島の郷土料理であるいか人参やこづゆ、おいしいお酒を味わい、和やかな雰囲気の中、参加者の皆さまが交流を深めた90分でした。



オープニング あさか開成高校フラダンス同好会 ALOHA のみなさんによるフラダンス



開会の挨拶
「広がれボランティアの輪」
連絡会議会長 山崎美貴子



乾杯発声
郡山市長 品川萬里氏



多くの方々に参加いただき、交流を深めました。



郷土料理の「いか人参」や「こづゆ」、りんご「サンふじ」なども並びました。



福島の地酒コーナーもありました。



じゃんけん大会で盛り上がりました。



閉会の挨拶
全国社会福祉協議会
常務理事 山田秀昭

分科会

分野	テーマ	会場
A たすけあい・ 支え合いの まちづくり	1 平成27年度 ふれあい・いきいきサロン全国研究交流会 ～再発見！サロンがもたらすたくさんの「福」～ 午後あり	ビッグパレット ふくしま
	2 やさしい日本語ワークショップ ～誰にとっても易しく優しいコミュニケーションの手段～	
	3 子どもたちと一緒に地域文化でまちおこし	
	4 地域の中のおたがいさま ～住民主体の支え合い・助け合いのまちづくり～	
	5 脱!! 貧困 ～学習支援という一つの方法～	
B つながり・ 次世代 ボランティア	1 地域で育むふくしのこころ	日本大学工学部（一部JICA二本松訓練所）
	2 働きながら取り組むボランティア活動	
	3 国際的なつながりを広げ、強化し、この経験を国内で活かす【会場：JICA 二本松訓練所】	
	4 人と人をつなぐレクリエーションボランティア	
	5 次世代を担う若者のチカラを未来へ ～つなごう、活かそう、地域で輝く若い力～	
	6 “協働”のいろはを学ぶ ～多様な団体間のつながりで生み出す課題に挑む力～	
	7 子どもたちにおもちゃのすばらしさと遊びのたのしさを ～震災後の活動を中心に・おもちゃ図書館ボランティアの役割と活動の原点～	
C ふくしまの 今と未来	1 避難所運営とボランティア ～東日本大震災直下の大規模避難所・あの日あの時～	
	2 災害時の要援護者支援のあり方を考える	
	3 協働型災害ボランティアセンターの運営を考える	
	4 広域避難・県外避難と福島	
	5 避難者の“今とこれから”を支える人たちと、話そう・知ろう・考えよう	
	6 福島の子どもの保養～ありがとう 子どもの未来につなげよう～	
	7 防災や減災をもっと身近に！	
	8 被災者支援に役立つ知識と技術を学んでみよう	
D フィールド ワーク	1 フィールドワーク～大沼郡金山町・昭和村～ 過疎と少子高齢化に悩む集落、その暮らし方 ～限られた社会資源を最大限に引き出すためには～ 午後あり	現 地
	2 フィールドワーク～会津若松市～ 歴史と伝統の会津。街を歩きながら、「おもてなし」を体感！ 午後あり	

平成27年度ふれあい・いきいきサロン全国研究交流会 ～再発見!サロンがもたらすたくさんの「福」～

参加者数 108名

基調講演、コーディネーター

▶ 都築 光一さん (東北福祉大学 教授/宮城県)

事例発表者

▶ 小松崎光正さん、小松崎登美子さん (たまり場・たろう 代表/茨城県)

▶ 久志本芳佳さん (さいたま市三宮地区社会福祉協議会 地域福祉コーディネーター/埼玉県)

▶ 菊池 亮さん (釜石市社会福祉協議会 地域福祉課長/岩手県)

▶ 遠藤 政子さん (郡山地区社会福祉協議会久留米支部 庶務/福島県)

▶ 桑原 順子さん (郡山地区社会福祉協議会久留米支部 在宅福祉サービス部副部長/福島県)

主催：社会福祉法人郡山市社会福祉協議会/全国社会福祉協議会
助成：公益財団法人みずほ教育福祉財団



1. 概要

「ふれあい・いきいきサロン」は、いつでも・誰でも・自由に参加できる、楽しい仲間づくりの活動として全国的に展開されている。この活動は、ご近所同士で交流することによって、『顔の見える』人と人とのつながりができ、地域コミュニティづくりや心身の健康維持などの様々な効果があり、大いに期待されている。東日本大震災からの復興支援では、避難した方々の地域コミュニティづくりにも役立てられた。

この分科会では、今までの活動を振り返るとともに、サロン活動の原点や効果について学び合い、多様なサロン活動が広がり人と人とが繋がっていくことで生まれる『地域の絆』について、ともに考えた。



2. 主な内容

基調講演

「地域の結びつきを強めよう

～お互いに支え、支えられる地域をめざして～ 都築 光一さん

〈充実が求められる地域福祉活動〉

近年の人口動態や世帯構造の変化をみると、「高齢者のみの世帯」や「一人暮らし世帯」が増加しており、買い物・掃除・洗濯・調理などといった日常生活支援のニーズが高まってきている。そういった変化に伴い、今後は地域づくりのあり方を考えていく必要がある。また、高齢者だけでなく、福祉サービスを利用している人や、地域で暮らす知的障がいや精神障がいのある人たちが集うサロンを今後より一層推進していく必要がある。福祉サービスを利用している地域住民とつながっていることが重要である。



〈地域づくりに必要なサロン活動〉

外出をすることや交流をすること、地域のなかで役割を持つことは、健康の増進や介護予防につながる。また、参加者に仲間意識が芽生え、お互いに支え合うことができるといった効果もある。自分たちの地域をこれからどうしていくのかということを地域住民一人ひとりが考える必要がある。

〈地域交流を進めるための条件と地域自慢〉

- ①気軽に参加できて楽しいこと
- ②負担感がないこと
- ③役割があること
- ④自分たちがやりたいと思うこと

地域の魅力を伝え、若者に夢を！⇒福祉のまちづくりの視点は不可欠

〈これからのサロン活動〉

高齢者と子どもとの世代間交流は、地域への愛着心を育むことに通じる非常に貴重な取り組みである。そしてあらゆる人を「例外」としない地域づくり、これが地域の「豊かさ」を示すものでもある。そういった取り組みが今後ますます必要になってくる。以上のことを踏まえ、今後のサロン活動は次の世代に誇れる地域をいかに残すかということが課題である。

パネルディスカッション

「サロンでつながる人と地域

～多様なサロン活動がもたらすたくさんの「福」～

事例発表

●小松崎光正さん、小松崎登美子さん

夫の介護生活をきっかけに、平成9年に在宅での介護者を応援するおしゃべり会「ほっとひと息 井戸端会議」を下館市（現、筑西市～平成17年に合併）で開催。その後、多様な世代、多様な価値観を持つ地域住民が集まる場として、コミュニティサロン「たまり場・たろう」をオープン。

〈成果〉

「たまり場」で人と出会い、ふれあい、認め合うことで様々な絆が生まれ、訪れる人たちが輝いて生きようになった。そして、「困ったときはお互いさま」という自然体で支え合う「共生・共助」の気持ちが芽生えた。

●久志本芳佳さん

さいたま市三室地区社協では、平成19年頃からサロン活動に力を入れており、このサロンは参加者の声と在宅介護支援センターの想いが形になり生まれた。参加者はこのサロン活動に生きがいを持っており、活動の合間におしゃべりを楽しんでいる。

〈成果〉

サロンでは役割があるため参加しやすく、また、「参加者」ではなく「ボランティア」として活動しているため、「誰かの役に立っている」という意識が芽生え、生きがいを感じるようになった。また、参加者を高齢者に限定していないため、若い主婦層の参加もあり地域福祉活動へ参加するきっかけになっている。

●菊池 亮さん

東日本大震災の被災地では、時間の経過とともに深化する傾向にある「仮設暮らしの弊害」や、「コミュニティの低下」、「孤立」といった被災者の現状に対し、地域支援としてのサロン活動を様々な工夫をしながら展開している。

〈成果〉

不安感から肯定感へ（傾聴・気持ちを受け止めること）、孤立感から連帯感へ（近所の助け合いの大切さ）、他人事から自分達事へ（自分のこととして捉える）

●遠藤 政子さん、桑原 順子さん



「すべての人が住みやすく安心して暮らせるまち 久留米」を目指し、地域ぐるみで地域福祉活動を行っている。また、地域住民にとって公民館は暮らしの拠点となっており、「顔が見える居場所」となっている。

〈成果〉

参加者は…とても楽しみにしている！

- ①歩いて元気になる
- ②「出掛ける」という意識
- ③人と会い、笑う（みんなと愉快地笑い合う！）

担い手は…活動がとても楽しい！

- ①参加者にいかに楽しんでもらえるか
- ②笑うことは健康につながる
- ③介護予防につながっている

ワークショップ

「サロンは出会い・気づき・学びの場

～もっと地域とつながろう～

ファシリテーター 都築 光一さん

●テーマ1 サロン活動による「福祉のまちづくり」

①地域で孤立していて、地域の行事や集まりに参加しない人を、どのように地域の輪の中に巻き込むか。

⇒まずは本人の話を聞いて、何が原因なのかを一緒に考え、信頼関係を築いていく。そして、その解決方法を一緒に考えていくことが必要である。

②福祉サービスを必要とする地域住民が地域の行事や集まりに参加するためには、どのような条件や企画だとよいか。

⇒まずは対象者や地域を知り、土台をしっかり作っていくことが大切である。人が集まりやすいような、今までに自分達が経験したことがある企画にする。

③今まで地域の行事や集まりに参加していた人が参加しなくなった場合、再び参加してもらうようにするためにはどうすればよいか。

⇒無理強いせず本人の意見を尊重し、本人と信頼関係を築く。また、周知方法や内容の工夫、サロンの雰囲気づくりをする。

●テーマ2 サロン活動と福祉サービス及び制度活用

①サロン活動や地域住民の主体的な福祉サービスの活動によって、どのような効果が期待できるか。また、どのようにして発展させるか。

⇒仲間づくりや閉じこもりの防止が期待できる。発展するためには、笑顔であきらめず、さまざまな人を巻き込んでいくことが大切である。これがボランティアの底力！

②住民が実施主体となる介護予防を目的としたサロン活動は、どのような住民組織によってどのように企画運営することができるか。

⇒町内会、民生委員、ボランティア、社会福祉協議会、地域包括支援センター、行政など。



3. 担当者のコメント

地域のつながりや地域福祉活動の重要性が高まる中、あらためてサロン活動の効果や役割について振り返り、住民相互の交流や地域への愛着心を育むことの大切さを考える機会となった。

また、全国各地でサロンを実践している団体から多彩な事例を学び合うことで、人と人とのつながりから生まれる「地域の絆」について理解を深めることができた。参加者は、お互いに情報交換をしたり積極的に交流をしたりと、今回の学びを自らの地域で活動するときのヒントにつなげていた。今後、地域包括ケアシステムの構築に伴い、地域福祉活動がさらに重要性を増していくことが考えられることから、住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けられることをめざして、それぞれの地域の実態にあった地域福祉の推進に努めていく必要を感じた。

専門部会委員／添田 祐司（郡山市社協）

運営スタッフ／渡邊 直子（郡山市社協）

佐藤 晴美（磐梯町社協）

鈴木 葉子（会津坂下町社協）

やさしい日本語ワークショップ ～誰にとっても易しく優しいコミュニケーションの手段～

参加者数 16名

講師

▶ 米勢 治子さん (東海日本語ネットワーク 副代表/愛知県)

サブ講師

▶ 三田眞理子さん (こおりやま日本語教室 代表/福島県)

▶ 永島 恭子さん (こおりやま日本語教室 事務/福島県)

外国人アドバイザー

▶ 小島 梓さん、関根 エリさん、磯 秀玲さん
(つばさ～日中ハーフ支援会/福島県)

▶ 原バッサダさん、村上 友子さん、石井 伽奈さん
(国際交流の会かみあ/福島県)



1. 概要

地域には、子どもやお年寄り、異なる文化背景を持つ外国出身者など、様々な人たちが暮らしている。これらの人たちが十分なコミュニケーションを図るための手段の一つとして「やさしい日本語」を取り上げ、その持つ意義やその基本的な作り方を学んだ。その後、町内会で実際に配布された3つのお知らせ文を、外国出身のゲストと一緒にわかりやすい日本語に直すワークショップを行った。

その結果、参加者に対して、外国出身者とのコミュニケーションにおいては、通訳や翻訳での対応を考えるばかりでなく、誰もがちょっとした配慮でできる「やさしい日本語」という手段もあることや、外国出身者にとってわかりやすい日本語は、子どもやお年寄りなど日本人にとってもわかりやすい言葉であり、ユニバーサルデザインの視点から有意義であることに気付いてもらうことができた。



2. 主な内容

基調講演「地域に広げ「やさしい日本語」 米勢 治子さん

「やさしい日本語」とは、言わば相手の外国人の状況を思いやる優しい気持ちで、相手の外国人が理解できるよう配慮された易しい日本語のことであり、外国人住民への対応に必要なコミュニケーションツールである。これは外国人だけでなく、子どもやお年寄りへの対応にも有効である。

「やさしい日本語」の作成には、一文に一情報とする、二重否定をしない、あいまいな表現をしないなど最低限のルールはあるが、外国語への通訳・翻訳と異なり誰にでもできる可能性が高い。

もちろん、「やさしい日本語」は万能ではなく、状況に応じて多言語対応も必要であるが、今後外国人住民との関わりが増える中、より大切なのは、外国人に興味関心を持つことと、「やさしくない日本語」の存在に気付き、「やさしい日本語」を使い広げることである。

ワークショップ

6グループに分かれ、それぞれのグループに1名の外国人アドバイザーが入り、町内会の回覧板で回ってきた下記の3つの文書を「やさしい日本語」で書き換えるワークを行った。

○平成27年度クリーンアップ作戦の実施について (A・Bグループ)

○環境エコ活動のご協力について (C・Dグループ)

○上若青年太鼓台廻環への寄附のお願い (E・Fグループ)

共有

参加者は、まず自分たちの成果品に工夫した点などを付箋に書いて貼った。次に、他のグループの成果品を見て回り、その成果品の優れている点や工夫されている点などを付箋に書いて貼った。

外国人アドバイザーからの助言

○何をやるのか、主題を一番上に書いてほしい。

○前文の長いあいさつ文は不要。

○漢字がわからないので、ふりがなを付けてほしい。

○「午前」→「AM」、「小雨決行」→「大雨中止」、「資源回収」→「リサイクル」、「環境美化」→「きれいにする」などわかりやすい言葉に書きかえてほしい。

○あいまいな表現はわからない。例えば、寄附の「気持ちいい」は、いくらならいいのかわからないので「1口1,000円以上」と、はっきり書いてほしい。

○カタカナの「クリーンアップ」などは、漢字の「清掃」に書き換えてもらった方がわかる。

○「廻環(かいかん)」など地域特有の言葉は、まったくわからない。

○文字情報だけでなくイラストも入れてもらえるとわかりやすい。

3. 担当者のコメント

講師から講演を聞いた後に、町内会の回覧板で回ってきた文書を実際に書き換えるワークをしたことで、参加者の理解がとても深まった。さらには、外国人アドバイザーが自分の経験からわかりにくい日本語の表現をアドバイスしたことで、日本人では気づきにくい点を明確にすることができた。

外国人アドバイザーにとっては、自分の経験をワークに活かすことができたことで、自信に繋がったのではないかと。

なお、分科会終了後は、参加者全員が自発的に一つのテーブルに集まって一緒に昼食を取ることで、参加者と外国人アドバイザーの交流も行うことができた。

専門部会委員/幕田 順子(福島県国際交流協会)

運営スタッフ/渡部 繁信(三島町社協)

高橋 好憲(会津美里町社協)

子どもたちと一緒に地域文化でまちおこし



参加者数 45名

全体進行

▶大和田 新さん (O・A企画 フリーアナウンサー／福島県)

発表者

▶菅原 晃さん (鬼柳鬼剣舞保存会 代表／岩手県)

▶星 長一さん
(檜枝岐歌舞伎 千葉之家花駒座 座長／福島県)

▶遠藤 光枝さん
(岩代国郡山うねめ太鼓保存会 幹事／福島県)

発表団体

▶岩代国郡山うねめ太鼓保存会 小若組

1. 概要

少子化や核家族化が進行する中、地域の未来を担う子どもたちのふるさとを愛する心・アイデンティティを育むために、家庭だけでなく地域も主体となって関わる必要がある。

この分科会では、人と人とのつながり、人と地域とのつながりを大切にしながら多世代で取り組む、地域の伝統文化の継承を通じた地域おこしや子どもの健全育成に向けた地域の関わり方について考えた。

事例や実演発表を通して、世代間交流によるふれあいの中で、地域で子どもを育む事の重要性について再認識するとともに、それに伴う地域活性化の向上について学んだ。



2. 主な内容

●大和田 新さん 本大会の会場であるビッグパレットふくしまでの「ビッグパレットの奇跡」や、阪神淡路大震災における神戸市長田区での地域力から復興につながった事例を通して、地域の絆の大切さを説明した。

そして、その絆を繋ぐ「お祭り」や、それに伴う伝統文化の継承の重要性について、本分科会を通じての気付きを参加者それぞれが地域に持ち帰り、活かしていただきたいという導入から分科会が展開された。

●菅原 晃さん 北上市では荒れた中学校へ地域住民が介在し、伝統芸能を始めとする多岐に渡った授業を行った。

地域住民が真剣になって指導した結果、最初は挨拶すらなかった生徒たちは変わり始め、今では地域を支える存在にまで成長してくれた。子どもたちにとって地域に顔のわかる大人の存在が大切である。

また、地域の共同体の中で受け継がれてきた伝統芸能は心の故郷であり、地域を支えるチカラである。伝統芸能を通じて芸を習い、技を鍛え、その体験から地域を知り、精神を育てる。そして、高齢者が子どもたちに伝統を教えることによって、教科書にはない知恵を継承し、そこから人生の先輩を尊敬する精神が芽生えるのである。

●星 長一さん 檜枝岐村では観光資源として、長い歴史のある檜枝岐歌舞伎による村興しをしてきた。

学校での総合学習の授業で地域住民が指導者となり子どもたちに教えている。村民が自分の子どものように接することにより、村が一つの家族のように繋がる。そして、学校での取り組みが地域の関心を高め、その伝統芸能の重要性の理解が若い世代にも広まったのである。

また、中央の歌舞伎と村独自の歌舞伎の差別化により、アイデンティティがより確立されている。檜枝岐歌舞伎にしかない魅力を通して、自分の村を見つめ直し、誇りを持ってもらえるよう伝えていきたい。

伝統文化を継承することは、誇りと郷土愛を高め、地域再生としての大きな力となっているのである。

●遠藤 光枝さん 岩代国郡山うねめ太鼓保存会は采女伝説発祥

の地で活動しており、太鼓は演奏者の気持ちを表現する楽器であるので、「礼に始まり、礼に終わり、明るく楽しく元氣よく！」をモットーに活動している。

指導するにあたっては、子どもたちに大きな目標を持たせてあげることが大事であり、多く目についてしまう欠点ではなく、一人一人の良いところを見つけて褒めてあげることは大人の大切な役割である。

また、地域の敬老会等だけでなく、海外でも演奏し、子どもたちの誇りを醸成している。

●実演として岩代国郡山うねめ太鼓保存会小若組が迫力ある演奏を披露した。

●全体を通しての質疑応答後、最後に、岩代国郡山うねめ太鼓保存会小若組の子どもたちがそれぞれ将来の夢を発表した。子どもたちの夢を語る姿は、大変活き活きとしており、“明るい未来”を感じさせた。

全体進行の大和田氏は「その“明るい未来”になるような社会や地域を大人はつくっていかねばならない。」とまとめ、本分科会を閉じた。

3. 担当者のコメント

参加者だけでなくスタッフも含め、三つの団体のそれぞれの角度からのアプローチを通して、その土地で受け継がれてきた伝統芸能等が、地域の明るい未来へと繋がっていること、そして、その役割の大切さについて考える機会となったのではないかと。

また、この分科会では実際に演奏を見聞きすることで、“地域の伝統芸能の良さ”に改めて身をもって感じていただけるように、実演を設けた。子どもたちの迫力ある素晴らしい演奏にも魅了された。

少子化が進行していく昨今において、その意義が大きくなっていく中、この分科会が何らかのカタチで参加された方の地域力の一翼になって欲しいと願っている。

運営スタッフ

武藤 良太 (喜多方市社協)、鈴木 千恵 (猪苗代町社協)

星 貴人 (檜枝岐村社協)、栗城 京司 (只見町社協)

地域の中のおたがいさま

～住民主体の支え合い・助け合いのまちづくり～

参加者数 82名

基調講演・コーディネーター

●鈴木 典夫さん（福島大学行政政策学類 教授／福島県）

シンポジスト

●井岡 仁志さん（高島市社会福祉協議会 事務局長／滋賀県）

●只野 信一さん

（南相馬市民生委員児童委員連絡協議会 会長、太田地区福祉委員会 会長／福島県）

●飯島 恵子さん（ゆいの里 理事長／栃木県）



1. 概要

東日本大震災では、住民同士が支え合い、助け合う姿が幾度となく報道され、地域の絆の大切さが再認識された。住み良い地域を作るためには、日頃から地域の課題を自分たちの課題と捉え、解決のために主体的に行動することが大切である。

この分科会では、地域を良くするために住民が主体となって活動する事例を通して、課題解決のアプローチ方法や、自分たちの地域でも実践できる課題解決のポイント、活動に必要な財源確保の方法などを考え、顔の見える関係性作りの大切さを被災県から再発信する内容とした。



2. 主な内容

基調講演：「住民主体の支え合い・助け合い」

●鈴木 典夫さん 福島県は東日本大震災により、地震と津波、そして原発事故という複合災害を経験した。避難先では新たなコミュニティ作りを余儀なくされた被災者も多い。

福島大学の学生は、震災後、仮設住宅等の被災者を対象に足湯や芋煮会等の活動を行っているが、これは住民同士が「顔見知り」の関係を作ることを目的としている。孤立を防ぎ、新たなコミュニティを作る。「顔見知り」でなければ、「おたがいさま」の関係を構築することはできない。

災害時は日頃の備えが機能しないことも多いが、そのような時に大切なのが「おたがいさま」の関係である。これからも地域福祉活動を愚直に追及していく必要がある。

シンポジウム：「地域の中のおたがいさま～住民主体の支え合い・助け合いのまちづくり～」

●井岡 仁志さん 高島市は、自治会単位で福祉推進委員会が設置され、集落福祉を基盤としている。活動のポイントは、「サロン・見守り・生活支援」。まずはサロンで居場所を作って、次はサロンにこない人の見守り訪問、そして訪問した先でのちょっとした困りごとをお手伝いする生活支援へとつなげていく。住民が活動していく中で自ら「気付く」ことが重要である。活動の財源として「赤い羽根たかし見守り募金」というテーマ型募金を実施している。

より良い地域を作っていくためには、ひとりの問題をみんなの問題にし、支援する側・される側の関係から「おたがいさま」の関係になっていくことが必要である。

●只野 信一さん 震災直後は、民生委員として地域住民の安否確認と避難所への誘導を行った。福祉のまちづくりを推進する福祉委員会でも、赤い羽根「災害ボランティア・NPO活動サポート募金」の助成をきっかけに新たなサロンを開催し、地域のつながりを取り戻す活動を行っている。

関東に避難した小学生が「放射能が来た」といじめに遭ってしまった。このような状況を作ったのは我々大人であり、子どもには何の罪もない。震災前のように笑顔溢れる地域に戻ることを願

い、地道に活動を続けていきたい。

●飯島 恵子さん 街中サロンなじみ庵は、誰でも集うことができる地域の縁側。空き店舗を利用した食堂とフリースペースがあり、外出や買い物時の無料送迎も行っている。食堂での調理や送迎も会員が行い、互助の中で自助が育まれている。

ある96歳のおばあちゃんが「私たちはきょういくときょうようがある（＝今日行くところがあって、今日用がある）。」と言っていた。居場所と役割をいかに奪わずに作り出すか、客体ではなく主体となって活動すること、ケアする・されるのではなく支え合うことが重要である。地域住民のつながりが重要視されている今、私たちにできることをこれからも考えていきたい。

●まとめ 地域は必ず再生する力を持っている。また、再生すると皆さんが信じるのが重要であり、見えないところで皆さんの想いはつながっていく。この分科会で紹介された話や取り組みを堂々と真似をして、区長や民生児童委員などの特定の人だけが頑張る地域ではなく、人と人とのつながりを大切に「おたがいさま」の地域を作っていくことが必要である。

3. 担当者のコメント

昔は当たり前が存在していた地域の中の「おたがいさま」。東日本大震災後、住民同士のつながりの重要性が再認識されている。基調講演やシンポジウムでは、幾度となく「住民主体」という言葉が使われ、様々な取り組みを通して住民同士がつながり、主体性を持って地域づくりを進めて行くことが必要であると感じた。しかし、様々な活動を一方的にお願いするのではなく、まずは私たちと地域住民の間で「おたがいさま」と言い合えるような関係を作らなければならないだろう。孤立を防ぎ、住民同士の顔が見える地域を作るため、私たちにもできることを考え実践していきたい。

専門部会委員／源後 正崇（福島県共同募金会）

運営スタッフ／遠藤 正志（北塩原村社協）

津川 由紀（西会津町社協）

脱!! 貧困

A-5

～学習支援という一つの方法～



参加者数 34名

基調講演・コーディネーター

▶森田 明美さん
(東洋大学社会学部 教授、東日本大震災子ども支援ネットワーク事務局長/東京都)

シンポジスト

▶片貝 英行さん
(前・NPOの東北事業担当 現・文部科学省生涯学習政策局参事官付(連携推進・地域政策担当)/東京都)

▶遠野 馨さん
(しんぐるまざあず・ふぉーらむ・福島 理事長/福島県)

▶遠藤 宏志さん
(ビーンズふくしま 子どもの貧困対策支援事業担当/福島県)

1. 概要

現在、日本の子どもの6人に1人が相対的貧困の状態にあり、「子どもの貧困」が大きな社会問題となっている。親の経済力の差が子どもの学力格差へと繋がり、不利な就職から貧困へと繋がる「貧困の連鎖」生じている。

「子どもの貧困とは何か」「貧困の世代間連鎖とは何か」を共に学び、「学習支援」という1つの方法から今の日本の子どもの課題について考えた。また、各分野での取り組みを通して貧困家庭の実態を知り、孤立しがちな人々をサポートすることを知ることにより参加者が今の日本において「自分に何ができるのか？」考えた。



2. 主な内容

基調講演 森田 明美さん

ひとり親家庭の貧困率は高く、貧困の連鎖にも繋がる。子どもの貧困は子育ての貧困でもあり、周りの環境によって子どもの持っている力が阻害されることもある。子どもの育ちには自己肯定感が重要で、子ども自身が安全・安心でここにいるという認識、支えてくれる人がいるという認識を持たせることが子どもの自己肯定感に繋がっていく。また、法整備以外にも「その人らしく生きる」ことを地域社会で支えることが重要で、我々には保護するだけでなく子どもが挑戦できる場の提供や子どもの育ちに必要な「連携」、「重層性」、「継続」の3つの視点が必要になる。さらに学習支援は価値を押し付けない、自分が満足しないことが重要である。

シンポジウム

●遠藤 宏志さん

貧困家庭では子どもの状況や学習環境に難点があり、学習支援の実施には支援を活用できる基盤整備が必要である。家庭訪問による相談や各講座の実施(学習支援等)、集合型活動の実施(料理等)、地域の支援体制の整備(関係機関とのチーム構築)により、子ども達の生きる力を引き出し、基盤整備している。活動を通して、子どもが活躍できる場、チャレンジできる場を提供することにより、得意なことを生かしたり達成感に繋がったりしている。また、共感や子どもの言葉を理解しようとすることや、継続することが大切である。

●遠野 馨さん

母子家庭(ひとり親)では低収入が目立ち、仕事の掛け持ちにより子どもと接する時間がなくなる。勉強を見る時間も減り、学習のつまずきから学校・勉強が嫌いになり不登校に繋がることもある。学習支援・体験学習を通して子ども達に自信が付き、人から大事にもらえるという自己肯定感を高める活動をしている。ひとり親家庭では限界があることから、ネットワークを構築し、様々な人達を巻き込んで支援を続けることが大切である。

●片貝 英行さん

子どもに必要な資源には学習支援と生活支援があるが、貧困家庭で育つと自虐的な状態になってしまう。また、教育・学習機会の不足から社会的排除状態に至り、貧困の世代間連鎖に繋がる場合もある。貧困の連鎖を予防するためには、教育や社会保障、産業・経済といった様々な支援を切り口に貧困を断ち切ることが重要である。また、様々な取り組みのゴールを何に設定するかを考えると共に、事前評価と論理的な解決手法が必要である。

3. 担当者のコメント

貧困に陥るとなかなか抜け出せず、多方面に渡って不利益が生じて貧困の世代間連鎖に繋がっている。参加者は自らが陥らないと気付かない貧困の実態について考え、気がきがあったように感じる。

貧困について学習支援という1つの方法から見てみると、いかにして子どもの自己肯定感を高めるか、また挑戦や体験のできる場が重要であり、その仕掛け作りが力ギとなる。さらに地域を含め各分野とのネットワークを構築し、様々な人を巻き込んで継続して取り組むことで脱貧困へと繋がる。

子ども達の人生の選択肢を増やし、明るい未来に繋げるためにも自分達ができるところからアプローチをし、子どもの貧困を減らしていきたい。

専門部会委員/遠野 馨(しんぐるまざあず・ふぉーらむ・福島)
運営スタッフ/鈴木 次郎(湯川村社協)
湯田 一成(下郷町社協)
鹿目 明奈(南会津町社協)



地域で育むふくしのこころ

参加者数 57名

コーディネーター

▶ 原田 正樹さん (日本福祉大学社会福祉学部 教授/愛知県)

事例発表者①

▶ 石田奈保子さん
(福島県立湖南高等学校生徒会 会長/福島県)

▶ 二瓶 真耶さん
(福島県立湖南高等学校生徒会 副会長/福島県)

事例発表者②

▶ 高山 弘毅さん
(前橋市社会福祉協議会 地域福祉課 主任/群馬県)



1. 概要

“地域で育む”とは、子どもからお年寄りまで地域に関わる色々な人たちによって行われることである。地域福祉＝まちづくりを行うにあたって、いかに地域に関心をもってもらい、しかけ作りをしていくかを考えた。

“ふくしのこころ”とは、「ふだんの・くらしの・しあわせ」として、高齢者や障がい者など特定の人だけでなく、自分の暮らしを中心として捉え、その毎日の幸せを支えているものとして、家族や地域の人々の存在があるということに気が付くことが大切である。そのことを前提として、誰もがもつ権利である「ふ・く・し」を第一に考えたとき、「ふ・く・し＝平和」を、地域の人々との関わりの中でどのようにつくっていくか、事例発表とグループワークを通して考えた。



2. 主な内容

●事例発表者①：石田奈保子さん、二瓶 真耶さん

湖南高校は、昭和23年に創立・開校した、歴史と伝統のある高校である。学校行事として行われているボランティア活動には主に、①湖岸清掃と②除雪ボランティアがある。①湖岸清掃は毎年9月、猪苗代湖の美しい自然や水、多くの生き物たちを守るため、昭和48年から続いている。②除雪ボランティアは、一人暮らし高齢者の増加に伴う除雪活動のお手伝いとして、平成8年から始まった活動である。除雪作業は想像以上に大変な作業だが、住民の方に「ありがとう」と喜んでもらえることがやる気につながっている。

生徒はこれらの活動を入学前からホームページなどで知り、また学校全体が一体となることで、皆が積極的に取り組んでいる。そして、地域に貢献する喜びや仲間と協力することの大切さ、多くの人がルールとマナーを守って行動する必要性があることなど多くの学びを得ている。

●事例発表者②：高山 弘毅さん

日常的な生活課題の解決を住民の主体的な参加のもと行うために、STEP 1～3を考えた。

STEP1：気軽な共感・参加・発信によりつながり、「前橋〇〇部」の結成。このサイクルの中で「前橋」が自分事になり、公私ともに参画するようになる。（“共感”は関係を築き、自然に主体的になる）

STEP2：“共感”でつながっていた「前橋〇〇部」が、前橋では異例の大雪による地域課題解決へ動き出す。

STEP3：日常的な生活課題の解決への参加

災害時の活動の中で、その後の日常生活での困りごとへの気付きがある。たすけあいを習慣化していくため、社協やボランティアがともに行動する。そのために、プラットフォームなどを活用し、話し合いが行える環境を整える。

「地域福祉」「福祉教育」など自分に関わりが薄いと感じられるようなワードで地域住民と繋がろうとするのではなく、プラットフォームを有効に活用し、気づかなかった見方や新しい社会資源

の組み合わせを探ることができる。「この指とまれ方式」で“共感”を広げていくことが秘訣である。

●まとめ：原田 正樹さん（グループワークの意見含む）

- ・高校生の頃から、地域の中で大事にされているものに対して活動し、それが伝統になっていることで地域への関心を強めることにもなる。
- ・地域の課題について学生や大人（行政や民生委員）が一緒になって考えることが大切である。
- ・福祉教育をきっかけに、ボランティア心が芽生え、次世代・広世代へつなげることができる。
- ・いろいろな人を巻き込み、小さなことから取り組むことが大切。
- ・これからは学校と地域の関わりを考えることが必要とされる。
- ・「ふくしのこころ」はできることからチャレンジすること。
- ・“地域”として捉えるのではなく、“自分のふるさと”を大切にするために何ができるかと考えることで、関係者だけではなく、いろいろな人が関わるができる。

3. 担当者のコメント

自分のふるさとを大切に思う気持ちを持ち、自分たちには何ができるかを考え、取り組んでいくことが大切であることを再認識するとともに、より多くの人に、そして後世につなげていくためにはどうしたらよいか考えさせられた。地域の状況が異なるなかで、どのような形で周りの人を巻き込んでいくことができるかなど、多くの学びがあったのではないかと。また、「ふ・く・し」は特別なものではなく、誰にとっても当たり前存在し、それについてきっかけづくりや場の提供として、社協や市民が働きかけていることを改めて実感した。

専門部会委員／富塚まり子（福島県ボランティア連絡協議会）
運営スタッフ

水野久美子（伊達市社協）、古山 浩美（本宮市社協）、
五十嵐美江（本宮市社協）、藤田 窓佳（西郷村社協）、
久保田勝紀（中島村社協）、西郷 勉（塙町社協）

働きながら取り組むボランティア活動



参加者数 53名

コーディネーター

▶早瀬 昇さん
(日本NPOセンター 代表理事／東京都、大阪ボランティア協会 常務理事／大阪府)

パネリスト

▶加藤 光一さん
(日本労働組合総連合会福島県連合会 事務局長／福島県)

▶石川 淳一さん
(東邦銀行総合企画部広報・社会貢献室 室長／福島県)

▶伊藤末央子さん
(千代田区社会福祉協議会地域協働課 ちよだボランティアセンター／東京都)

1. 概要

今日の超少子高齢化社会において、これからの多種多様化する地域社会のニーズにこたえるため、継続的あるいは機能的なボランティアの力がますます求められる。そこで、この分科会は働きながらボランティア活動に携わることに焦点をあて、課題とその可能性を探る機会とする。働く側の意識付けや社会啓蒙と合わせ、企業理解や協力が必要不可欠となるので、モデル事例やそのきっかけ等を紹介することで、これからの社会におけるボランティア活動の広がりが盛り上がりにつなげることを目的とした。



2. 主な内容

【導入】早瀬 昇さん

勤労者のボランティア活動について、活動の意義（企業にとつての意義、社員にとつての意義）やその関心度の低さ、参加の妨げとなる要因について、導入の話があった。

【事例発表】

●加藤 光一さん

東日本大震災後の活動として、全国からボランティアを受け入れパイプ役として活動。初めはボランティアと被災した人たちの間で必要とする支援に対してのギャップに苦労したが、通い続けることで次第に信頼関係が築かれ最後は感謝に変わり、ボランティアの達成感につながった。

○具体的な取り組み

- ・組合員よりカンパを募り、社会貢献事業資金を確保（除雪ボランティアや高齢者宅給食宅配等）
- ・全国からの震災支援ボランティア受入れと活動レクチャー、コーディネート
- ・防潮植林ボランティアや環境植林ボランティアの展開に向けた検討

●石川 淳一さん

東日本大震災後、「福島のために何かしたい」という頭取の強い思いが社員に伝わり、銀行をあげての活動になっている。

○具体的な取り組み

- ・食の商談会：風評被害が厳しい中、首都圏に向けビジネスマッチングをさせ販路拡大につなげる。
- ・東邦みんなの森づくり：地方銀行全体に呼びかけ、5年前からいわき地方の植林活動を実施
- ・金融経済教育推進：子どもを対象に金融の仕組みを学んでもらう。
- ・スポーツ振興：オリンピック選手や社内陸上部トップ選手を迎え陸上指導教室の実施

●伊藤末央子さん

企業から寄せられるボランティア相談と社協が考える支援とのつなぎ役として、専用のメールマガジンやfacebookなどを利用して若い世代に向けて情報発信をしている。一方で登録企業や

登録者が年々増えているのに実際に活動している人が少ないので活動したいと思ってもらえるプログラム作りが今後の課題となる。

○具体的な取り組み

- ・ホームページからボランティア受入れ（登録制）
- ・活動情報を随時提供
- ・マッチングギフト：企業の社員がボランティアした時間数に応じ、企業がボランティア団体に寄付する。

【まとめ】早瀬 昇さん

勤労者のボランティア参加を進めるために、活動参加には、①時間、②情報、③イメージ、④自発性の4つのバリエーションがあることを理解し、活動参加の支援として、①活動の奨励（把握・認知）、②促進（講習、情報提供）、③後援（助成、ボランティア休暇など）の3ステップが重要である。

3. 担当者のコメント

企業やそこで働く方のボランティアは、どこの企業も、そして誰でもが、誰かのチカラになりたい、困っている人を助けたいとの思いがある。その中で積極的に関われるかどうかはやはりトップの意識や考え方、しくみづくりが重要であり、最初の一步を踏み出すきっかけもキーポイントになるとのことが伺えた。

ボランティア活動の経験はあるものの関心がないといったネガティブなイメージがある。ボランティアをいかに魅力的に見せ、興味を持たせられるかや、得るものの大きさなどをPRしてポジティブなイメージにつなげることが重要だと真剣に考え、今後の業務に生かすうえでより参考になると感じた。

専門部会委員／遠藤 徳雄（連合福島）

運営スタッフ

桜田 和弘（福島市社協）、小池 美里（川俣町社協）、
嶋村美恵子（泉崎村社協）、深谷 義弘（矢祭町社協）
蛭田 美幸（鮫川村社協）



B-3

国際的なつながりを広げ、強化し、 この経験を国内で活かす

参加者数 9名

ファシリテーター

▶ 福田 義夫さん
(二本松青年海外協力隊訓練所／福島県)

講師

▶ 八巻亜梨沙さん
(青年海外協力隊経験者／福島県)

▶ 室井 研一さん
(青年海外協力隊経験者／福島県)



1. 概要

「青年海外協力隊」という言葉や存在は知っていても、実際にどのような訓練をして、任国でどのような活動をしてくるのか、日本に帰国した後はどのような活動をしているのかについては、知らない人の方が多い。

そこでこの分科会では、JICA という組織についての全体像の理解と、二本松訓練所での訓練生の生活の様子と70日の訓練機関で何を学ぶのかについて学んだ後、実際に海外（ボツワナ・モロッコ）で2年間活動をして来た方の生の声を聞いて、具体的な活動内容と帰国後にその経験をどのように活かしているのかについて知ることを目的とした。また、現地（モロッコ）の料理を食べて、食文化の違いと海外での食生活について解説付きで体験した。



2. 主な内容

【JICA の概要、JICA 二本松での訓練内容と所内見学】

● 福田 義夫さん

JICA は開発途上国への国際協力を行う機関で、JICA 二本松訓練所では青年海外協力隊員がそれぞれの任国に派遣される前に70日の訓練を行っている。各国の方が講師となった語学訓練がメインで、授業の時間数は中学校の2年間に相当する。それ以外にも、健康管理や安全管理等について共同生活を通して学んでいる。

説明の後には、日本に2ヶ所しかない JICA 訓練所の語学訓練の教室、図書館、居室等を視察した。

【任国での活動内容と帰国後】

● 八巻亜梨沙さん

ボツワナ共和国でエイズの予防啓発に取り組んできた話をしていた。

ボツワナはダイヤモンドの産出量が世界でも有数で、アフリカの中では豊かだが、エイズ感染率が高い。感染者の女性たちと一緒に裁縫などを行って、そこで出来た商品を販売することによって女性たちの今後の活動費を稼ぐことも出来るし、生きがい作りにもつながる。青年海外協力隊に参加したことで、視野が広がり、それが公私にわたり活力となっている。

● 室井 研一さん

モロッコで体育指導をしてきた話をしていた。

モロッコの郊外では学校がない、先生がいない、そのために教育を受けることができない子どもたちが多くいる。そういう子どもを少なくするため、日本の支援で学校が出来たので、そこで運動を通して情操教育の普及を図ることができた。

● まとめ

2人の活動に共通していたのは、目の前の問題を解決するだけでなく、自分達がいなくなったとしても継続していくことができるように、問題解決へ向けたアクションを起こせる

るように支援をしてきたということ、帰国後も積極的に地域の小・中学生を含む市民の方に、その経験を伝えていることである。

【モロッコ料理体験】

食を通しての異文化理解ということで、モロッコで日常的に食されている主食の小麦粉で作るクスクス、サラダ、スープ、スイーツを室井さんの解説付きで食べた。多少、日本人向けの味付けにしているそうだが、それでも口に合わずに残している方もいたし、完食という方もいた。



3. 担当者のコメント

海外青年協力隊経験者2名からそれぞれの活動を話してもらったことによって、おそらく参加者が漠然と抱いていた青年海外協力隊＝途上国で大変な活動をしてくるという考えが、活動時の苦労話や楽しかった話、それぞれの国の方と笑顔で写っている写真を見て、「大変な活動」から「有意義な価値ある活動」をしてくる、というイメージが変わったのではないかなと思う。

また、帰国後どのような形で、協力隊経験が活かされているか知ることができたと思う。

参加者の中で今回のことがきっかけで、将来 JICA の一員として海外で活動したいという気持ちを持った参加者もいた。

専門部会委員／福田 義夫（二本松青年海外協力隊訓練所）
運営スタッフ／鈴木 哲也（大玉村社協）
金田 淳平（白河市社協）



人と人をつなぐレクリエーションボランティア



参加者数 71名

コーディネーター

▶小田原一記さん

(日本レクリエーション協会 事務局長兼総務チームマネージャー／東京都)

事例発表者

▶引地 陽子さん

(日本レクリエーション協会公認レクリエーション・コーディネーター、
福島県レクリエーション協会専門委員／福島県)

実技講師

▶斎藤 公子さん

(日本レクリエーション協会公認 福祉レクリエーション・ワーカー、
福島県レクリエーション協会 事務局次長／福島県)

▶原 恵さん

(日本レクリエーション協会公認 福祉レクリエーション・ワーカー、
福島県レクリエーション協会 専門委員／福島県)

1. 概要

東日本大震災での支援の様子を通して、レクリエーションの良さや特徴を整理し、今後のボランティア活動にレクリエーション（都道府県や地域のレクリエーション協会も含め）を活用する視点をディスカッションした。そして、これからの地域でのボランティア活動の大きなテーマである「介護予防」や「子どもたちの支援」におけるレクリエーションの活用と実技を体験しながら学んだ。



2. 主な内容

アイスブレイクに活かすレクリエーション支援技術について、斎藤公子さんによる実技で、会場が和らいだ雰囲気の中進行された。

引地陽子さんから、「人と人をつなぐレクリエーションボランティア～福島からの事例～」として、実際の映像を見ながら、活動の様子についてお話しいただいた。

ボランティア活動とレクリエーションがつながることをイメージすることができ、介護予防と子どもたちの支援についても、レクリエーションが実際の展開のつながりに活用できていたことを理解することができた。

その後、人と人をつなぐために有効なレクリエーションアクティビティの実技について、斎藤公子さんと原恵さんから指導していただきながら、会場の方々と一緒に体験した。

会場からは、「先生たちが体いっぱい動き、ほぼ笑みいっぱいであることに引き込まれました。」「自分たちも、お二人のようになりたいので、レクリエーションインストラクターを学びたいと思います。」という意見がでた。



3. 担当者のコメント

レクリエーション活動に参加することによって、心の力が高まり、健康づくりや人との交流に前向きな気持ちになることがわかった。集団のよりよい雰囲気づくりの手段、方法の一つにアイスブレイキングを取り入れ、参加者が一つになった感覚、一体感が集団の良い雰囲気をつくるので、その役割や意義を理解することができた。



専門部会委員／佐藤 喜也（福島県レクリエーション協会）
運営スタッフ／角田 信季（桑折町社協）
伊藤 亮子（国見町社協）



B-5

次世代を担う若者のチカラを未来へ ～つなごう、活かそう、地域で輝く若い力～

参加者数 28名

コーディネーター

▶ 山本 克彦さん
(子どものエンパワメントいわた 代表理事/岩手県
日本福祉大学福祉経営学部 准教授/愛知県)

事例発表者

▶ 加藤 裕介さん (Bridge for Fukushima / 福島県)
▶ 小島 望さん (福島大学災害ボランティアセンター セネラルマネージャー/福島県)
▶ 高橋 航平さん (福島大学災害ボランティアセンター/福島県)
▶ 岩井 俊宗さん (とちぎユースサポーターズネットワーク 代表理事/栃木県)



1. 概要

本格的な少子高齢化社会を迎え、人と人との繋がりが希薄化し価値観が多様化するなかで、ボランティアが担う役割も大きく、世代を超えた若いチカラに期待を寄せる声が多く聞かれる。

この分科会では、若者が取り組むボランティア活動や活動を支援する方々の事例発表から、取り組みのきっかけや内容、そして活動を通して感じた「気づき」を共有し、私たちが若いチカラに期待することは何なのか、そして、若者を巻き込むコツ・若いチカラを活かすためのポイントについて考えるとともに、地域における繋がりが、世代を超えた繋がりについて理解を深めた。



2. 主な内容

分科会では、高校生の活動支援、大学生の活動の実際、社会人の活動支援の分野で活躍する3団体の事例発表者と、コーディネーターに日本福祉大学の山本先生をお招きし、ワークショップ形式で進行了た。

【事例発表】

●加藤 裕介さん

Bridge for Fukushima は“何かと何かの懸け橋になろう”と震災後に設立。2012年8月に県内の高校から高校生が復興に関してできることがないかと相談を受けたことをきっかけに、高校生との接点が生まれ、身近な課題に対して、まず何かをやってみようという「高校生による実践型社会課題解決プログラム」の活動支援を行う。高校生の中にあるものを「待ち」、「引き出し」、アイデアを出し合って実践に繋げる。大切なのは投げかけて待ち、話し合いを重ねる時間である。一方的ではなく高校生の仲間としてフラットな立場で話し合うことを大切にしている。高校生と繋がるには情報発信がカギで、ツールは多種多様である。日々、高校生と細やかにやりとりし接点を多く持てば自然と集まり、繋がっていくことを実感している。

●小島 望さん、高橋 航平さん



福島大学災害ボランティアセンターは震災後、被災者支援を目的にボランティアを希望する学生の受け皿として設立。現在約350名が登録し、うち30名が運営スタッフ。活動は主に土日。メールで登録者に情報提供し、

活動したい時にできる仕組み。現在は、津波被災地での泥出しや片付け、学習支援、子ども達に対するイベント支援、仮設住宅でのコミュニティ活動や健康維持活動を自治会と一緒に企画運営するなどの活動を継続している。27年6月末新規事業として、仮設住民の転居が進む状況に対し、学生2名が交代で空室に住み込み、ご近所づきあいをしながらニーズに対応することを目的に「いだけ支援」を始めた。現在まで約20カ所の仮設で多様な活動を継続し、住民の孤立死はゼロ。震災から5年目を迎えようとする今、仮設でのニーズも変化しており、学生団体として次世代にいかに思いを繋ぐかが課題であるが、被災地に住む学生だからこそ、被災者に寄り添った繋がりのある活動を継続していきたい。

●岩井 俊宗さん

とちぎユースサポーターズネットワークは、2008年に若者の成長の機会創出と持続的に取り組む人材を輩出し、若者による社会づくりの促進を目的に活動を開始。様々な分野から力添えをもらい、年間約1,400人の若者と向き合いながら事業に取り組んでいる。若者と繋がるためには、思いだけでは繋がれない。プログラムの開発がキーとなる。若者が関わることによって何を実現したいのかを提示し、そのプログラムが社会的な課題に対してどのような意味があるか。若者の強みや特性を捉え、その背景をしっかりと伝えられるか。また、参画後の満足度によって若者同士が誘い合い繋がっていく。若者は社会的な意義を実感でき、自分達の足跡が残った経験が高められれば満足度はあがる。プログラムの中で、不





安や焦りも経験し、乗り越えて達成感を得られるよう配慮する必要がある。「教える」より「対話」が大事である。

●山本先生からのメッセージ

「迷ったらGO！」迷ったらやってみる。「オモイをカタチに」プロセスを学んだらひとり立ち。「今までの“非常識”を“常識”に」世の中の正しい大人の批判はまだ早い。

【グループワーク】



6班に分かれ、事例発表を聞きながら「なるほど」と思ったことや「なぜ」と感じたことをシートに落とし込んだ。グループで思いを共有した後、事例発表者にもっと聞きたい、知りたいと思う内容について絞り込んだ。事例発表者もグループに加わりながら話し合いを進めた。

【内容の抜粋】

- 今の若者は忙しくないか？どうやって時間を作って参加してくれるのか？
 - ・学生の忙しさは社会人とは質が違う。事前に伝えておけばスケジュールを空け易い。
 - ・優先順位を高められるよう、行きたくなるような内容かどうか。
 - ・大人が勝手に忙しいと決めつけていないか。魅力あるものをどんどんアピールする。
 - ・高校生がアクティブな時間は夜間。そこを意識すればコミュニケーションが取りやすい。
- 高校生はどんな気持ちで参加しているのか？
 - ・サードプレイス（第三の居場所）として参加し、学校や家庭で得られないものを求めている。10代からみて20代との接点は少ない。10歳刻みの人との接点は何があるのではないか。
 - ・10歳刻みの人との接点を持つことは、自分の近い将来像という感覚もある。

【まとめ】

様々な年齢層との関わりの中から繋がりが生まれる。皆さんが活動するフィールドにまず若者を引き込むことが大事。そこから関心を持ち繋がることができる。若者も大人との出会いを求めている。様々な場面で若者を引き込みたいと社会全体が若者の持つチカラに期待しているが、それをどう社会の力に変えていけるのか、我々の関わりはとても重要である。今日感じた思いや価値観、キーワードをそれぞれの現場や地域で活かして欲しい。若者は力を持っている。教えるのではなく力を発揮する場を用意する。巻き込むには巻き込まれた



いと思ってもらえるものを準備する。謙虚なスタイルで若者や子ども達に向き合ってみれば、いい循環が生まれるのではないかと、事例発表者の皆さんと山本先生からのメッセージで分科会が終了した。

3. 担当者のコメント

ボランティアや地域コミュニティ活動の現場では、「後継者がいない」「若者が参画してくれない」といった声をよく耳にする。そういった悩みに対し、何かアプローチ出来ないかとメンバーで話し合い、高校生・大学生・社会人と、様々な世代の若者を支援する方々を事例発表者としてお招きし、活動内容や関わり方を知ることで、今後の活動のヒントを得る機会となればと考え企画した。

事例発表では活動内容だけではなく想いも知ることができた。山本先生の話しやすい雰囲気づくりの配慮もあり、ワークショップでは皆さん和やかに楽しそうに話していて、分科会が終了した後も、先生方を含めお互いに情報交換するなど、全国規模であるからこそ繋がることができ、得られるものがあったように思う。

分科会を通して、若者と繋がるということは、若者と一緒に何を実現したいのかという想いが大事であることを改めて気づかされた。次世代を担う若者と共に話し合い想いを形にしていくことが、様々な場面でのこれからの未来に繋がっていくことだと感じた。



専門部会委員／遠藤 君子（福島県民生児童委員協議会）

運営スタッフ／佐藤久美子（二本松市社協）

皆川由美子（本宮市社協）

畠山 和也（矢吹町社協）

岡部 利子（棚倉町社協）

緑川早輝子（矢祭町社協）

“協働”のいろはを学ぶ

～多様な団体間のつながりで生み出す課題に挑む力～

参加者数 100名

コーディネーター

▶ 上野谷加代子さん (同志社大学大学院社会学研究科 教授/京都府)

パネリスト

▶ 山下 聡子さん (佐倉市千代田地区社会福祉協議会 障がい児福祉事業部長/千葉県)

▶ 古賀摩希子さん (コープみらい 組合員 理事/千葉県)

▶ 林 幸子さん (コープみらい ちばエリア2区ブロック委員会 ブロック委員長/千葉県)

▶ 阿南健太郎さん (児童健全育成推進財団 広報部・業務部・課長/東京都)

▶ 古賀 桃子さん (ふくおか NPO センター 理事長/福岡県)

1. 概要

今日、ますます複雑・多様化する地域ニーズを解決するためには、これまでの法制度・サービスの組み合わせや既存のネットワークだけでは太刀打ちできない時代となった。

この分科会では、以前はあまり一緒に力を合わせることのなかった多様な組織や団体が課題を持ち寄り、共通の目標に向かって協働した事例を紹介し、個々の強みの足し算を超え、相乗効果が生まれていく過程を振り返りながら、団体間の協働の意味と効果、そして具体的な方法を学ぶことを目的とした。

参加者は複雑・多様化する地域課題を共有し、再認識することができた。また、異なる組織・団体が共同する際の障壁や課題について知り、克服する道筋を学び、協働の意味とそのポイントについて意見交換ができた。

2. 主な内容

【導入】日本 NPO センター常務理事 田尻 佳史さん

50を超える全国域でボランティア活動推進を図っている団体の集まりであり、本分科会の主催者である「広がれボランティアの輪」連絡会議の紹介を行い、今回「広がれボランティアの輪」連絡会議を構成する団体同士が事業を通じて協働する事例を紹介することを伝えた。

【趣旨説明】コーディネーター 上野谷加代子さん

事例は何年も取り組みを継続してきているものと、今年取りかかったばかりで当事者同士がまだお互いの協働を手さぐり中であるものと対照的な2事例を紹介すること。参加者がそれぞれの地域で協働をスタートさせるきっかけづくりになるよう、積極的に議論に参加するよう参加者に促した。

【実践事例】

実践事例1

テーマ：「福祉マップづくりから始まる協働の取り組み」

報告者：千代田地区社会福祉協議会×コープみらい

佐倉市千代田地区社協が福祉マップの改訂版を作りたいが予算の当てを探しているときに出会った Coop 共済の実施する「地域ささえあい助成」。助成の趣旨が取り組みに合致していたことから応募、選考され、事業が始まった。生協との協働が条件であることからスタートした協働は、当初お互いがどの点で折り合い、協働のメリットを享受できるかがわからず、互いを知らないことから困惑しながらの取り組みとなった。その試行錯誤の過程を、最終的に「安心して暮らせるまちづくりに貢献したい」という共通の思いを理解し合うところまでを参加者に率直に伝えることで、協働が始まる場面の難しさや、協働の意義が逆に浮き彫りになった。

実践事例2

テーマ：「子どものための児童館と NPO の協働事業」を通して見るマルチステークホルダー型協働の展開について

報告者：児童健全育成推進財団×ふくおか NPO センター

子どもの参画・参加をうながす力を持ち、保護者との連携、地域のキー人材、キー組織等とのつながりなどに強みを持つ児童館

と、プログラムの企画立案力（専門性）・子どもと向き合う独自の姿勢・スキルを持つ NPO それぞれの強みを持ち寄り、2007年から開始した「NPO どんどこプロジェクト」

児童館と NPO の協働の価値として、異種・異色との化学反応が起こること、社会課題や地域と出会うこと、目先のメリットだけでなく Win = Win の関係、子どもも大人も変わっていき、地域住民が子ども・地域の育ちを実感していくこと等とまとめた。また、事業の肝はコーディネーションにあり、コーディネーター役の中支支援センターが果たしている役割の大切さを再確認した。

【質疑・まとめ】コーディネーター 上野谷加代子さん

参加者から積極的に登壇者への質問も相次ぎ、各々が地域での協働を真剣に考えていることがわかった。最後のまとめでは、あらためて協働の意義を確認することができた。

3. 担当者のコメント

協働にはプロセスがある。知らない同士がいきなり協働できるわけもなく、出会いから始まる一つひとつのコミュニケーションをあきらめずに積み重ねることで、次第に糸口が見えてくる。まずは目標の共有が重要ともいうが、現実には目標がしっかりと共有されぬまま実践が始まることも少なくない。今回の2つの事例も当初は負担感やお互いの遠慮、何をどうしたらいいの？という状態からはじまり、期間の長短はあるが、今では関わる団体や人々がお互いに良かったと思える成果を見せてくれた。まさにピフォー・アフターである。「大上段に構えずお互いをまず知る、知れば何をやるかというのが出てくる」「違う視点が入るといいと認めてもらってうれしかった」という言葉に、協働にはお互いがしっかりと向き合う瞬間があるのだなと感じた。

「広がれボランティアの輪」連絡会議 主催

運営スタッフ/後藤麻理子

(日本ボランティアコーディネーター協会)

田尻 佳史 (日本 NPO センター)

園崎 秀治 (全国社会福祉協議会)

子どもたちにおもちゃのすばらしさと遊びのたのしさを ～震災後の活動を中心に・おもちゃ図書館ボランティアの役割と活動の原点～



参加者数 12名

コーディネーター

▶ 浅野 芳明さん (おもちゃの図書館全国連絡会 常務理事／東京都)

基調報告

▶ 小泉 康代さん (おもちゃの図書館全国連絡会 理事長／東京都)

実践発表

▶ 都築 芳子さん (おもちゃ図書館紙ふうせん、南東北総合病院ボランティアグループ紙ふうせん代表／福島県)

▶ 草 貴子さん (おもちゃ図書館ずんだっこ、仙台市市名坂東町内会会長／宮城県)

支援活動報告

▶ 田中 泰明さん、田中 美都里さん、三浦 鯉登さん (東京都荒川区／ボランティア)

活動報告

▶ 隅田ひとみさん (おもちゃの図書館全国連絡会／東京都)

紙芝居実演

▶ 青塚 和子さん (おもちゃの図書館全国連絡会／東京都)

1. 概要

震災後に設立された郡山市と仙台市の新しいおもちゃ図書館の実践報告から、おもちゃ図書館（ボランティア）が地域で果たす役割を考える。また、おもちゃの図書館全国連絡会は、震災後、福島県立聾学校福島分校や盲学校を定期的に訪問し、移動おもちゃ図書館を行ってきた。これらの活動を振り返るとともにボランティア、受け入れ側双方の思いを共有し、おもちゃ図書館活動、またボランティア活動の意義や可能性を模索する。（聾学校で実際に行った手話付紙芝居の発表もあり）

おもちゃ図書館のボランティア活動は、一般の市民誰もが活動に参加できる関口の広さを持っている。今回、大震災後のおもちゃ図書館ボランティアの果たした役割や実践から「ボランティア活動への参加と受入れの第一歩」「継続した活動の中から見えるもの」「おもちゃや遊びのもつ力」などを考えることができた。



2. 主な内容

まずはじめに、おもちゃの図書館全国連絡会理事長より基調報告があり、おもちゃ図書館の意義や役割、また今後のあり方や近年の傾向などの報告があった。分科会参加者よりおもちゃ図書館や子育て支援活動についての発言もいただきながらすすめた。その後、東北から2館の実践発表があり、震災後に新たにおもちゃ図書館を設立した経緯や願い、役割や現状などについて聞くとともに、震災後の混乱した時期に果たした役割の大きさを知ることができた。郡山市のボランティアグループ紙ふうせんの皆さんの多岐にわたる活動と、その中でさらに、福島で育つ子どもたちのためにおもちゃ図書館活動を新たに始めた想いは大きく心に響くものがあった。また仙台市ずんだこの活動は、町内会設立のみならず町会館建設への経緯や防災時避難所運営などについて、参加者から次々と質問が出され、大きな驚きとともにその力強い活動に胸を打たれた様子だった。

休憩をはさんで後半は「2011年から現在までの福島市での移動おもちゃ図書館活動」の活動報告と、参加ボランティアの発表、受け入れ側のインタビュー映像を交えて、この継続した活動を振り返った。大震災と原発事故はこの活動の大きなきっかけではあったが、活動を通じてボランティア側、受け入れ側どちらにも新たな気付きや発見があったこと、また次

への活動へと繋がったことなどを共有することができた。

最後にこの活動を通じて取り組んできた手話付き紙芝居の実演、また難しい面もあった取り組みを続けてきたボランティアの感想も



聞き、振り返りや次への工夫など、ボランティア側の姿勢も活動を継続する上で大切であることを学ぶことができた。

3. 担当者のコメント

実践発表や活動報告を通じて、おもちゃ図書館活動の果たす役割や意義を改めて学ぶことができた。また参加した皆さんも、それぞれの方の発表を通して新たな気付きも得られたと思う。発表内容はもちろん、発表者それぞれの活動や経験そのものも素晴らしいものだったので、もっと多くの方に聞いていただけると良かった。また「おもちゃ」の話題について期待していた方がいたので、そうした点はもう少し配慮が必要であった。全体を通じて、おもちゃ図書館活動の「多様性」を確認することができ、また「子どもたちの健やかな成長や笑顔」を望むボランティアの願いを共有することができた。



運営スタッフ／浅野 芳明、隅田ひとみ、千葉 礼子、
武田 純子、樋口 健、丸谷 一郎
(紙ふうせんより)佐藤 仁子、中野富美子、新野あや子

避難所運営とボランティア

～東日本大震災直下の大規模避難所・あの日あの時～

参加者数 24名

コーディネーター

★天野 和彦さん

(福島大学つくしまふくしま未来支援センター客員准教授/福島県)

報告者

★稲垣 文彦さん

(柏崎市民生活部市民活動支援課 協働のまちづくり専門官/新潟県)

★長沢 涼子さん

(福島県青少年育成・男女共生推進機構 福島県男女共生センター 主査/福島県)

★吉田 恵子さん

(富岡町社会福祉協議会 主幹/福島県)



1. 概要

東日本大震災における「ふくしま」の状況は、原子力災害に起因している。コミュニティが崩壊したまま、多くの住民が長期の避難生活を余儀なくされた。いわゆる大規模避難所もそうした背景があって生まれたのである。

本分科会では、避難所の運営をしていく際に重要な視点、そこにおけるボランティアや市民のネットワークがどのように活かされたのかを、「ふくしま」を事例に協議し、今後の災害時にも生きる知恵として参加者と共有した。避難所で起きたことが、「ふくしま」特有のものではなく、そもそもそれまでの地域課題が顕在化してきていることへの理解と、全国のあまねく地域が抱えている課題が共通していることへの気づきを学んだ。



2. 主な内容

【基調報告】

●稲垣 文彦さん 避難所運営支援のため平成23年4月11日に大規模避難所であるビッグパレットふくしまに入った。市町村、県、そして国も想定していなかった避難所（避難）で、次のことについて報告した。

①原子力災害避難で、避難者が自らの置かれている状況を受け入れられない。②いくつもの市町村の避難者が混在する避難所である。③被災した市町村外に設置された避難所で、避難者対応と平行し行政機能の立ち上げをしなければならない。④コミュニティ、家族が分断されたかたちでの避難で、自治機能を活かした自主運営が困難である。⑤市町村の住民が広域かつ拡散されたかたちでの避難である。

●長沢 涼子さん 日本では初めてとなる避難所内女性専用スペースの運営に携わった。避難所が1ヶ月経過後もかなり混乱した状態であったため、見知らぬ男女が隣同士で過ごしていた。このスペースは、女性たちの「着替える場所がない」「男性の目が気になる」といった声から、女性の人権に関わる問題として福島県庁避難所運営チームが避難所内に設置した女性専用の部屋である。なお、運営側に女性支援の意識がある組織が組み込まれていることが重要である。活動目的やメンバー背景が全くことなる郡山市内の女性団体3団体が、それぞれの団体の専門性や得意分野を生かした活動を行い、共通の活動は協力し合うことで新たな交流とネットワークが生まれた。また、女性は普段の生活から高齢者や子供のケアをする役割を担っているため、女性が関わることで多様性配慮の視点から災害リスクの削減につながっているなど女性は弱者であり続けるのではなく、防災・減災・復興を担う力を持っていることが活動を通してわかった。

●吉田 恵子さん 東日本大震災が発生し、大津波被害、そして原子力発電所事故を引き起こし、富岡町は全町避難を余儀なくされた。そのような状況の中、5月1日に大規模避難所であるビッグパレットふくしま内に生活支援ボランティアセンター

「おたがいさまセンター」を開設した。まず広報紙の作成にあたり、週1回住民一人ひとりに声を掛けながら手渡しで配布することに徹した。それは住民との繋がりを持つことができ、直接いろいろな話を聞くことができるからである。そして、住民から「自分たちも何かがやりたい」という声生まれ、避難所内の草むしりを行った結果、住民のなかに仲間意識や信頼関係が生まれた。「おたがいさま精神」「支えあい精神」が芽生えた瞬間である。この精神は今でも住民を支える活動の原点となっている。

【ワークショップ及び振り返り】

3人の報告者がグループごとに、当時実際に避難所で直面した課題を提起し、その課題をどう解決に導くのかグループ内で協議した。報告者も当時を振り返りながら参加者とともに解決策を考えた。また、グループごとにその課題を通して得られた気づきを報告し、分科会全体で共有を図った。

3. 担当者のコメント

東日本大震災から4年8ヶ月が過ぎ、震災そのものが忘れ去られようとしているなか、現在も多くの住民が故郷に帰れず避難生活を強いられている。今回の全国ボランティアフェスティバルでこのテーマについて全国の方々と課題を協議、共有し、震災を再認識することができた。

首都直下地震や南海トラフ地震など、これから全国各地で起こりうる災害に備え、それぞれの地域で抱えている課題を把握、そして普遍的な模範化をし、今回の福島での経験を教訓に、地域のなかで普段から防災意識を持って準備してほしいと思う。

専門部会委員/天野 和彦

(福島大学つくしまふくしま未来支援センター)

運営スタッフ/穴倉 秀和(富岡町社協)

迫 英之(富岡町社協)

災害時の要援護者支援のあり方を考える。



参加者数 47名

基調講演・助言者

▶ 渡辺 幸雄さん (ときわ会介護老人保健施設椿葉ときわ苑 施設長/福島県)

コーディネーター

▶ 丹波 史紀さん (福島大学行政政策学類 准教授/福島県)

実践発表者

▶ 千葉 喜弘さん (福島県介護支援専門員協会会長、福島県相談支援専門職チーム/福島県)

▶ 古川 彰彦さん (つばさ福祉会 理事長/福島県)

▶ 島野 光正さん (福島県社会福祉士会会長、福島県広域災害福祉支援ネットワーク協議会幹事/福島県)

1. 概要

東日本大震災では多くのボランティアに活動いただくとともに、ボランティアだけでは解決できない事例もみられた。地震・津波による被災、原発事故による避難を強いられた当時の現場の状況と各団体の活動内容を知り、理解を深め、それぞれの地域で、平時からの要援護者支援の取り組みや関係機関との連携、ボランティアとの関わりなどを考えてもらい、今後の大震災に向けて、具体的な方策や様々な支援につなげてもらう。

この分科会では医療・介護・福祉の立場から要援護者への支援や福祉避難所の必要性、ボランティアの役割などについて学び、分科会参加者が住む地域での具体的な支援や方策を考える。



2. 主な内容

【基調講演】 渡辺 幸雄さん

被災施設の施設長として、また被災者の視点で、震災時から施設再開までの経緯や、これからの方向性、支援する職員自身も原発事故の避難で家族の安否が分からない状態であった集団避難の経過及び説明がされた。「双葉郡の住民の役に立たなければならない、戻りたいという要介護者の希望の灯りを消してはならない」と、仮設施設の意義を語った。

【シンポジウム】

●千葉 喜弘さん 被災後、混乱の中で体調悪化等により、介護を受けざるえない状況となった方へ、円滑に介護サービスにつながるよう特例措置を用いたこと、地域に合った生活支援、避難者が援助を待つのではなく、自ら動き出したいという一歩先の生活を見据えた支援が重要であること、医療系・福祉系など他職種がいる相談支援専門職チームとしての活動を伝えた。

●古川 彰彦さん ①震災後の現状と課題、②震災発生時の状況・諸問題・支援体制、③避難した障害者施設の事例、④震災・原発事故後の多団体との協力、⑤福祉避難所と災害要援護者支援、⑥検証アンケート結果報告書⑦ボランティアの皆さんに期待をすること、以上について報告があった。「積極的な災害時要援護者登録制度の周知」「今の時代に無理なくでき、みんなで支え合えるボランティアをしながら、共に幸せな社会を作って行きましょう」と呼びかけた。

●島野 光正さん 勤務先の病院が、倒壊した病院から患者を受け入れた事例や双葉8町村の避難



者へは、放射能検査を行わなければ避難所が受け入れをしないなど、混乱した当時の状況等の報告があった。「福島県広域災害福祉ネットワーク協議会」の設立の経緯や今後の活動内容等の説明があり、「普段からできないことは災害時にもできない、日常的に関係機関と連携を行うことが大切だ」と語った。

●進行：丹波 史紀さん 東日本大震災以降に災害救助法が改正された点、災害時要援護者登録制度、災害派遣福祉チームの体制づくり、福祉避難所などについて、参加者からの質問をおりまぜながら、課題を含め、事例や具体的な提案など意見交換がされた。

3. 担当者のコメント

分科会参加者の多くは、民生委員やボランティアコーディネーターなど、要援護者支援に携わっている方であった。災害時要援護者リストの取り扱いについてなど多数の質問が出たり、また、分科会が終わってからも、実践発表者と名刺交換をして、話をする姿も見受けられ、我が地域で災害発生時にスムーズな活動を行いたいという熱い思いが感じられた。基調講演、実践発表とともに、震災に原発事故避難が重なった当時の状況と、懸命に取り組む支援活動の様子が具体的で分かりやすい内容であった。大震災・原発事故から5年目の福島県で、全国ボランティアフェスティバルが開催され、これまで様々な支援をいただいた方へ、ゆっくりではあるが復興が進んでいる姿をみていただく機会となった。

専門部会委員/渡邊由味子

(福島県医療ソーシャルワーカー協会)

運営スタッフ/木口加代子(双葉町社協)

鈴木 尚子(広野町社協)

協働型災害ボランティアセンターの運営を考える

参加者数 53名

コーディネーター

▶ 李 仁鉄さん

(にいがた災害ボランティアネットワーク 事務局長／新潟県)

パネリスト

▶ 今野 大さん (相馬市社会福祉協議会 常務理事兼事務局長／福島県)

▶ 明城 徹也さん

(全国ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)準備会 事務局長／東京都)

▶ 城 千聡さん (中央共同募金会企画広報部 主事／東京都)



1. 概要

東日本大震災後も全国各地で度重なる災害により多くの災害ボランティアセンターが立ち上がり、社協だけでなく地域内外の様々な団体や人々が連携して支援活動に取り組む事例が多く見られる。

災害ボランティアセンターは「被災者支援」という大前提があり、いかにしてそこに取り組むための活動に結びつけていくか、社協・NPO・企業・地域住民等、様々な団体や人々が関わる協働型の災害ボランティアセンターの在り方について、事例を踏まえて考え、参加者同士の意見を交換した。



2. 主な内容

【基調説明】コーディネーター：李 仁鉄さん

「この分科会は過去の成功体験を聞く場ではない。これから災害ボランティアセンターはどうあればいいのかを考えるための場としたいので、それぞれのパネリストからは成功体験だけにとどまらず、こうだったら良かったのに、ということも語ってほしい。そこからいろいろ考えていける場としたい。」と本分科会の方向性を説明いただいた。

【事例発表】

●今野 大さん 相馬市では社協の建物が避難所となってしまう、避難所運営をしながら災害ボランティアセンターを立ち上げなければならなかった状況で、災害ボランティアセンターに携わる職員は今野さん1人であった。だが、日頃の繋がりから市内の地区連合や地元企業、商工会、市役所OB等から応援を受けられた。

会ったこともないNPOや各団体からの支援の申し出もあったが、交流したことのない人達を信頼して何かを任せることの難しさや住民へ繋ぐことの心配もあり、地元の応援を主体にして活動することに決めた。ただ、他からのマンパワーを受け入れることができたのならば、自宅へ戻る時間を作ることができたかも知れない、との感想も聞かれた。

●明城 徹也さん NGOとして被災地に支援に入っている状況や、「災害対策基本法」には「行政はボランティアと協力しなければならない」との一節があることの説明があった。

NGOとして各地に支援に入る場合には、支援活動の全体像を捉えることが大切であり、長期にわたって支援活動する場合には地元はどういう影響を与えるかを考えて入っているとのことであった。

●城 千聡さん 災害ボランティア活動支援プロジェクト会議のメンバーとして被災地に情報発信等の支援に入った経験から、災害時の混乱期に情報を発信することは非常に重要

だが、後回しになりがちな状況を痛感した。「自分たちだけでは出来ないから、支援者に手伝ってもらい、判断もある程度委ねないとできない」という組織としての覚悟が求められるという説明があった。

【意見交換】

3人の事例発表の中で印象に残った言葉を付箋に書き出し、その後にグループごとに感じたことや災害ボラセン運営に対する考えを討議した。

3. 担当者のコメント

実際に災害ボランティアセンターに携わったことのある参加者が多く見受けられた。全国各地で災害が起きており、自分が住んでいる地域でもこれから大きな災害が起きた場合にどのような取り組みをしていけばいいのか、参加者は真剣に事例発表に耳を傾け、意見交換も活発に行っていたようである。

パネリストもそれぞれの発表後にお互いへの質問を投げかけ、今回のテーマを考える上でヒントとなるさまざまな問題を浮かび上がらせていた。

災害ボランティアセンターを社協だけで運営することは現実的に厳しいのだが、最初はそういった方針になりがちである。社協だけで頑張ることは限界があり難しい、効率的ではない、と最初から社協が認めた上で、他の団体の協力を受け入れていく姿勢が当たり前になっていくことを予感させる分科会となった。

運営スタッフ／中井 庸平(相馬市社協)
鈴木 敦子(南相馬市社協)
鈴木 康(会津若松市社協)
石井真美子(いわき市社協)
木田美奈子(いわき市社協)

広域避難・県外避難と福島

参加者数 12名

基調報告

▶ 松本 雅昭さん
(福島県企画調整部避難地域復興局避難者支援課 課長/福島県)

報告者

▶ 野口比呂美さん (やまがた育児サークルランド代表/山形県)
▶ 三浦 綾さん (広島避難者の会アスチカ 代表/広島県)
▶ 柳本 新一さん (ふくしま連携復興センター「toiro」担当/福島県)
▶ 三浦恵美里さん、松村美保子さん (ふくしま子ども支援センター「ままカフェ」担当/福島県)
▶ 栗田 暢之さん (東日本大震災支援全国ネットワーク(JCN) 代表世話人/東京都)

ファシリテーター

▶ 佐藤 宏美さん、片山 春美さん、安田希代美さん
(ふくしま連携復興センター/福島県)

1. 概要

東日本大震災および福島第一原発事故というこれまでになかった災害で、福島県では最大で県内10万人、県外6万人の避難者が出る事態となった。県内外でさまざまな支援活動が行われているが、その全容や課題、そして避難元の福島の実情が把握しづらいため、より支援が難しくなっている。

この分科会では、避難先の課題と福島の実情を共有しながら、今後の支援に必要なことや今回の震災の教訓を探った。



2. 主な内容

●基調報告「福島県からの広域避難者の現状」：松本 雅昭さん

福島県内外の避難状況や除染進捗状況、復興公営住宅等の整備状況についての報告があった。県民の健康調査で甲状腺検査やホールボディカウンターによる内部被ばく検査を実施した。子どもが安心して育てられる環境づくりとして、子どもの医療費無料化制度や屋内遊び場を整備した。県産農林水産物の安全・安心確保のために出荷前にモニタリング検査を行ってきた。県外避難者への情報発信として、新聞等の広報誌を発行し送付している。

●報告「避難先での支援の現状と課題」：野口比呂美さん

やまがた育児サークルランドは、地域で自主的に活動する育児サークルのネットワーク作りから平成10年に発足し、「子育て当事者」の支援による子育て支援を大切にしてきた。震災後、山形市の避難所が閉鎖されるのを機に、公民館を利用しながら気兼ねなく避難親子が集える「ままカフェサロン」を始めた。支援の中で心がけていることは、相手を理解し、スタッフ自身が子育て経験者として公平、中立的な立場で、支援側が感情を溜めないことが大切である。また、できること、できないこと、すべきことをわきまえて支援していかなければならない。



●報告「避難当事者としてのつながりづくりとその支援」 三浦 綾さん

「アスチカ」は、「明日へすすむ力」という意味を持ち、避

難者による避難者のための会であり、約120世帯、約340名の避難者が登録している。主な活動内容は、交流カフェや出張交流カフェの開催、不安や悩みを一時でも忘れられるようなホッとできる時間づくり、会員用情報誌や一般向けの情報誌を毎月発行している。子どもが成長するにつれて支出が多くなり、今までより生活の満足度が年々苦しくなっている。

避難者同士の活動を維持していくことや避難者の身の振り方に合わせた支援をしていかなければならない。

●報告「電話相談・交流会等を通して見える避難者の現状」 柳本 新一さん

2014年5月から福島県の委託を受け、相談業務を開始し、主に県外へ避難している方から電話で相談を受けている。自主避難をしている30代から40代の子育て世代の母親からの相談が多くある。また、福島へ戻ってくる(帰還)意向のある方から福島の実状に関する問い合わせが多くある。

帰還に関する具体的な内容では、住まい、仕事、子育てなど複合的な問い合わせが多くなっている。

今後も県外に避難されている方たちの悩みや相談に真摯に耳を傾け、解決に向けた情報提供等に取り組んでいく。



●報告「避難先から戻ってきた親子を支える取り組み」 三浦恵美里さん、松村美保子さん

福島県の委託を受け、NPO 法人ピーンズふくしまが現地窓口として、現地ニーズの把握や必要な支援に取り組み、自



主避難している子育て世帯の支援に力を入れている。自主避難されている方を対象に「交流の場・ままカフェ」を新潟県や東京都などで開催している。また、福島に戻ってからの不安や心配なことを話せる居場所「ままカフェ」を、地域の団体の協力で県内の福島市、郡山市、いわき市、白河市、南相馬市の5ヶ所で開催している。「ままカフェ」の参加者からは、満足という声が多く、母親同士何でも話せる共有の場となっている。帰還後も不安を話せる場づくりを継続し、福島に戻ってきて良かったと思える環境づくりをしていかなければならない。



●報告「4年経過した後も続く広域避難の課題」

栗田 暢之さん

東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）は、東日本大震災における被災者、避難者への支援活動に携わる団体で構成されている全国規模の連絡組織である。避難者の状況把握は、都道府県によってまちまちであり、福島県からは全国に約4万4千人が避難している。一人ひとりの避難状況や置かれた環境は違うので、一人ひとりの不安や課題を解消し、決して孤立や絶望する者をださないことが大切である。

●グループ討議（3人～5人×3グループ）

- ①「避難先での自立を支える取組みと親子支援」
- ②「避難当事者から見える支援のあり方と広域避難・県外避難の今後の見直し」
- ③「福島への帰還に向けて必要な取り組みや、避難先から戻ってきた方のケアについて」

〈意見〉

- ・直接生の声が聞いて良かった。
- ・不安を抱え込むのではなく、自ら状況を伝えていくことが大事である。
- ・避難先ごとに地域性があるので支援や対応が異なり、個々に抱えている問題も一人一人違うので臨機応変に対応していかなければならない。
- ・支援する側は、避難元の状況がわからないことが多いのでその地域の状況や地域性を理解し、お互いに情報共有と情報発信していく必要がある。
- ・避難も4年8ヶ月が過ぎたので、これからは、当事者団



体を育てて自立させることが大切である。

- ・住居や仕事などの生活基盤が整っても、復興したとは限らず、心の基盤はいつまでも揺れ続けるので、今後、その心にどうより添っていくかが課題である。

3. 担当者のコメント

北は山形から南は宮崎まで、東日本大震災による広域避難者を支援されている方が集い、議論を深める場となった。今の福島の実情と、福島から行われている支援について知ること、避難先の各県で行われている支援の実際について共有すること、その双方が今も避難している方を支えていくにあたって必要な視点や課題を浮き彫りにしていくものであり、深く、真剣な議論が行われた。長期化する避難生活の課題、避難先の地域の違いによる支援格差の問題など、全国大会ならではの各地を俯瞰しての状況がつかめる議論はとても有意義であった。残念だったのが、参加者の伸び悩みである。運営担当の力不足もあるが、震災・避難者支援に関わる「風化」ということが懸念された。今後の課題としたい。



専門部会委員／中鉢 博之

（ふくしま連携復興センター）

運営スタッフ／畠山 陽一（浪江町社協）

大内龍太郎（飯舘村社協）

避難者の“今とこれから”を支える人たちと、 話そう・知ろう・考えよう



参加者数 24名

ファシリテーター

▶筒井のリ子さん (日本ボランティアコーディネーター協会 代表理事/東京都)

話題提供者

▶山崎 庸貴さん (ふくしま連携復興センター 理事・事務局長/福島県)

パネリスト

▶黒木 洋子さん (南相馬市社会福祉協議会 事務局長/福島県)

▶小林奈保子さん (コースター 田村市復興応援隊広域チームリーダー/福島県)

▶高梨 幸司さん (3.11被災者を支援するいわき連絡協議会 (通称：みんぷく) コミュニティ交流員チーフスーパーバイザー/福島県)

WS チューター

▶根本 光洋さん (本宮市社会福祉協議会 チーフ生活支援相談員/福島県)

▶吉田 裕司さん (須賀川市社会福祉協議会 主任福祉活動専門員/福島県)

1. 概要

津波被害や原発事故によって避難し、仮設・借り上げ住宅や復興公営住宅、災害公営住宅に暮らす人たち。一方、故郷やその周辺、あるいは避難先地域で自宅再建を図る人達があり、避難者同士や地域住民とのコミュニティ再生を様々な支援組織・者がサポートしている。この分科会では、「生活支援相談員」「復興支援員」「コミュニティ交流員」から日頃の活動や課題、展望などをお聞きし、故郷への帰還がなかなか進まない福島の“今”と、次の暮らしを支える支援について、一緒に学び、これらの知識を共有し今後の大災害への備えとして活かして頂こうと考えた。



2. 主な内容

■3つのしくみと取り組み団体からの活動発表

●話題提供者 山崎 庸貴さん

現在、避難者を支援する取り組みとして、大きく3つの取り組みがある。「生活支援相談員」は、避難者宅へ訪問（アウトリーチ）し、寄り添い、見守りなどを行う。避難者に一番近い場所で個別支援を行う、また幅広い業務を行うため、大変な仕事である。「復興支援員」は、地域協力活動（地域の復興、地域の町おこしなど）、コミュニティ再構築、生活支援などを行う。「コミュニティ交流員」は、復興公営住宅を中心に、住宅内の人達や地元住民の交流支援を行う福島県独自の事業である（この事業は福島県が初めて行う）。阪神淡路大震災の失敗を繰り返さない為に始めた。



●「生活支援相談員について」黒木 洋子さん

南相馬市には仮設住宅（平成27年9月現在、4,065人）、民間のアパートなどを県が借り上げた住宅（以降 借り上げ住宅）（平成27年5月現在、3,711人）の避難者がおり、生活支援相談員は仮設住宅、借り上げ住宅を365日訪問し、またサロン活動も行っている。高齢化、世帯分離、コミュニティの再構築、自立支援、孤立死、孤独死の発生、支援者の人材

不足、職員の疲弊、などの多くの問題を抱えているが、「いのちをつなぐ」役割として日々活動している。

●「復興支援員について」小林奈保子さん

地元住民との関係構築、住民による地域活動の支援、地域資源発掘とコーディネートを中心に、主な活動として「問題解決のお手伝い」、「復興のタネを応援する」、「交流人口増加を目指す」ことなどを行っている。当初、「復興とは何か？」と悩むこともあったが、住民宅を一軒一軒訪問し交流を図る事で、畑を貸してくれる住民に出会うなど、活動のきっかけができた。「田村っていいね」、「住んでいてよかった」と言える地域づくりを目指して活動している。

●「コミュニティ交流員について」高梨 幸司さん

復興公営住宅の支援を中心に、（1）自治組織の形成や運営支援、（2）交流促進を図るための訪問活動、（3）コミュニティ形成に向けたきっかけづくり、（4）入居者と地域住民との新たな交流の場創出、（5）関係機関と連携体制の構築、（6）ホームページ、みんぷく通信等による情報発信、これらの活動を行っている。長期化する避難生活に備えて、今後は、他の関係団体との連携が重要となってくる。





■ワークショップ（グループ討議）

ファシリテーター 筒井のリ子さん

①「パネリストにもう少し聞きたい事。」

- Q. 若い人が避難したまま地元に戻ってこないのはなぜ？
- A. 放射能への不安、インフラ整備が整っていない、託児所が職員不足の為に子供を預ける場所がないなど子育て環境が充分にない。
- Q. 避難先地域の住民とのかかわりはどのようにしているのか？
- A. まずは、避難先の地域住民の声を取り入れながら、自治会作りを行っている。
- Q. 震災後、5年を迎えるにあたって今後の避難者交流のしくみ作りはどのように行うのか？
- A. 住民参加型の交流会から、住民主動型の交流会、自主的な活動作りを目指して行く。

②「これから」に向けて～大切にしたいこと、取り組みたいこと～

- ・ 福島の特産物が安全であることを伝えたい。
- ・ 福島情報を県外に発信する。
- ・ 現状をありのままに伝え、理解してもらう。
- ・ 避難者自身も働く、立ち上がる。
- ・ お互い助け合える関係作り、（笑って過ごして行きたい。）
- ・ 避難されている方の話を傾聴して笑顔を届けたい。
- ・ 若い人に笑顔で声をかけたい、一人で食事をする高齢者にも声をかけたい



3. 担当者のコメント

避難者を支援する大きな3つの仕組みと、取り組んでいる団体の活動を紹介した。復興と言っても、被災者にはさまざまな人がおり、色々な考え方がある。復興の形は一人一人違い、被災者一人一人が納得することが復興と言えるのではないだろうか。この難しい課題に対して、3つの支援団体の共通する部分として、被災者のお宅を一軒一軒訪問し、住民一人一人と向き合っている。そのような日々の地道な活動の基盤があって初めて復興支援活動につながるのではないのかと感じた。

専門部会委員／古山 郁（市民公益活動パートナーズ）
運営スタッフ／池崎 悟（浪江町社協）
星 良樹（大熊町社協）



福島の子ども保養 ～ありがとう 子どもの未来につなげよう～



参加者数 5名

講師

▶西崎 伸子さん
(福島大学行政政策学類 准教授/福島県)

フリップディスカッション 進行役

▶佐藤 一夫さん
(福島県生活協同組合連合会 専務理事/福島県)

1. 概要

原発事故から4年が過ぎたが収束の見通しがたっておらず、今なお12万人近い福島県人が県内外に避難している。放射線量の低い地域に子ども達とその保護者をお連れして、保養する企画が全国で取り組まれている。福島の子ども保養プロジェクト活動3年レポートの上映を通して放射能への不安やストレスを感じながらもそこに暮らさざるを得ない人々の日常を知り、また全国で受け入れ活動をしている人たちと取り組みを共有し、今後の連携のあり方について考え、子ども達の未来につなげていく。



2. 主な内容

① 基調報告

- 1) 原子力災害は戦後最大の環境汚染
- 2) 全国で展開する保養の位置づけ
- 3) We are all fukushima (=わたしたちはみな当事者)

2011年の原子力災害は人為的災害である。原子力災害の特徴として、事後的にしか被害の様相は分からないので予防原則が大切である。

公害問題の最大の教訓は予防原則、画期的な子ども被災者支援法、原子力災害にともなう避難実態や避難から帰還の動きである。

また、保養の取り組みをする団体や福島市による放射能に関する市民意識調査を行い、子どもの肥満傾向改善されない中、県内に開設された屋内遊技場が設置された。

そして東日本大震災により引きこもりや暴力、通学路の除染、被災園児25%の問題行動や子育て環境の変化と震災以後の特徴、終わらない被災の時間が問題点である。

福島の子ども保養プロジェクトでは「週末保養企画」「就学児週末保養企画」「長期休暇保養企画」「おもいっきり！外遊びコース」「こども遊び塾」の目的別で5つのコースを実施している。

復興への道筋、人と自然の関わり方の再構築、わたしたちはみな当事者として関わる必要不可欠である。



② グループワーク内容

- 1) 自己紹介…各自
- 2) 震災当時のこと、自分や団体の活動…各自
- 3) 保養という取り組みについて感じたこと

「経済的理由、家族の事情など、様々な理由で不安を抱えながらも生活をしている。そういった人々を対象とし、できるだけ放射線の低い地域で心身をリフレッシュしてもらう。」

- 4) 子どもの遊び環境について思うこと（子ども目線）
「ゲームなど家の中で遊び、一緒にいるけど1人で遊ぶ」
- 5) 子育て環境について思うこと（大人目線）
「保護者の過保護で消極的になる。大人の介助が必要」
- 6) 地域の生活環境について思うこと（地域社会目線）
「放射能の不安。昔と近い生活環境を心がける」
- 7) 今後、どのような支援が必要か（取り組むべき課題や連携の在り方）
「子どもの社会なので子どもの本音を知り、遊びの場をつくってあげる。仲間づくりや子どもが工夫して遊び場をつくり、遊び方を教えたり教えられたりしたい。」

3. 担当者のコメント

保養を知ることで被災地の子どもたちの日常やいろいろな保養の取り組みが分かり、充実した時間であった。近い将来、放射能を気にしない普通の生活ができるように、日頃から子ども目線で生活していきたい。外であまり遊べない状況のなか、コヨットの活動は子どもたちに伸び伸びと遊べる環境をつくっているため、子どもたちは充実した時間を過ごしていると思った。

この分科会でいろんな考え方があると改めて感じ、今後、生活面で活かしていきたい。

専門部会委員/佐藤 一夫（福島県生活協同組合連合会）

運営スタッフ/青木 剛司（楳葉町社協）

目黒 廣子（新地町社協）

防災や減災をもっと身近に！

参加者数 25名

講師

▶ 藁谷 俊史さん
(日本防災士会 福島県支部長／福島県)

ファシリテーター

▶ 佐々木公一さん
(日本青年会議所福島ブロック協議会／福島県)



1. 概要

災害時の避難所やボランティア活動の場で、トラブルが生じることがある。それは、災害時（緊急時）の状況下では様々な葛藤や人間模様が生まれてくることによるものである。私たちはそれを踏まえ、日頃から災害時の対応を自分たちの課題として捉え、防災意識を高めていくことが必要である。

この分科会では、防災の基礎的な知識を学び、普段の生活からできる防災・減災を学ぶことができます。また、防災士の方のお話を聞き、災害時の様々な状況下を想定した「クロスロード（防災ゲーム）」を通して自分なりに置き換えることで、有事の際に役立てられるよう、楽しみながら防災や減災について学ぶ内容とした。



2. 主な内容

【講義】藁谷 俊史さん

1. 防災士と福島県支部の紹介（役割・活動）
2. 災害を知ろう（地震・津波・火山・水害・突風・火災・人災）
3. 東日本大震災での福島県の被害
福島県の四重苦：最大震度6強（一部震度7を記録）、
最大津波高20メートル（非公式）
放射能汚染、風評被害、観光客の減、
農作物が作れない、売れない
福島県の人的被害…死者、行方不明者：3,682人
…避難者数：県内 74,337人
県外 45,934人
福島県の家屋被害…全壊：21,511棟
半壊：75,453棟
4. 身近でできる防災対策
防災・減災・備えの心得：居安思危（こあんしき）平和なときから災害が起きたときのことを考えよう。
事前の非常用持出品準備で素早い避難ができる。
5. 避難と避難所運営（共助・協働）
消防団や自主防災組織、自治会の方と協力し、救出・救助の習得と実践、災害弱者の行動支援を行なう。日頃より地域の訓練やボランティア活動に協力し、経験を積むことで、避難所運営に協力できる。
6. 東日本大震災から得た教訓
災害の時に大きな被害をもたらすのは、「想定もしない」「思いもしなかった」事が起きるからである。
そして、大きな被害に遭ってから悔やむことが繰り返されてきた。これまでの記録などにより、どのような被害が発生したかを学習しておくことが有効である。
それでも甚大な被害が出る。災害は、経験や教科書通

りに起きない。培った知識で、早めの行動（避難）を!!
助かった方は、共助と協働の助け合いで生き延びろ！

7. 最後に…

自分の命は自分で守る。そして、助かった命は家族や地域のために。

今できることは、今すぐやる。やれることは先延ばししない。

【クロスロードゲーム(防災ゲーム)】進行 佐々木公一さん

4グループに別れ、大地震が起きたときへの備えと対応をどうするか。日常生活で思いもよらないような“決断すべき場面”を想定（問題）し、YES・NOカードを使い多数派と少数派の意見を出し合い、それぞれの分かれ道となる決断を、ゲームをしながら楽しく話し合った。

3. 担当者のコメント

日常生活の中でほんの些細なことでも、災害を想定し、備えをしておくことで減災、防災につながっていき、想定外のことが起きても対応できる。命を守るための知識を知っておくことで、そのときに最善の行動がとれる。先ず自分が率先して避難することで、その姿をみて他の人も避難し、多くの人を救うことが可能となる。

クロスロードゲームではそれぞれの生活環境や土地柄、地域性で対応や考え方が違うことがわかることで、とらわれた発想や想定をしていたことに気付くことができ、災害列島に住んでいることを意識して暮らしていかなければと再認識することができた。

専門部会委員／松原 文隆（日本青年会議所福島ブロック協議会）
運営スタッフ／青木 圭太（南相馬市社協）
栗城 恵子（葛尾村社協）

被災者支援に役立つ知識と技術を学んでみよう



参加者数 15名

メイン講師

▶ 武田 玲子さん

(日本赤十字社福島県支部 事業推進課長、赤十字健康
生活支援講習指導員／福島県)

サブ講師

▶ 渡邊 知子さん

(福島赤十字病院 看護副部長、赤十字健康生活支援講
習指導員／福島県)

1. 概要

災害時の長引く避難生活で、被災者とりわけ高齢者の多くに、運動不足による生活不活発病や生活習慣病の憎悪が生じることが知られており、避難所での生活を支援することが大切になってきている。

この分科会では、被災者の避難所生活に焦点をあてて、不自由な生活から被災者を守るために誰もが知っておきたい知識や避難所でのボランティア活動にも役立つ支援技術を座学や実習を通して学んだ。



2. 主な内容

前半の座学では東日本大震災による福島県の被災状況や日本赤十字社福島県支部の救護活動を振り返りながら、「被災者支援に役立つ知識」として、避難生活が健康に与える影響や災害に備えての講義が行われた。

災害が及ぼすところへの影響では、被災された方々が示す反応は「異常な出来事に対する正常な反応」であることや、こころのケアとして支援者は、そばにいてあげる、親身になって話を聞く、感情を受け止める、ストレスを軽減するように支援することが大切であると教えられた。

災害がからだに及ぼす影響としては、特に高齢者は、避難生活によって「動きにくい」ため、「動かない」でいると「動けなくなる」生活不活発病に気がつけることが大切で、予防には毎日身体を動かすことや、ボランティアによる必要以上の手助けは避け、自立心を引き出すように、動く手伝いをすることが大切であることを学んだ。

また、避難されている方は大きなストレスを抱えていることを忘れないことや、「話を聞く」ことは大切な支援の1つであり、それだけでも少し心が軽くなるかもしれないこと、自分も無理せずできる範囲で手伝うことが大切であることなど、避難所でのボランティアの心得も学んだ。

後半の実習では「避難所ボランティアに役立つ技術」とし



て、健康づくりストレッチ体操、ウォーキング、立ち上がり支援のしかた、ホットタオルのつくり方、足湯のしかた、毛布を使ったガウン、リラクゼーションの方法について紹介され、参加者が2人組みとなり実際に体験を通して楽しく学んだ。特に肩や背中にやさしく触れるスキンシップ例として体験したリラクゼーションでは、「からだに直接触れることで、温かい手の温もりが伝わり癒される、気持ちがよくなり喜ばれる、自然にコミュニケーションをもつことができる」というその効果について参加者自身が実感した。

3. 担当者のコメント

実習のほか座学の途中にも体操や歌を歌うという参加者が体を動かす内容が多く含まれ、参加者からは常に笑みがこぼれ、終始和やかな雰囲気であった。身近な物品を使用してちょっとした工夫でできるホットタオル、足湯、毛布を使ったガウンなどに参加者は驚きの様子であった。

参加者からは、「すぐにでも使える内容を楽しく学ぶことができた。さっそくボランティア活動に生かしたい」「被災者支援というもっと難しいものだと思っていたが、自分にもできそうなことがあることに気付いた」「普段からこのような知識や技術を身に付け災害に備えることが大切」などの声があった。

本分科会で学んだ被災者支援に役立つ知識や技術が、参加者各自の今後のボランティア活動に活用され、被災者の心と身体の健康づくりに役立つことを願う。

専門部会委員／久保 芳宏 (日本赤十字社福島県支部)
運営スタッフ／佐藤 秀子 (川内村社協)
泉田 雅史 (双葉町社協)



D-1

フィールドワーク ～大沼郡金山町・昭和村～ 過疎と少子高齢化に悩む集落、その暮らし方 ～限られた社会資源を最大限に引き出すためには～

参加者数 24名

コーディネーター

▶ 佐藤 嘉夫さん
(岩手県立大学 名誉教授/岩手県)

報告者

▶ 加藤 ゆきさん
(金山町社会福祉協議会 事務局長/福島県)

▶ 五十嵐 伸さん
(昭和村社会福祉協議会 福祉活動専門員/福島県)

▶ 和泉 朋子さん
(芋麻倶楽部 チーフマネージャー/福島県)



1. 概要

全国有数の豪雪地帯でもあり、少子高齢化に悩む金山町・昭和村の人々の暮らし方と社協、芋麻倶楽部の活動の紹介や2011年新潟・福島豪雨災害の復興状況について報告した。

また、もう一つのねらいとして、また来ていただけるよう、現地視察をしながら地域の魅力を紹介した。



2. 主な内容

活動報告（しらかば荘）

《昭和村社会福祉協議会》 福島県の南西部に位置する昭和村は、高齢化率55%を超え少子高齢化に悩むが、住民同士の支え合い「結」の精神が今でも息づく。

昭和村社会福祉協議会は、平成11年に「除雪支援事業」、平成24年に「住民支え合い事業」といった、住民の依頼に基づき住民が支援を行う、住民同士の支え合いを補完する事業に取り組む。今後も限られた資源の中で、地域課題に立ち向かいながら、住み慣れた地域で誰もがその人らしく暮らしていくため、地域内の支え合い「結」に注目し、維持・進展を目指す。

《芋麻倶楽部》 昭和村で唯一のNPOである芋麻倶楽部は、地域活性化と地域の担い手となる人材育成を目指し数多くの活動をしている。「ふるさとワークキャンプ」は、若者が昭和村の住民の家にホームステイをする代わりに、家事や農作業を手伝うというもの。これまでに芋麻倶楽部が様々な事業に取り組む中で、地域活性とは何なのか悩み、住民への直接的な支援を考え立ち上げた事業である。また、「ムラ・キャンパス」は、村全体をキャンパスとして、大学生が住民と一緒に農業や除雪をしながら、昔から変わらない持続可能な生活を探る。この事業は大学生だけではなく、住民にとっても気づきや学びが多い。

この地域には「一人は皆のために。皆は1人のために。」「困った人は見逃さない」という日本の原点であるしくみがある。これからも芋麻倶楽部は、住民がとうしたら幸せになるかを考え、行政とも相談をしながら活動を進めていきたい。

《金山町社会福祉協議会》 金山町は、高齢化率58%を超え、少子・高齢・過疎の町ではあるが、長寿の町でもあり、元気な高齢者が多い。

2011年7月の新潟・福島豪雨災害で、只見川氾濫による住宅の損壊や橋の崩落などの甚大な被害を受けた。その時に開設された金山町災害ボランティアセンターは、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議、社協、ボランティアが協働運営したことや、活動者すべてに区別なく給水活動を行うなどの特色があった。また、ボランティアセンター設置の効果としては、一度はもう住めないと思っていた家の泥がきれいにかき出され、また住み続けることができるようになったこと。そして全国のボランティアを受け入れるということが、住民にとっても良い体験になった。

昭和村 道の駅視察

からむし工芸博物館では、昭和村の伝統工芸である「からむし織り」の着物や民具などを見学。この日は糸作りの実演が行われ、参加者の皆さんは熱心に伝統の技に見入り、質問などを投げかけていた。

《バス移動》 昭和村→金山町へ

- ・2011年新潟・福島豪雨災害で被害のあった、金山町西谷・越川・大塩地区の復興状況や崩落したJR鉄橋跡を車窓から視察。
- ・大塩炭酸水見学（国内でも珍しい炭酸を含んだ湧水）

ランチトーク（金山町老人福祉センター）

地元ボランティアによる郷土料理のおもてなし

6テーブルに分かれ会食後、テーブルごとに代表1名ずつ感想発表

コーディネーターによるまとめ

3. 担当者のコメント

このフィールドワークには、この地域と同じように過疎に悩む地域の方や、急速に高齢化が進んでいる大都市部に住む方など、全国の様々な地域から参加いただいた。少ない時間ではあったが、「帰ったら、人々のつながりについて原点にもどり、仲間と考えたい。」「お世話する、される側の区別なく支え合うことが大切だと思った。」といった感想を聞くことができ、参加者がそれぞれの視点で学んでいただけたように思える。

コーディネーターの佐藤嘉夫先生からは、「災害が起こるたびに見直されてきた、『つながり・信頼・助け合う心』は過疎に立ち向かう田舎にこそ残っていた。この大切なものが、私たち社会全体にも根付くようにしていきたい。」とまとめていただき、今回のフィールドワークでの学びが全国へ広がっていくことを期待するとともに、私たちも、大切な資源である「結」をこわしてしまわないように住民の方々に応援していかなければならないと強く感じた。

専門部会委員/岡崎 達也（会津若松市社協）

運営スタッフ

加藤 ゆき（金山町社協）、五十嵐 伸（昭和村社協）
小林さや香（昭和村社協）、中川 潤（芋麻倶楽部）

フィールドワーク～会津若松市～ 歴史と伝統の会津。 街を歩きながら、「おもてなし」を体感!

参加者数 14名

【交流会】ナビゲーター ▶新城 希子さん（会津若松市社会福祉協議会 理事、会津若松商工会議所 女性会会長／福島県）
演 舞 披 露 ▶山内 理加さん（会津若松観光ビューロー キャンペーンクルー／福島県）

【講座「魅力ある観光地づくり」】プレゼンター ▶鶴川 大さん（会津若松市観光課 課長／福島県）

【鶴ヶ城散策】エスコート ▶真船 和男さん、熊田 博晃さん
（会津若松観光ビューロー 鶴ヶ城ボランティアガイド／福島県）

【街歩き】エスコート ▶小野寺裕子さん、山口 乃子さん、山崎 捷子さん（アネッサクラブ／福島県）他

【講座「外国人観光客にもやさしい会津」】エスコート
▶小林 真司さん（会津若松市国際交流協会 事務局長／福島県）
▶釣巻 美智さん、手代木トロイさん、渡辺真知子さん
（会津若松市国際交流協会 外国語ボランティアガイド／福島県）

1. 概要

「6つのどうぞ」「おもてなし8箇条」で日本一のおもてなしを目指している会津若松市。

その見せ方・活かし方、それを取り巻く街全体の取り組みを、ボランティアガイドや姉様（あねさま）達の心を込めた「極上のおもてなし」術を体感しながら、会津若松の街中を散策していただいた。

歴史ある街並みに、人情あふれる人々、屹立する鶴ヶ城を肌で感じていただき、参加者の皆さまの今後のまちづくり活動や観光ボランティア活動実践のヒントとなりえたと感じている。



2. 主な内容

○夕食・交流会

参加者同士、受入側スタッフとの交流を目的に開催。会津若松キャンペーンクルーによる演舞披露などを交え、会津のおもてなしに触れていただいた。

○講座「魅力ある観光地づくり」

会津若松市では条例や観光振興計画などの策定により観光産業の活性化を目指し、様々な試みを行っている。軒先ギャラリーや6つのどうぞ運動（お茶やイス、トイレなど6つの提供可能なものを、ステッカーで店頭に表示して頂く）などを進めている。さらに、観光ボランティアガイド、外国語ボランティアの拡充も進めている。さらに市民一人一人が観光ガイドの意識を持ち、おもてなしの心で観光客をお迎えする「市民総ガイド運動」を実行しており、魅力的な観光地づくりを進めている。

○鶴ヶ城散策（ボランティアガイドの体験）

構造物の説明、場内建立の荒城の月碑にて参加者全員で「荒城の月」を合唱など、ボランティアガイドによる実践活動を体験していただいた。

○街歩き

参加者は2グループ（あかべこ・白虎）に分かれ、各店舗にておもてなしを体験した。各店舗の名物女将が参加者を温かく迎え、穏やかなひとときを過ごせた様子だった。



○講座「外国人観光客にもやさしい会津」

会津若松市国際交流協会には約500名の会員が登録しており、47名の外国語ボランティアが活躍。外国の方に対するポイントとして、問いかけなどを交えることで、客の関心を引き出すことができるということ。また簡単に見てわかるもの（ハート型の石垣や桃の瓦など）について解説をするのも効果的。個人客と団体客の違いとして、団体客は時間のコントロールが難しく、個人客の場合は観光の目的や興味を正確に把握できていないと、適切な情報を提供できないことなど具体例を交えて解説していただいた。

3. 担当者のコメント

当初予定した定員数には満たなかったものの、参加者にとっては概ね満足いただける内容になっていたと思われる。会津若松市の取り組みを知っていただく講座や姉様のおもてなしの流儀を体験していただき、市の取り組みについてご理解いただけたものと考えます。

プレゼンターや事務局も、全国からご参集くださった経験豊富な方々と意見を交換でき、有意義な時間を共有することができた。



専門部会委員／岡崎 達也（会津若松市社協）

運営スタッフ／佐藤 忠隆（会津若松市社協）

田崎 万豊（柳津町社協）

室野井弘美（会津若松市社協）

遠藤 綾子（会津若松市社協）

大会振り返り

～ふくしまからのメッセージ～

今大会を通じて参加者の皆さん、そして全国の皆さんに何を伝え、何を引き継いでいけばいいのか各分科会のテーマ等から探り、そこから導き出した未来につなげたい思い、今後の地域のあり方、そして「つながり」について提案いただきました。

出演者



中田 スウラ

実行委員会 実行委員長
(福島大学うつくしまふくしま
未来支援センター長)



遠藤 徳雄

つながり・次世代
ボランティア部会長
(日本労働組合総連合会福島県
連合会副事務局長)



添田 祐司

たすけあい・支え合いの
まちづくり部会長
(社会福祉法人郡山市社会福祉
協議会地域福祉課長)



中鉢 博之

ふくしまの今と未来部会長
(一般社団法人ふくしま連携復
興センター理事)

○中田スウラ（以下、中田）

もう一度この会場にお集まりいただき、本当にありがとうございます。

それでは、今大会の2日間を振り返りながら、私たちがこれから未来に向けて何を引き継いでいけばいいのかを考えていきたいと思います。

1日目のプログラムを振り返ってみます。基調講演の飯舘村菅野村長からは、お金の世界から命を大切に世界に変えていきたい、効率や経済だけを考えていた成長重視の時代から、人権や命を大切に成熟された世界に変えていかなければいけない、数えられないものや見えないものをいかに私たちが深くつかみ取りながら次世代につないでいくのか、こんな大きな課題提供をいた

しました。

その後のシンポジウムでは、新しい社会、世界をつくっていくためには、私たちが相互に手を取り合い、連携していく、つながっていく必要があるが、単純につなごうといってもなかなかうまくいかない場合もあります。お互いが何を大切にしようとしているのかをつかみ取りながらつながっていくことがとても大事であること、お互いの大切にしたいこと、困っていること、それを聞き取る力が必要であるとシンポジストの鈴木さん、栗林さんからお話いただいたように思います。

そして、開沼さんからは、地域の中で困っていることの奥にある地域の課題を、科学的にきちんと把握することによって、その課題を乗り越えて

いくヒントが出てくるのではないか、こんなお話をいただいたように思います。

昨日のそうした成果を受けて、今日はそれぞれの分科会の中で多様な議論が行われました。分科会は3つの柱を設けております。1つ目は「たすけあい・支え合いのまちづくり」、そして、2つ目が「つながり・次世代ボランティア」、そして、そうした問題を福島という地域に凝縮させながら、地域社会の現状と未来を考える「ふくしまの今と未来」で構成されています。それぞれの分科会でどのような議論が行われたのかを各部長さんからご紹介いただきます。

それでは、たすけあい・支え合いのまちづくり部会の添田さんをお願いします。

○添田 祐司（以下、添田）

たすけあい・支え合いのまちづくり部会では、5つの分科会と、会津方面へのフィールドワーク2コースの計7つの企画に対し、400人近い参加者の方に集まっていただきました。

部会の趣旨について

▶ まちづくりの必要性

- ・ 少子高齢化の進行、人口減少
- ・ 家族形態、家族機能の変化
- ・ 地域コミュニティの希薄化
- ・ 社会的排除や生活困窮の問題

▶ 東日本大震災 ―ふくしまの経験―

- ・ 住民同士が支え合い、助け合う姿
- ・ 地域コミュニティ再生への道のり

まず本部会の趣旨ですが、2つの視点を持っています。1つ目は、まちづくり活動の必要性、2つ目は東日本大震災、福島県の経験を踏まえてという視点です。

1つ目のまちづくり活動の必要性ですが、地域社会にはさまざまな課題が山積しております。

1点目が少子高齢化社会・人口減少社会の問題です。この問題は社会全体にさまざまな影響をもたらしていますが、地域社会に目を転じてみると

きにも、地域の様変わり、変容ということで影響が出ております。

2点目は家族形態・家族機能の変化です。家族の在り方が核家族化と言われて久しいわけですが、単身世帯の増加など家族の形が変わってきています。また、家族が従来担ってきた家族間の助け合いだったり、家事を分担し合ったりという従来の機能も様変わりしています。また、家庭が情緒的な安定をもたらす場とも言いにくいような環境も出てきています。

3点目は、地域コミュニティの希薄化、いわゆる隣近所のつながりが薄れ、無関心な状況が生まれていることです。

4点目に新たな課題として、例えばいじめや虐待、引きこもり、自殺などといった、少数者の方々が排除される社会であったり、生活困窮の問題が顕著になってきています。これらに対して社会的に包み込む社会的包摂の必要性が高まっていると言えます。

次に2つ目の視点ですが、東日本大震災では、巨大地震・大津波の被災に加え、福島県ではご承知のように原発事故の影響を受けました。被災した中で住民同士が支え合い助け合う姿が数多く報じられ、それによって絆の大切さがクローズアップされました。また、原発事故で避難を余儀なくされている人たちがやがて自分のふるさとに戻っていく、その中でコミュニティを再生していく、復興していくという長い道のりの半ばににいるということ、または、ふるさとへの帰還を断念し、新しい土地のコミュニティの一員として生活を再建していく、そういった現状が震災の中から福島県におけるまちづくりの課



題として捉えられています。

続いて、企画に込めた思いですが、6つあります。1つ目は、住民主体のまちづくりの大切さを確認し合うこと。2つ目にお互いの顔の見える人と人とのつながりの大切さを確認し合えるような話し合いを持つこと。3つ目に、生きがいを得られる、または生きがいを見いだせるような地域づくりの大切さを確認し合うこと。4つ目にユニバーサルデザインなど誰にも優しいまちづくり、そういった視点の大切さを確認し合うこと。5つ目に次世代へ文化、価値観を継承することができるまちづくりの大切さを確認すること。6つ目に、見えない生活から、または見ようとしないう、目を背けているような生活課題にみんなが関心を示すようなまちづくりを目指すこと。以上が企画に込めた思いです。

企画に込めた思い

- 住民が主役(住民主体)のまちづくり
- 顔の見える人と人との「つながり」
- 生きがいを得られる地域づくり
- 誰にもやさしいまちづくり
- 次世代へ文化・価値観を継承するまちづくり
- 見えない生活課題に関心をもちまちづくり

次に分科会の企画ですが、本部会には7つの分科会があります。それぞれのテーマは、こういったところを切り口にしたらご参加いただける人たちの関心をより多く引き出せるかということで企画しました。各分科会の趣旨につきましては、大会プログラムの方でご確認をいただければと思います。

分科会の企画

- ふれあい・いきいきサロン全国研究交流会
～再発見！サロンがもたらす皆さんの「福」～
- やさしい日本語ワークショップ
～誰にとっても易しく優しいコミュニケーションの手段～
- 子どもたちと一緒に地域文化でまちおこし
- 地域の中のおたがいさま
～住民主体の支え合い・助け合いのまちづくり～
- 脱！！貧困 ～学習支援という一つの方法～
- 過疎と少子高齢化に悩む集落、その暮らし方
- 歴史と伝統の会津。「おもてなし」を体感

最後になりますが、本部会で議論されたことで、1つ典型的なものを私が担当した「ふれあい・いきいきサロン全国研究交流会」の講師都築光一先生のお話の中からご紹介します。

議論されたこと

- 高齢者と子どもとの世代間交流は、地域への愛着心をはぐくむことに通じる
- あらゆる人を「例外」としない地域づくりが、地域の「豊かさ」を示すものである
- 次の世代に誇れる地域をいかに残すかが、今を生きる者への課題

(東北福祉大学総合福祉学部 都築光一教授)

1つ目は、高齢者と子どもとの世代間交流は地域への愛着心を育むことにつながるとおっしゃっていました。愛着心、または文化や価値観を育むということにもなるのかなと思います。

2つ目に、あらゆる人を例外としない地域づくりが地域の豊かさを示すものであるということですので。排除しない包み込む社会、無関心ではなく関心を示す地域社会です。それから3つ目に、次の世代に誇れる地域をいかに残すかが今を生きる者への課題だということで、私たちが若い世代に地域を引き継いでいくことの大切さを議論し合いました。ボランティアによる多彩なまちづくりの活動は、まさに若い世代に地域を引き継いでいくものであり、それがまた次の世代へつながり、住民が主体となって取り組むまちづくり活動の担っている使命ではないかなということが議論の柱でした。また、そういったまちづくりの使命を担っていくことがさまざまなボランティア活動の醍醐味といえるのではないかなと感じたところです。

○中田

ありがとうございます。地域の理解を世代間を超えてつなぎながら、地域の課題を把握し、その解決していく過程でボランティアの役割は大きいこと、そしてある意味、ボランティアの醍醐味はそんなところにあるのではないかとまとめていただきました。

また、地域の理解、地域の課題を捉えていくときに、どんな人も例外とせず、大切な住民として位置づけながらつながっていくことも大切であるということがポイントだったと思います。

続きまして、つながり・次世代ボランティア部会の遠藤さんお願いいたします。

○遠藤 徳雄（以下、遠藤）

この部会は、さまざまな面のつながりに焦点を当てて考えていただく分科会を7つ企画させていただきました。

分科会の内容を紹介させていただきたいと思いますが、1つ目が「地域で育むふくしのこころ」ということで、地域の中でボランティア活動に取り組む高校生の事例や趣味を介してつながった人々が地域の課題解決に参加していく事例などを参考に、地域住民を巻き込んだこれからの福祉教育について考えました。

2つ目は「働きながら取り組むボランティア活動」です。これから多くのボランティア参加を促進し、広げていくためには、やはり働きながら、その合間でエネルギーを貸していただきたいという思いがあります。本分科会は働きながら取り組むボランティア活動について、課題とその可能性を探り、これからの広がり結びつけたいという思いで企画しました。

3つ目は「国際的なつながりを広げ、強化し、この経験を国内で活かす」という分科会です。国際貢献、海外でのボランティア活動を、自分自身、地域社会の活性化や国際化にどのように役立てるかを考える機会としました。

4つ目は「人と人をつなぐレクリエーションボランティア」ということで、人と人をつなぐレクリエーションの役割を楽しみながら学び、レクリエーションボランティアの魅力を体感することにより、理解を深めるという思いで企画しました。

そして、5つ目は「次世代を担う若者のチカラを未来へ～つなごう、活かそう、地域で輝く若い力～」という分科会です。若者が取り組む事例から、私たちが期待する力とは何か、若者を巻き込

むポイント、つながるコツ、若い力の活かし方を考える機会としました。

6つ目は「“協働”のいろはを学ぶ～多様な団体間のつながりで生み出す課題に挑む力～」ということで、多様な組織や団体が課題を持ち寄り、共通の目標に向かって協働した事例を通して、個々の強みの足し算を超え、相乗効果が生まれていく過程を振り返り、あらためて協働の意味と効果、そして具体的な方法を学ぶというねらいで企画しました。

最後に「子どもたちにおもちゃのすばらしさと遊びのたのしさを～震災後の活動を中心に・おもちゃ図書館ボランティアの役割と活動の原点～」という分科会です。震災後の移動おもちゃ図書館の果たした役割を考え、これからのおもちゃ図書館ボランティアの意義や可能性を探る場ということで、今、ゲームやネットが流行するご時世になりましたが、おもちゃ遊びは、子どもの純粋な心を育み、創意工夫など社会教育にもつながるのではないのでしょうか。

以上7つの分科会を開催し、300名近い方にご参加いただきました。それぞれ認識も深めていただいたことと思いますが、7つの分科会に共通するキーワードは、「つながる」です。人の営みにとって「つながる」は、かけがえのないキーワードだと思います。人がつながることから始まる。私たちは、助けを求める方も助ける方も、つながりがあることで守られる。そんな発見ができた部会になったのではないかと考えております。ですから、「つながることから始めよう」という出発点に立ってボランティアを皆さんと一緒に考えてみたいという思いを持ちながら、私からの報告とさせていただきます。

○中田

ありがとうございました。添田さんから、地域でつながっていくということがとても大事であること、地域住民が主体性を持って地域の課題を把握し、それを解決していくためにどのようにつながっていくのか、その重要性を最初にご指摘いただいたと思います。

そして、遠藤さんからは、つながることはやはり大事なことであり、学校教育の力を借りる、企業とつながる、つながるということを模索していく上で、国内だけではなく、世界とつながるということをどう考えていけばいいのかなど、つながるための工夫や視点、そして、どのようなシステムを考えていけばいいのかということをご検討いただいたと考えております。

それでは、お二人の報告から今の地域にとってボランティアの果たす役割、つながりの重要性を再確認いただいておりますが、そのつながり方やつながりが地域の課題とどのようにリンクしているのかを、より具体的に福島県あるいは東日本大震災の中で、応用問題としてどのように考えているのかを中鉢さんから、ご報告いただければと思います。

○中鉢 博之（以下、中鉢）

「ふくしまの今と未来部会」は、東日本大震災と切っても切れないというところで分科会の設定をしました。つながりや地域が一旦崩れてしまった福島が、こういった形で再生していったのか分科会の中で話し合いが行われました。そこが「ふくしまの今と未来部会」という名前にも反映されています。

この部会の中では8つの分科会を企画しました。

まず1つ目は「避難所運営とボランティア」ということで、実はここビッグパレットふくしまは、4年半前には避難所でした。多くの被災者の生活の場でしたし、色々なボランティア活動が展開されていました。その中で起こった課題について、実際に避難所運営に携わった方や関わっていたボランティアの方からお話をいただきました。その後、「もし大規模避難所の運営責任者だったら」ということでワークショップを展開いたしました。皆さん自分が責任者になったらということを考えたことがありますでしょうか。分科会の皆さんも実際に自分が担当したらどうなるのだろうということを考えていらしたので、議論されたことを地域に持ち帰って、自分のこととしてもう一度考えてみたいという意見が出されました。また、避難

所への障がい者の受け入れや避難弱者への支援も含め、非常に中身の深い議論ができたと思っております。

分科会C-1

避難所運営とボランティア

～東日本大震災直下の大規模避難所・あの日の時～

- 参加人数 約30名
- 参加者の雰囲気 熱い議論
- 討議内容
 - ワークショップ 「もし大規模避難所の運営責任者だったら」
DV夫には合わせ!!
「もしボラセンの責任者だったら」
ボランティアの受け入れ・・・困ったボランティアへの対応
- こんな意見が・・・ 避難所への障がい者の受け入れ、福祉避難所の必要性

2つ目は「災害時の要援護者支援のあり方を考える」ということで、福祉施設における避難の過程や、その後、在宅の避難者の方にどういう形で支援を届けるのかという視点から、相談支援専門職チームが行ってきたソーシャルワークの取り組み等について議論がされました。その中で特に地域で暮らす障がい者の方等を地域の中で支えていくためにどうすればいいのかということで、民生委員さんとの連携が非常に大事であること、日頃からつながっていることが大事であること、また個人情報についての取り扱いをどうしたらいいのかというような具体的な議論がされました。

分科会C-2

災害時の要援護者支援のあり方を考える

- 参加人数 55名（スタッフ含む）
- 参加者の雰囲気 メモを取りながら非常にまじめな雰囲気
- 討議内容
 - 福祉避難所の課題、相談支援チームの行うソーシャルワーク
- こんな意見が・・・ 民生委員さんとの連携、個人情報の取り扱い

3つ目は「協働型災害ボランティアセンターの運営を考える」ということで、例えば、協働型災害ボランティアセンターの立ち上げを関係機関をどのように巻き込みながら行ったのか、マニュアルをどのようにつくったのかといった議論がされました。

分科会C-3
協働型災害ボランティアセンターの運営を考える

- 参加人数 53名
- 参加者の雰囲気 講師のみなさんの取り組みから真剣に学ぶ姿勢
- 討議内容 MVP＝めちゃくちゃびつときたフレーズ 付箋にこんなことを書いてもらいました。

4つ目は「広域避難・県外避難と福島」ということで、今でも県外に多くの避難者の方がいらっしゃり、現在進行形の課題です。討議内容ですが、避難先での自立支援、自立と親子支援、避難当事者から見える支援の在り方、今後の支援、福島への避難者の帰還とケアを巡ってということで、講師の報告の後にグループ討議を行いました。福島県の避難者は全国に散らばっており、避難先によって支援のあり方があまりにも違うことや、フェーズに合わせた支援を考えていくことが大事であることが改めて確認されました。これだけ広域に避難者が出るような災害は類を見ないと思いますが、今後の災害時の教訓にしてもらえたらと思っています。

分科会C-4
広域避難・県外避難と福島

- 参加人数 22名
- 参加者の雰囲気 落ち着いた雰囲気の中で深い議論
- 討議内容 避難先での自立と親子支援 避難当事者から見える支援の在り方、今後の支援 福島の帰還とケアをめぐる こんな意見が・・・ 避難先によって支援があまりにも違う。 避難のフェーズや地域性を考えた支援を

5つ目は「避難者の“今とこれから”を支える人たちと、話そう・知ろう・考えよう」ということで、南相馬市社会福祉協議会、復興支援員、コミュニティ交流員の取り組みについて、現在、復興住宅に移った方への支援の取り組みを共有し、今後どのような支援が必要になるのかを議論いただきました。

分科会C-5
避難者の“今とこれから”を支える人たちと、話そう・知ろう・考えよう

- 参加人数 24名
- 参加者の雰囲気 とても和やか
- 討議内容 全体的な支援の取り組みの説明 南相馬市社会福祉協議会での取り組みや復興支援員の取り組み、コミュニティ交流員の取り組みについて

6つ目は「福島の子どもの保養～ありがとう 子どもの未来につなげよう～」です。福島の子どもの未来を支えるために全国で一時期、なかなか外で遊べない子どもたちを招いて遊びを提供しようという取り組みが実施されました。その中から出てきた課題について議論しました。その中で出てきたのが、子どもの本音を知ることやそれが尊重できる社会を日常の中につくっていくことが非常に大事ではないかということです。

分科会C-6
福島の子どもの保養
～ありがとう 子どもの未来につなげよう～

- 参加人数 9名
- 参加者の雰囲気 和やかにみんなで考える。
- 討議内容 子どもの本音を知る。それを尊重できる社会に 皆のアイディア・意見が素敵な木になりました。

7つ目は「防災や減災をもっと身近に！」ということで、避難所運営等をテーマに日頃からの防災・減災の重要性について学びました。地域によって災害の様相がずいぶん違うということ、そして、地域のことは地域でなんとかできる知恵をきちんとつけていこうという議論がされました。

分科会C-7
防災や減災をもっと身近に！

- 参加人数 33名
- 参加者の雰囲気 全国からの参加 最初固さがみられたものの、だんだん和やかに
- 討議内容 4グループにわかれてのグループワーク クロスロード(防災ゲーム)をとおして防災・減災を考える。 こんな意見が・・・ 防災対策、避難所運営などがテーマに。 提言、興味深いこと 地域によって災害の様相が違う。地域のことは地域で。 自分の命は最後は自分が守る

最後に、「被災者支援に役立つ知識と技術を学んでみよう」ということで、実際に避難所や仮設住宅で実践された取り組みについて実技を交えてお伝えしました。身近な技術が役に立つ、日頃から取り組んでおくことが大切であるということです。

分科会C-9
被災者支援に役立つ知識と技術を学んでみよう

- 参加人数 15人
- 参加者の雰囲気 和やかに、和気あいあい
- 討議内容 みんなで輪になって実践。足湯の実演など
- こんな意見が・・・ 身近な技術が役に立つ。日頃から取り組んでおくことが大事

最後に、福島は今までたくさんの支援を受けましたが、その教訓や経験値を皆さんにお返しする場がこの分科会だったのではないかなと思っておりまう。この福島を経験を体現してお返しすることで、少しでもありがとうという気持ちを伝えられたと思いました。

○中田

ありがとうございました。東日本大震災後の福島の課題にどう取り組んできたのか、その中で特に忘れてはいけない視点がいくつか抽出されたと思います。例えば、子どもはなかなか自分の気持ちや困っていることを十分に表現できない存在です。高齢者もそうかもしれません。また、支援が必要な方々の声をどのように聞き取り、そして、ボランティア活動の中でそれをどのように生かしていくのかという視点も忘れてはいけません。また、災害には日々の備えということも重要であること。この5年間で抽出されてきた経験値を部会の中で議論いただいたと思います。

さて、どの報告を聞いても、私たちが大事に受け止めていかなければいけないことがたくさんあったと思います。お互いの部会で議論されてきたことなどを共有する中で、それぞれの報告を聞いて発見したことやこれからにつないでいきたいと思うことを、振り返っていただきます。

添田さんからお願いいたします。

○添田

お二人の報告を聞き、特にお隣の遠藤さんの部会は、部会名に「つながり」という言葉が入っていました。私が担当したまちづくりの部会においても、やはり「つながり」がとても大事なキーワードになっていると感じました。ボランティア活動は多彩な分野の活動がありますが、その中でもまちづくりの活動につながるボランティア活動というのは、例えば行政が行う施策や企業の活動などとは異なる価値観を持ったセクションであるといわれています。その中で、ボランティアが担う役割、地域社会において担う役割の中でとても大事ななと思うのは、人と人とのつながりを紡いでいくよ

うな、潤滑油の役割をボランティアが担っていくことではないかと思います。そのためにボランティアに携わっている皆さんがネットワークの輪を広げていくことが大切だろうと思いました。そういった輪が日本中のいろいろな地域に広がって、地域コミュニティが豊かさとか優しさにあふれたまちづくりが繋がっていけばいいなと「つながり」という言葉から感じました。

○遠藤

震災から5年近くになりますが、福島は全国から、世界から、多くの支援をいただいたところです。その県が今度は助ける側の立場に立って、あるいはその経験を生かした立場に立って、未来につないでいこうというメッセージは非常に心強いなと感じました。私自身も福島の者として、自分が自立した上で助けてもらえる分は助けていただこうと、そういうことがこれからのボランティアの大事なところになってくるのではないかと思います。すべてを助けるのではなくて、自立の視点とお互いに助け合っていくという視点がこれから大事なことなのではないかと思います。ボランティアに携わる側としては、やはりそこに居場所や達成感があることで自分の生きがいとなっていく一面もあるのではないかなと感じました。

○中鉢

お二人の報告を受けて、「助け合い」と「つながり」。また「自立」というテーマがあったと思います。福島は今、自立に向けて一歩一歩歩んでいるところです。まだまだ完全な自立とまでは至りません。復興の道半ばではありますが、少しずつ回復してきている状況はあります。ただその自立を考えたときに、やはり「助け合い」と「つながり」がないと自立というものが力強くない、いわゆる制度化されたものだけではなかなかうまくいかないのです。これがやはりコミュニティというところだと思いますが、人々がつながり、支え合う力が地域を豊かにし、地域をつくっていくのかなと思っています。

これが今、まだ問われている段階です。福島の

復興の過程、地域づくり、コミュニティづくりの過程がどうなのか、ぜひ皆さんにも注目していただきたいと思っておりますし、これが日本のこれからに結びつくようなところも多分にあるのではないかなと思っております。

○中田

ありがとうございました。では、最後に私からお三方のお話を聞いて考えたことをご紹介しますと思います。

各部会でずっと議論してきたことは何かというと、それぞれの生活の中、地域の中にどんな課題があるのかをきちんと把握しながら、その解決を進めていくことが大切であること。ただ、地域の課題は、単純に行政で解決できるかといったらそうではありません。地域の生活をよく理解していて、人と人のつながりをよく把握しているボランティアという存在が重要な役割を担っているというのは皆さんのお話から再確認できる場所だと思います。

ただ、そのボランティアの力を借りながら地域を良くしていく、乗り越えていくといったときに、ボランティアの育成、育ち方、その力量をさらにパワーアップしていく必要があります。そのボランティアの力を引き出していくためにどのような工夫がこれから必要になるのだろうと考えたとき、それは学校教育と手を結ぶことが次の世代のボランティアを育てていくことにも重要なポイントになるのかもしれない。若い世代が何に課題を持っていて、何を解決しようとしているのかというところを探り合うような世代間の交流というのも大事です。その交流の中からさらに地域の魅力が見つかって、それが地域に継承されていく文化的価値、地域の価値になるのかもしれない。

こうした蓄積をもって、今後、東日本大震災の大きな課題の中で苦闘してる福島も新しい歩みを進めていかなければなりません。福島の地域課題を通して考えていくと、単に地域を元に戻せばいいという話でもありません。それから、福島は広域に避難者が分散化されています。この経験から私たちは地域とはいったい何だったのかを考えるようになりました。地域とは役場があるだけで地

域といえるのか。地域とは経済的・文化的・社会的な連携に支えられて初めて機能するということ、東日本大震災・原発事故の結果、福島は痛感しているところです。こうした多様なつながりに支えられて地域が維持されているとするならば、そこに向かってどういう努力をしてコミュニティを回復させていけばいいのでしょうか。

キーワードは、皆さんから出た「つながり」という言葉だと思います。ただ、つながりを考えていくときに大事なのは、つまり関係性を再生させていくときに大事だと思うことは、それを支えている多様性と重層性をどのように捉えていくかだと思います。これは世代間の多様性、それから、健常者とそうでない方々の多様性、子どもと高齢者、そして、支援が必要な方々の存在、そうした地域の中の多様性も含めて、それをどのようにつなげればいいのでしょうか。そのときにボランティア、企業、各教育機関、行政などが重層性を持って対応していくことがとても大事なのではないかと考えているわけです。

みなさんに今回の大会を通して考えていただきたいのは、今大会は福島の地で開催されておりますけれども、震災からの復興だけではなく、その経験を通して、地域の復興、地域の復権ということ、をどのように考えていけばいいのか、この問題をぜひ共有できればと思っております。

今大会を通して十分に議論され尽くしてはいませんが、ここで話されたこと、考えられたことを全国にお持ち帰りいただいて、今後の社会のつなぎ手として、皆さんの地域で活躍していただければありがたいと考えております。

短い時間ではありましたが、最後にそうしたエールを送らせていただいて、今回の振り返りとさせていただきたいと思います。長い間ありがとうございました。



閉会式

閉会式

前日特別企画を含め、3日間にわたって開催された「第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま」は、「“ありがとう 未来につなごう ふくしまから”」をテーマに、運営スタッフ等を含め全国から約2,300人の方に参加いただきました。

閉会にあたり、古川雅之副実行委員より、参加者の皆さまにお礼の気持ちを伝えました。

また、全社協の山田常務理事より、来年度以降の大会開催について説明があり、中田実行委員長からこれまでの大会の想い、福島県の想いをのせた大会フラッグを引き継ぎました。



古川雅之副実行委員長の挨拶



全社協 山田秀昭常務理事の挨拶



大会フラッグ引き継ぎ



中田スウラ実行委員長
閉会の挨拶

フィナーレ



郡山市立郡山第二中学校合唱部の皆さんに「ふるさとの四季メドレー」を披露していただきました。

東日本大震災後は、避難所等に訪問してコンサートを行い、人の心と心をつなぐ音楽の力を届けた郡山第二中学校合唱部。透明感のあるハーモニーが、会場の方々の心に響きました。



最後は、実行委員も加わって、会場全体で復興支援ソング「花は咲く」を大合唱し、大会の幕が下りました。

展示・販売コーナー

メイン会場ビッグパレットふくしまにおいて、県物産品や授産製品の販売コーナー、関係団体紹介ブース、展示（絵手紙）コーナー、パネル展示を設置し、多くの参加者でにぎわいました。

〈県産品〉多目的展示ホールB

出展者 福島県観光物産交流協会

〈授産製品〉多目的展示ホールB

No.	施設名（所在地）
1	工房トマトハウス（郡山市）
2	まち子ちゃんの店（田村市）
3	でんでんむし（三春町）
4	わーく IL（郡山市）
5	ポプラ工房（郡山市）
6	ライジング・サン（鏡石町）
7	ほほえみの間（郡山市）
8	ほっこり cafe まあぶる（郡山市）
9	あだち共労育成園（大玉村）
10	ワークショップろんど（福島市）
11	HANA（伊達市）
12	なのはなの家（福島市）

〈関係団体紹介ブース〉多目的展示ホールB

No.	団体名
1	福島県共同募金会
2	日本赤十字社福島県支部
3	「広がれボランティアの輪」連絡会議
4	おもちゃの図書館全国連絡会
5	全国社会福祉協議会出版部

〈絵手紙展示〉多目的展示ホールB

1,070通

〈パネル展示（東日本大震災の記録写真）〉

多目的展示ホールC、2階ホワイエ

No.	団体名
1	福島民報社
2	福島民友新聞社

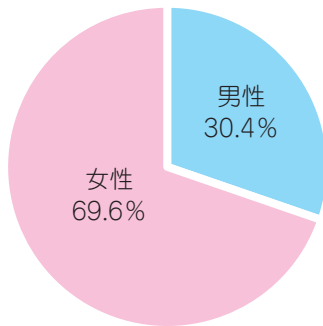


参加者アンケート結果

●大会全体

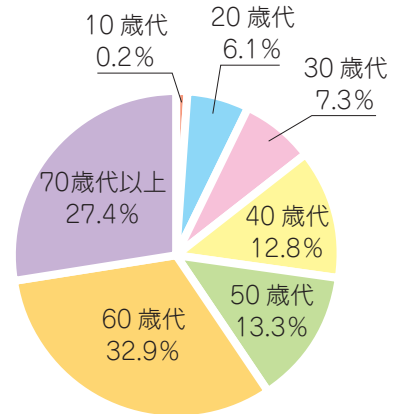
1 性別

・性別は、女性が約7割を占めている。



2 年齢

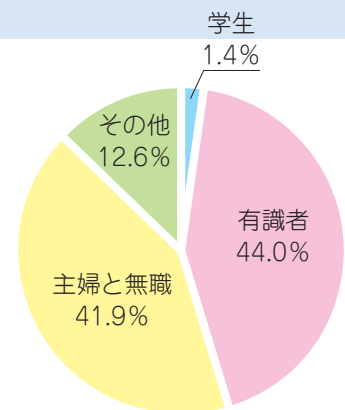
・年齢は、60歳以上が約6割を占めている。



3 職業等

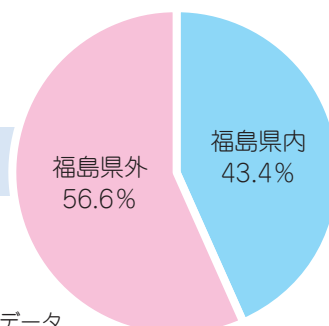
・職業等は、有職者が44%（うち、社協の役員・職員が半数以上の24%）、このほかは、主婦29%、無職12%、学生1.4%である。
主婦と無職の計が41%で、有職者とほぼ同数。

	人数	割合 (%)
小中学生	1	0.2
高校生	0	0.0
大学・専門学校生	7	1.3
会社員	31	5.6
公務員	15	2.7
NPO・NGO 職員	26	4.7
社会福祉協議会役職員	134	24.2
自営業	38	6.9
主婦	162	29.2
無職（主婦・学生以外）	70	12.6
その他	70	12.6
全体（回答者数）	554	100.0



4 居住地（アンケート調査の回答者）

・居住地は、福島県内43%、福島県外57%

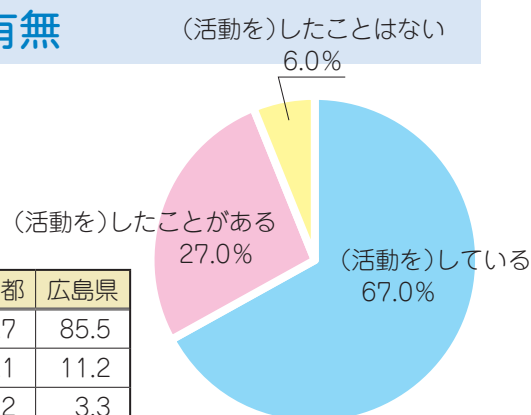


※グラフは福島県のデータ

	福島県		岐阜県	高知県	三重県	東京都	広島県
福島県内	246	43.4	38.1	20.9	55.1	33.3	45.0
福島県外	321	56.6	61.9	79.1	44.9	66.7	55.0
全体 (%)		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
全体（回答者数）	567		598	680	316	396	482

5 ボランティア・市民活動の参加経験の有無

- ・活動経験は、「している」67%、「したことがある」27%で、経験者は94%



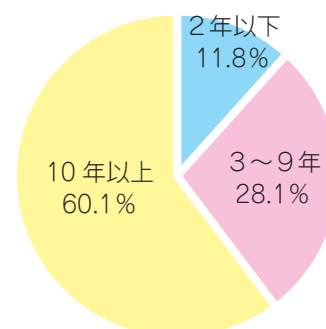
	福島県		岐阜県	高知県	三重県	東京都	広島県
(活動を) している	367	67.0	73.0	87.3	77.9	74.7	85.5
(活動を) したことがある	148	27.0	22.0	8.4	17.7	19.1	11.2
(活動をしたことは) ない	33	6.0	5.0	4.3	4.4	6.2	3.3
全体 (%)		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
全体 (回答者数)	548		562.0	534	271	388	491

している+したことがある	515	94.0	95.0	95.7	95.6	93.8	96.7
--------------	-----	------	------	------	------	------	------

〈したことがあると回答した方の通算活動経験年数〉

- ・通算の活動経験年数は、2年以下12%、3～9年28%、10年以上60%
- ・平均活動経験年数は、全体で13.7年

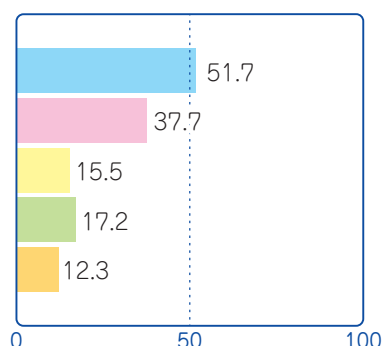
	福島県		岐阜県	高知県	三重県	東京都	広島県
2年以下	36	11.8	11.9	10.5	13.9	20.9	10.5
3～5年	52	17.0	20.1	17.2	16.5	17.8	19.6
6～9年	34	11.1	10.5	13.6	9.6	11.6	11.9
10～19年	90	29.4	33.3	33.3	27.4	28.4	30.7
20年以上	94	30.7	24.2	25.3	32.6	21.3	27.3
全体（％）		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
全体（回答者数）	306		363	447	230	225	362



5-1 東日本大震災に関するボランティア活動の有無（複数回答）

- ・「金銭的支援」、「被災地での活動」、「県外避難者への支援」など、何らかの形で支援を行っている方が多かった。

	人数	割合 (%)
金銭的支援	277	51.7
被災地での活動	202	37.7
県外避難者への支援	83	15.5
活動をしていない	92	17.2
その他	66	12.3
全体 (回答者数)	536	



6 関わっているボランティア・市民活動の分野（複数回答）

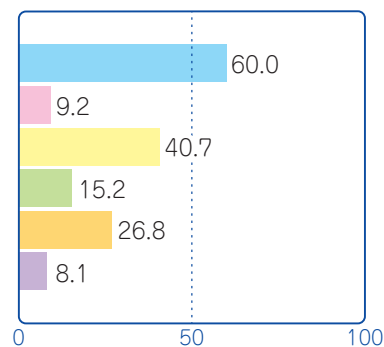
・活動分野は、「福祉」が最も多く70%、次いで「子どもの健全育成」34%、「まちづくり」25%など。
回答者一人あたり2～3分野の活動をしている。

	福島県		岐阜県	高知県	三重県	東京都	広島県
福祉（高齢者・障害者等）	374	69.8	73.7	67.8	76.8	68.0	71.8
子どもの健全育成	185	34.5	31.4	31.4	21.8	30.6	35.4
保健・医療	37	6.9	5.4	6.5	4.4	8.2	6.3
社会教育	59	11.0	6.3	8.1	7.0	10.7	8.2
まちづくり	136	25.4	21.2	27.3	20.8	26.0	27.2
地域安全活動	100	18.7	17.7	19.0	15.4	12.6	23.4
災害救援活動	94	17.5	13.9	16.6	15.8	16.4	14.6
学術・文化・芸術・スポーツ	64	11.9	12.3	13.3	8.4	12.0	9.8
環境保全	53	9.9	8.2	14.8	9.7	10.7	13.4
国際協力	16	3.0	2.3	3.9	5.0	7.4	5.4
人権擁護・平和推進	21	3.9	5.1	6.0	5.0	5.2	5.0
職業能力開発・雇用機会拡充	4	0.7	1.1				
経済活動活性化	6	1.1	0.4				
ボランティア・市民活動の連絡・助言・援助	149	27.8	27.0	29.1	20.1	28.1	25.3
その他	28	5.2	4.6	2.2	1.0	4.1	2.5
全体（回答者数）	536		570	633	298	366	478

7 参加理由（複数回答）

・参加理由は、「ボランティア・市民活動に参加しているから」59%、「全国の動向や活動事例が知りたいから」40%、「ボランティア・市民活動に興味があるから」26%など。

	人数	割合（%）
ボランティア・市民活動に参加しているから	332	60.0
友人・知人が参加・出演するから	51	9.2
全国の動向や活動事例が知りたいから	225	40.7
全国の実践者と交流したいから	84	15.2
ボランティア・市民活動に興味があるから	148	26.8
その他	45	8.1
全体（回答者数）	553	



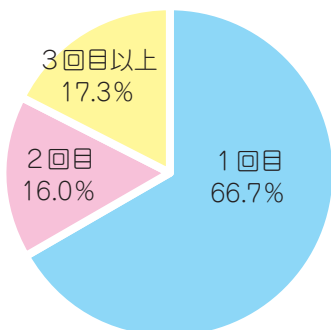
8 大会のことを最初にどうやって知ったか（複数回答）

・情報の入手方法は、「機関・団体等から」が最も多く60%、次いで、「実行委員会からの案内・チラシ」26%、「友人・知人からの紹介」10%など。

	福島県		岐阜県	高知県	三重県	東京都	広島県
友人・知人からの紹介	55	9.7	12.1	17.9	15.1	19.5	10.4
機関・団体等からの紹介	334	59.1	59.6	44.6	61.4	50.5	63.8
新聞広告	0	0.0	1.5	0.6	1	1.6	2.1
実行委員会からの案内・チラシ	146	25.8	24.9	32.1	19.9	19	18.7
昨年度のボランティアフェスティバルに参加して	76	13.5	9.0	6.3	9	9.9	11.9
実行委員会以外からの案内・チラシ	23	4.1	4.8	4.2	1.6	3.2	2.9
その他	28	5.0	3.8	3	2.9	5.1	1.9
全体（回答者数）	565		586	666	311	374	481

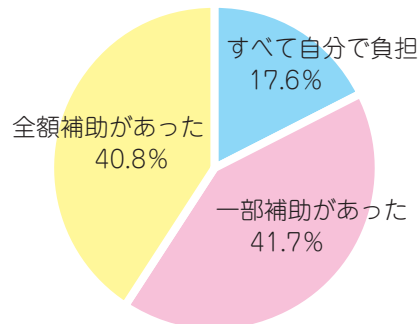
9 参加回数

- ・参加回数は、1回目67%、2回目16%、3回目以上17%
- ・参加経験者（リピーター）は約3割



10 参加費用

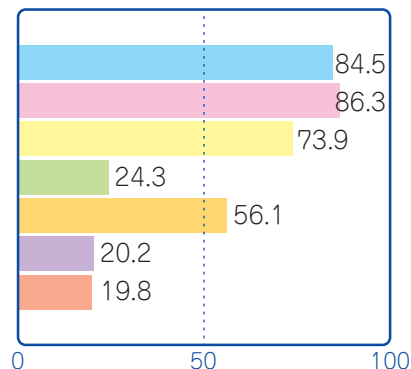
- ・参加費用は、「すべて自分で負担」17%、「一部補助」42%、「全額補助」41%、何らかの補助があった参加者は83%



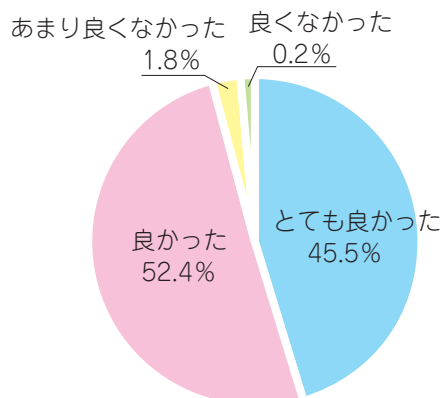
11 主なプログラムの参加状況（複数回答）

- ・1日目の全体のプログラムは74~86%、交流会は24%
- ・2日目の分科会は56%、大会最後のプログラムである閉会式は20%

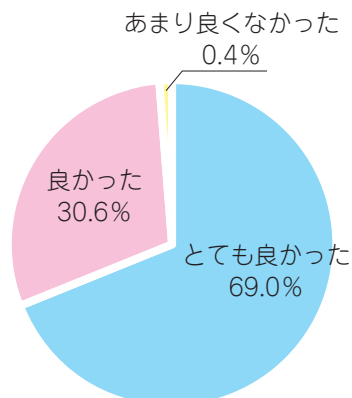
	人数	割合 (%)
開会式	431	84.5
基調講演	440	86.3
シンポジウム	377	73.9
交流会	124	24.3
分科会・フィールドワーク	286	56.1
大会振り返り	103	20.2
閉会式	101	19.8
全体（回答者数）	510	



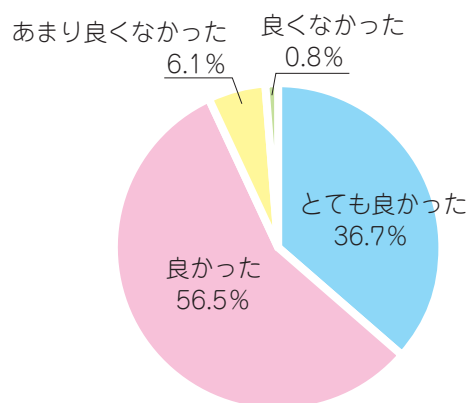
〈開会式の評価〉



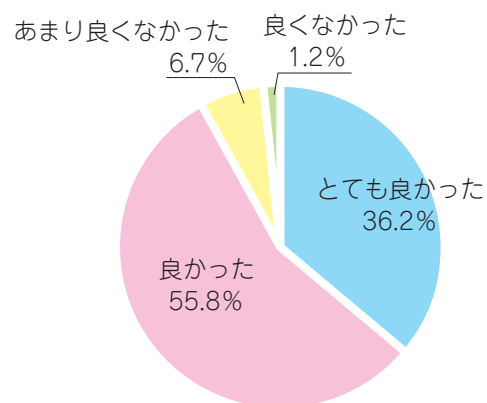
〈基調講演の評価〉



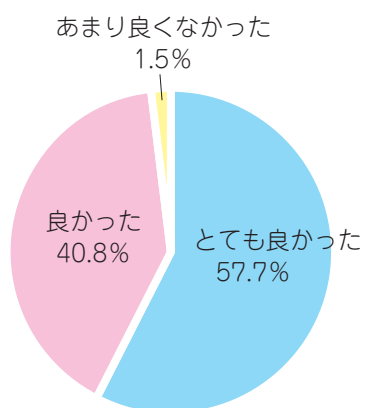
〈シンポジウムの評価〉



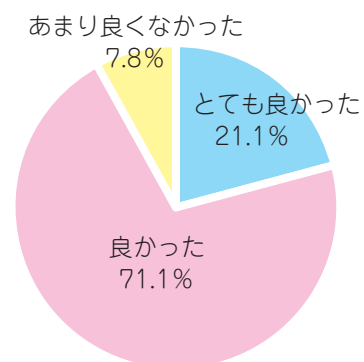
〈交流会の評価〉



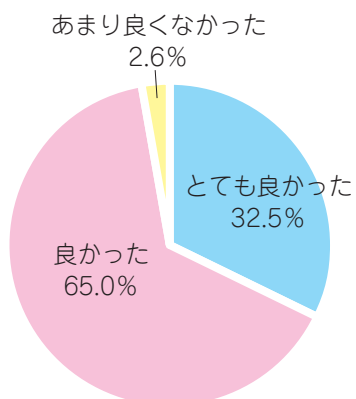
〈分科会・フィールドワークの評価〉



〈大会振り返りの評価〉



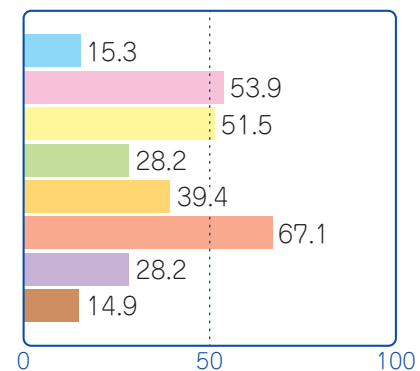
〈閉会式の評価〉



12 ボランティア・市民活動について、参考となる全国的な情報発信や課題提起がなされていたと思うプログラム（複数回答）

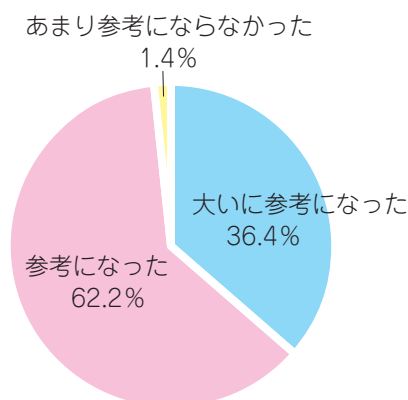
- ・参考となる全国的な情報発信や課題提起がなされていたプログラムは、「分科会・フィールドワーク」が最も多く67%、次いで「基調講演」54%、「シンポジウム」51%

	参加者	人数	割合（%）
開会式	431	66	15.3
基調講演	440	237	53.9
シンポジウム	377	194	51.5
交流会	124	35	28.2
スタディ・ツアー	33	13	39.4
分科会・フィールドワーク	286	192	67.1
大会振り返り	103	29	28.2
閉会式	101	15	14.9
全体（回答者数）	472	346	



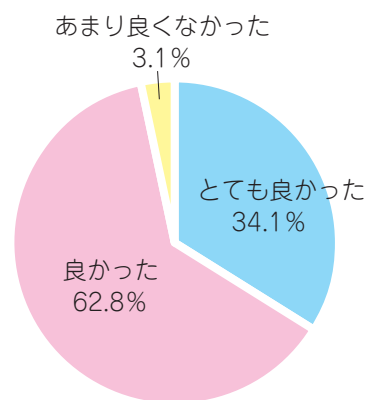
13 今後の取り組みの参考になったか。

- ・今後の取り組みの参考になったかについては、
「大いに参考になった」36%
「参考になった」62%
「参考になった（計）」は99%



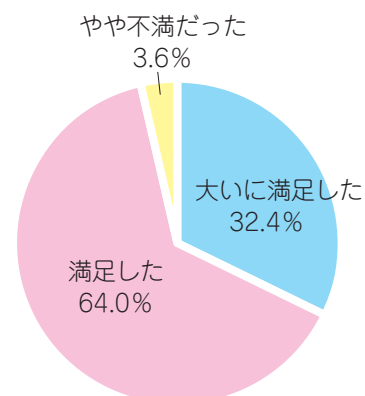
14 本大会は全体的にスムーズに運営・進行されたか。

- ・スムーズに運営・進行されたかについては、
「とても良かった」34%
「良かった」63%
「良かった（計）」は97%



15 本大会に満足したか。

- ・本大会に満足度については、
「大いに満足した」32%
「満足した」64%
「満足した（計）」は96%



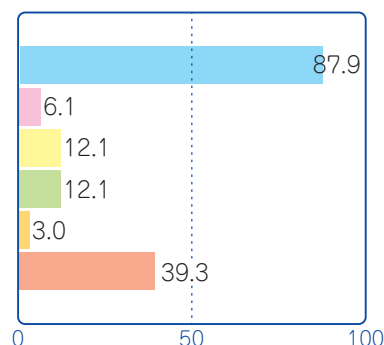
●スタディ・ツアー

参加者47名／回答者数33名

1 選んだ理由（複数回答）

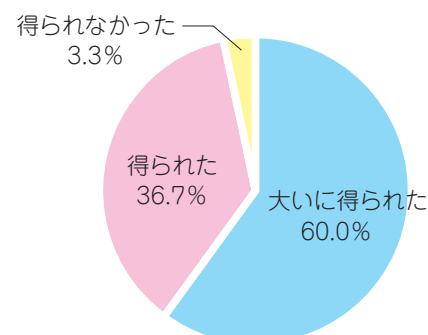
・スタディ・ツアーに参加した理由は、「内容」が55%を占める。

	人数	割合（%）
内容で	29	87.9
出演者で	2	6.1
実施形式で	4	12.1
人の勤めで	4	12.1
知人・仲間が企画運営（出演）しているため	1	3.0
その他	13	39.3
全体（回答者数）	33	



2 今後の活動のために得られたこと、活かそうと思ったこと

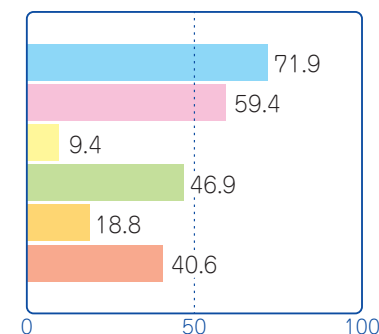
・今後の活動のために得られたこと、活かそうと思ったことがあったかについては、「大いに得られた」60%、「得られた」37%、「参考になった（計）」は97%



2-1 具体的に得られたもの、今後の活動に活かそうと思ったこと（複数回答）

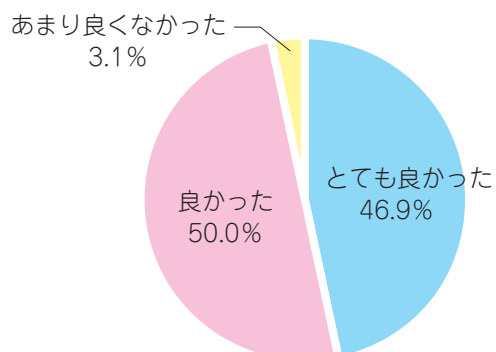
・具体的に得られたもの、今後の活動に活かそうと思ったことは、「よい知識・情報を得られた」が72%「よい視点・考え方・理念等を得られた」は59%

	人数	割合（%）
よい知識・情報を得られた	23	71.9
よい視点・考え方・理念等を得られた	19	59.4
よい技術・ノウハウを得られた	3	9.4
よい出演者・実践者を知ることができた	15	46.9
参加者同士で情報交換・交流ができた	6	18.8
その他	13	40.6
全体（回答者数）	32	



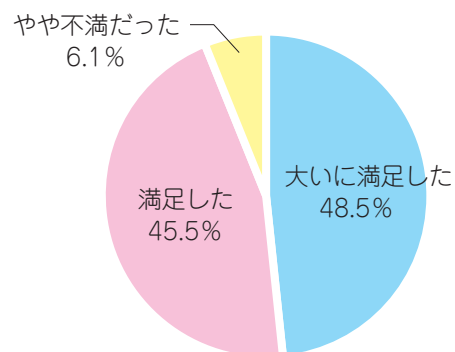
3 スタディ・ツアーはスムーズに運営・進行されたか。

・スムーズに運営・進行されたかについては、「とても良かった」47%、「良かった」50%、「良かった（計）」は97%



4 スタディ・ツアーに満足したか。

・スタディ・ツアーの満足度については、「大いに満足した」48%、「満足した」45%、「満足した（計）」は94%



●分科会

1 参加した分科会

・回収された調査票数は575票。そのうち分科会参加者は400人。

	参加者数	回答者数	回答率 (%)
A たすけあい・支え合いのまちづくり			
1 平成27年度 ふれあい・いきいきサロン全国研究交流会	108	22	20.4
2 やさしい日本語ワークショップ	16	13	81.3
3 子どもたちと一緒に地域文化でまちおこし	45	27	60.0
4 地域の中のおたがいさま	82	35	42.7
5 脱!! 貧困	34	16	47.1
B つながり・次世代ボランティア			
1 地域で育むふくしのこころ	57	16	28.1
2 働きながら取り組むボランティア活動	53	26	49.1
3 国際的なつながりを広げ、強化し、この経験を国内で活かす	9	9	100.0
4 人と人をつなぐレクリエーションボランティア	71	26	36.6
5 次世代を担う若者のチカラを未来へ	28	17	60.7
6 “協働”のいろはを学ぶ	100	65	65.0
7 子どもたちにおもちゃのすばらしさと遊びのたのしさを	12	12	100.0
C ふくしまの今と未来			
1 避難所運営とボランティア	24	12	50.0
2 災害時の要援護者支援のあり方を考える	47	19	40.4
3 協働型災害ボランティアセンターの運営を考える	53	24	45.3
4 広域避難・県外避難と福島	12	4	33.3
5 避難者の“今とこれから”を支える人たちと、話そう・知ろう・考えよう	24	8	33.3
6 福島の子ども保養	5	3	60.0
7 防災や減災をもっと身近に！	25	25	100.0
8 被災者支援に役立つ知識と技術を学んでみよう	15	15	100.0
D フィールドワーク			
1 大沼郡金山町・昭和村 過疎と少子高齢化に悩む集落、その暮らし方	24	0	0.0
2 会津若松市 歴史と伝統の会津。街を歩きながら、「おもてなし」を体感！	14	6	42.9
全体	858	400	46.6

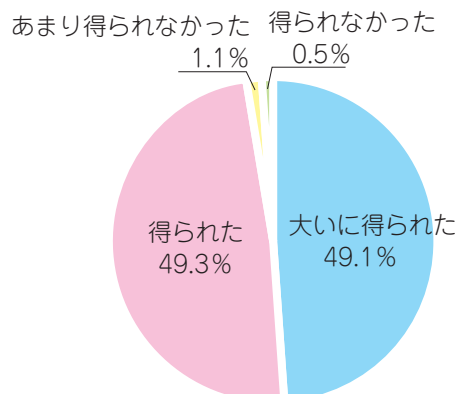
2 選んだ理由（複数回答）

・分科会を選んだ理由は、「テーマ・内容」が59%を占める

	福島県		岐阜県	高知県	三重県	東京都	広島県
テーマ・内容で	319	59.0	62.4	87.8	75.3	84.5	71.7
出演者で	44	8.1	3.6	11.6	12.3	11.3	7.8
実施形式で	20	3.7	3.6	5.4	2.2	4.2	4.7
人の勤めで	27	5.0	11.0	7.5	10.7	6.5	6.9
知人・仲間が企画運営しているため	39	7.2	4.1	6.0	5.8	7.2	10.7
第1希望以外の分科会に参加するよう調整を受けた	14	2.6	10.2	4.3	3.3	4.8	6.0
その他	78	14.4	5.0	—	—	—	—
全体（回答者数）	541		636	671	365	1,154	681

3 今後の活動のために得られたこと、活かそうと思ったこと

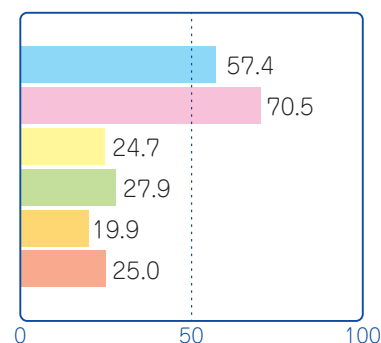
- ・今後の活動のために得られたこと、活かそうと思ったことがあったかについては、「大いに得られた」49%、「得られた」49%で、「得られた（計）」は98%



3-1 具体的に得られたもの、今後の活動に活かそうと思ったこと（複数回答）

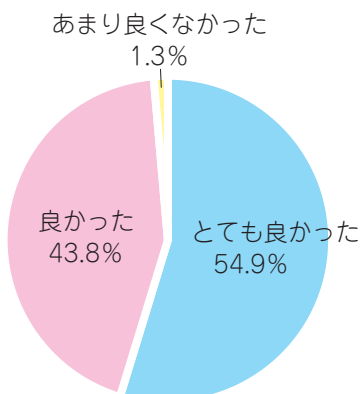
- ・具体的に得られたもの、今後の活動に活かそうと思ったことは、「よい知識・情報をえられた」が57.4%、「よい視点・考え方・理念等を得られた」が66.3%を占める。

	人数	割合（％）
よい知識・情報を得られた	216	57.4
よい視点・考え方・理念等を得られた	265	70.5
よい技術・ノウハウを得られた	93	24.7
よい出演者・実践者を知ることができた	105	27.9
参加者同士で情報交換・交流ができた	75	19.9
その他	94	25.0
全体（回答者数）	376	



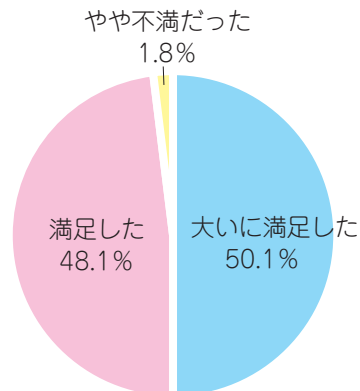
4 分科会はスムーズに運営・進行されたか。

- ・分科会はスムーズに運営・進行されたかについては、「とても良かった」55%、「良かった」44%で、「良かった（計）」は99%



5 分科会に満足したか。

- ・分科会に満足度については、「大いに満足した」50%、「満足した」48%、「満足した（計）」は98%



広報実績

●新聞

開催決定	福島民報新聞（平成26年5月2日） 福島民友新聞（平成26年5月2日）
開催告知	福島民友新聞（平成27年9月4日、9月27日） 福島民報新聞（平成27年9月7日、9月27日） 民友ゆうゆう倶楽部（平成27年7月31日） ふくしまゆう（平成27年9月27日）
絵手紙募集	福島民報新聞（平成27年8月9日） 福島民友新聞（平成27年8月20日）
開催報道	福島民報新聞（平成27年11月22日） 福島民友新聞（平成27年11月22日）

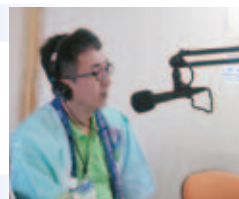


●テレビ

開催告知	福島中央テレビ「ゴジてれ！ Chu」（平成27年8月13日）
開催報道	福島テレビ「キビタンGO！～ふくしまから チャレンジ はじめよう。～」(平成27年12月11日)

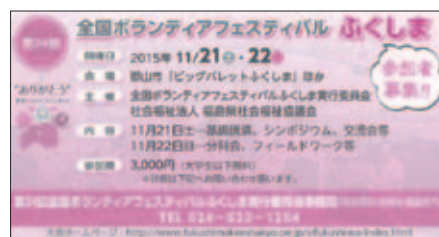
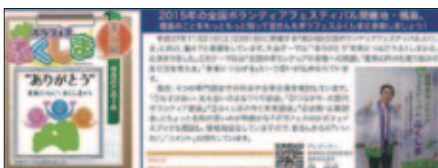
●ラジオ

おだがいさま FM（平成27年8月22日）
ふくしま FM「キビタンスマイル」（平成27年9月30日）



●広報誌

福島県社協広報誌「はあとふるふくしま」（平成27年4・5月号～平成28年1月号）
福島県内市町村社協広報誌（多数）
全社協発行「ボランティア情報」（平成26年11月号～平成27年12月号）
関係団体広報誌（多数）



●PR 活動

大会のぼり、はっぴ、チラシ等の作成による PR 活動（平成26年9月～）
第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま Facebook 開設（平成26年9月3日）
第23回全国ボランティアフェスティバルぎふでの PR ブース出展（平成26年9月27日～28日）
大会専用ホームページ開設（平成27年5月29日）
絵手紙募集（平成27年6月1日～9月30日）
PR 用缶バッジの製作・配布（平成27年7月～）
隣県社協へ開催 PR 訪問（平成27年8月5日～12日）
Facebook にて、県内市町村社協職員による「わが街紹介」を掲載（平成27年10月15日～11月17日）
各イベントでの PR ブース設置（多数）



絵手紙募集

今大会では、大会開催のPRを行うとともに、全国各地の人々の未来へつなげたい想いを紹介することを目的に絵手紙を募集し、全国から集まった1,070通の絵手紙を大会会場に展示しました。

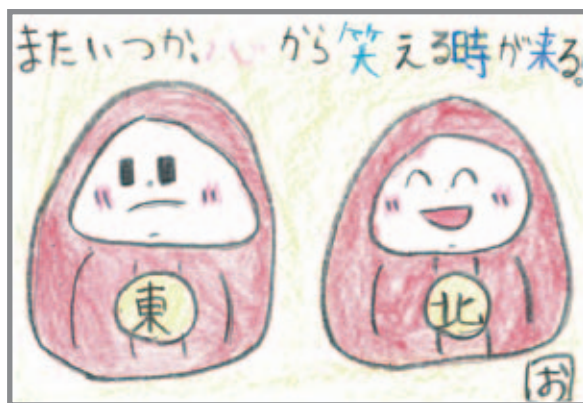
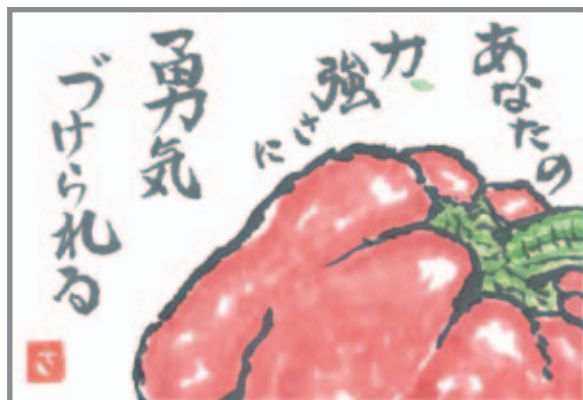
絵手紙のテーマは『未来へつなげたい想い』
... 福島への想い、東北への想い、ふるさとへの想いなど、未来へつなげたい想いなど一人ひとりの想いの輪が全国へ広がりました。

子どもから高齢の方まで、それぞれの想いが、色鮮やかに描かれた絵と言葉に表現され、会場全体が温かい気持ちに包まれました。



●全国から届いた作品を、いくつかご紹介します。





大会制作物



大会のぼり



大会はっぴ



大会 PR チラシ



大会 PR ポスター



絵手紙募集チラシ



缶バッジ



大会 PR シール



開催のご案内
(パンフレット)



開催チラシ



開催ポスター



大会プログラム



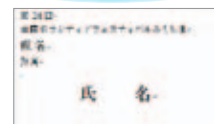
資料袋／ボールペン



スタッフユニフォーム



参加券



参加者名札



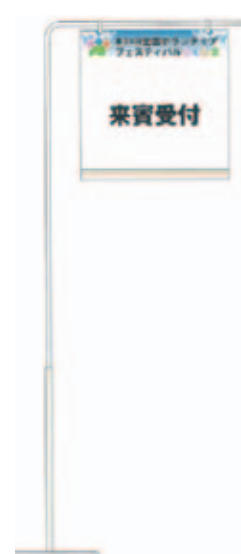
大会案内（1日目・2日目）・シャトルバス案内板



大会案内板



分科会案内板
(日本大学工学部)



会場案内板／シャトルバス案内板

寄 付 ・ 協 賛

「第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま」開催にあたり、大会開催趣旨にご賛同いただき、多額の浄財をご寄付いただいた企業・団体、個人の皆様、協賛いただいた企業・団体をご紹介します。

〈寄付企業・団体（順不同）〉

（敬称略）

(株) 東邦銀行	福島県火災共済協同組合	東信建設(株)
(一社) ふくしま市町村支援機構	庄司建設工業(株)	永野土木建設(株)
三菱UFJ信託銀行(株)	(株) オオバ工務店	(株) ダイユーエイト
(公財) 福島県保健衛生協会	福島ヤクルト販売(株)	(株) アピックス
南砺市ボランティア連絡協議会理事会	(株) 高良	福島経営者協会
(株) 永山建築設計事務所	(株) 二嘉組	(株) 福島県中央計算センター
(株) 日産サティオ福島	(株) マルト	福島民友新聞社
東洋システム(株)	(一社) いわき市医師会	フジモールド工業(株)
会津信用金庫	(株) 加地和組	(株) シマ商会
(一社) 福島県銀行協会	(株) 郡山第一ビル	須賀川商工会議所
(株) 福島銀行	(株) 郡山大新青果	(株) アラジン
(一財) 太田綜合病院	(公社) 福島県バス協会	(株) 中里工務店
日東紡績(株) 福島工場	(株) 内藤工業所	(公財) 穴澤病院
白河信用金庫	(一財) 会津若松観光ビューロー	福島トヨタ自動車(株)
福島日産自動車(株)	福島県自動車販売店協会	石川建設工業(株)
福島キャノン(株)	(株) 小野屋漆器店	オリエンタルモーター(株) 相馬事業所
(株) 福島情報サービス	二本松信用金庫	陽光社印刷(株)
(株) 大東銀行	福島信用金庫	(株) ガイア 大町・郡山駅前店
相馬共同火力発電(株)	日本労働組合総連合会福島県連合会	(株) 福島中央テレビ
福島民報社	(株) セイユウ建設	富士通アイソテック(株)
公立岩瀬病院企業団	須賀川信用金庫	(一財) 慈山会医学研究所附属坪井病院
ひまわり信用金庫	(株) くすりのマルト	(一財) 福島県自動車会議所
伊達市保原工業団地懇話会	第一温調工業(株)	(株) IHI 航空宇宙事業本部相馬事業所
(株) 日本オイルサービスいわき出張所	小野建設(株)	(医) 小野病院
伊藤冷機工業(株)	田村産業(株)	テクノ・マインド(株) 福島支社
相馬ガス(株)	(株) 鈴船建設	郡山信用金庫
(株) 西部開発	(株) 白石モータース	関場建設(株)
福島県建設業協会郡山支部	三和工業(株)	
東北建設(株)	(医) 慈繁会	

〈寄付個人（順不同）〉

（敬称略）

佐藤 勝三	武藤 顕夫	橋本 隆
星 光一郎	高橋 義広	古川 雅之

〈協賛広告企業・団体（五十音順）〉

（敬称略）

会津オリンパス（株）	（株）かんの屋	タカラ印刷（株）
会津高原リゾート（株）	（株）サンエイ海苔	タニコー（株）
会津鉄道（株）	（株）山水荘	テクノ・マインド（株）福島支社
会津土建（株）	（株）サンダーファミリー	東北協同乳業（株）
会津乗合自動車（株）	（株）鈴木建設	特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ
会津若松商工会議所	（株）鈴富	トヨタカローラ福島（株）
秋保の郷ばんじ家	（株）想健	日本工機（株）白河製造所
アサヒビール（株）福島工場	（株）大東銀行	二本松市復興支援事業協同組合
アサヒフードクリエイト（株）アサヒビール園福島本店	（株）高良	檜枝岐村
安達太良建設協会	（株）テレビユー福島	ひまわり信用金庫
阿武隈急行（株）	（株）日産サティオ福島	福島県信用金庫協会
（一財）会津若松観光ビューロ	（株）ニラク	福島信用保証協会
（一財）慈山会医学研究所付属坪井病院	（株）ネクスト情報はましん	福島県生活協同組合連合会
（一財）竹田健康財団	（株）ビルワーク	福島県石油商業組合石油業協同組合安達支部
（一財）二本松菊栄会	（株）福島銀行	福島県男女共生センター
（一財）脳神経疾患研究所附属総合南東北病院	（株）福島中央テレビ	福島県南土建工業（株）
（一財）福島県自動車会議所	（株）ホテルニューパレス	福島県北交通（株）
（一社）いわき市医師会	（株）マルコ物流	福島県レンタカー協会
（一社）只見町観光まちづくり協会	（株）民報印刷	福島赤十字病院
（医）安積保養園	（株）メフォス	福島テレビ（株）
（医）佐原病院	菅野建設（株）	福島トヨタ自動車（株）
（医）しかの眼科	（公財）星総合病院	福島民友新聞
大槻電設工業（株）	（公財）福島県保健衛生協会	福島ヤクルト販売（株）
小野建設（株）	（公財）湯浅報恩会寿泉堂総合病院	福島リコピー販売（株）
（株）青木食品	公立岩瀬病院企業団	富士通アイソテック（株）
（株）アベデン	郡山信用金庫	みなみやま観光（株）
（株）イチネン東北支店	こころネット（株）	（有）アドバイス
（株）エフコム	（社福）恩賜財団済生会福島総合病院	（有）石畑自動車
（株）柏屋	（社福）啓和会	陽光社印刷（株）
（株）加地和組	（社福）天心会	連合福島

〈協賛〉

（敬称略）

日本生活協同組合連合会	教職員共済生活協同組合	全国労働者共済生活協同組合連合会
-------------	-------------	------------------

紙面での紹介をもって、御礼に代えさせていただきます。

参 考 資 料

第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会設置要綱

(目的)

第1条 平成27年度に第24回全国ボランティアフェスティバル（以下「フェスティバル」という。）を本県で開催するため、実行委員会を設置し、開催に向けた協議決定を行う。

(名称)

第2条 この会の名称は、第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会（以下「実行委員会」という。）とする。

(組織)

第3条 実行委員会は別表1に掲げる機関・団体をもって組織する。

(協議事項)

第4条 実行委員会は次の事項を協議決定する。

- (1) フェスティバルの開催要綱、役割分担等基本事項に関すること。
- (2) フェスティバルの企画、運営、広報等に関すること。
- (3) 共催団体及び関係機関団体等との連絡調整に関すること。
- (4) その他、開催に際して必要な事項に関すること。

(委員長、副委員長)

第5条 実行委員会には、委員長1名及び副委員長1名をおく。

- 2 委員長、副委員長は委員の互選とする。
- 3 委員長は実行委員会を代表し、会務を統括する。
- 4 副委員長は委員長の職務を補佐し、委員長に事故あるときにはその職務を代理する。

(委員の任期)

第6条 委員の任期は、平成26年5月1日～平成28年3月31日とする。

- 2 委員に欠員が生じ、補充により就任した委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員会)

第7条 実行委員会は、委員長が招集し、議長を務める。

- 2 委員はやむを得ない理由により実行委員会を欠席するときは、代理人を出席させることができる。
- 3 実行委員会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開くことができない。
- 4 議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは委員長がこれを決する。
- 5 実行委員会は、必要に応じて関係する機関からオブザーバーの出席を求めることができる。

(専門部会)

第8条 専門的・実務的な分科会等の企画立案及び協議を行うために専門部会を置く。

- 2 専門部会の運営については、委員長が別に定める。

(正副部会長会議)

第9条 第8条の専門部会で協議した内容の調整等を行うため正副部会長会議を置く。

- 2 正副部会長会議で協議した内容は、実行委員会に報告するものとする。
- 3 正副部会長会議は、次の委員で構成する。
 - (1) 部会長、副部会長
 - (2) 委員長が指名した委員
- 4 正副部会長会議の運営は、第7条の規定を準用する。

(事務局)

第10条 実行委員会の事務を処理するために、福島県社会福祉協議会内に事務局を置く。

(細則)

第11条 この要綱に定めるもののほか、必要な事項は委員長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成26年5月1日から施行する。

平成26年12月10日一部改正

第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会構成団体

	団体名
1	社会福祉法人 福島市社会福祉協議会
2	社会福祉法人 郡山市社会福祉協議会
3	社会福祉法人 会津若松市社会福祉協議会
4	社会福祉法人 いわき市社会福祉協議会
5	市町村社会福祉協議会連絡協議会
6	社会福祉法人 福島県共同募金会
7	一般社団法人 ふくしま連携復興センター
8	認定特定非営利活動法人 ふくしま NPO ネットワークセンター
9	特定非営利活動法人 福島県レクリエーション協会
10	福島県ボランティア連絡協議会
11	福島県社会福祉協議会ボランティア活動推進委員会
12	福島県社会福祉協議会社会福祉法人経営者協議会
13	福島県広域災害福祉支援ネットワーク協議会
14	公益財団法人 福島県老人クラブ連合会
15	福島県民生児童委員協議会
16	福島大学うつくしまふくしま未来支援センター
17	福島県高等学校長協会
18	福島県私立中学高等学校協会
19	ふくしま総合相談支援センター
20	日本赤十字社福島県支部
21	公益財団法人 福島県国際交流協会
22	独立行政法人国際協力機構 二本松青年海外協力隊訓練所
23	公益社団法人 日本青年会議所東北地区福島ブロック協議会
24	日本労働組合総連合会福島県連合会
25	福島県生活協同組合連合会
26	福島県商工会議所連合会
27	社会福祉法人福島県社会福祉協議会
28	広がれボランティアの輪連絡会議
29	広がれボランティアの輪連絡会議
30	社会福祉法人 全国社会福祉協議会

第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま 実行委員会名簿

平成27年10月22日

第7回実行委員会現在

No.	職名	氏名	所属	役職
			推薦母体	
1	委員長	中 田 スウラ	福島大学うつくしまふくしま未来支援センター	センター長
2	副委員長	古 川 雅 之	社会福祉法人 福島県社会福祉協議会	常勤副会長
3	委 員	高 木 信 雄	社会福祉法人 福島市社会福祉協議会	常務理事
4	委 員	鈴 木 望	社会福祉法人 郡山市社会福祉協議会	常勤副会長
5	委 員	谷 津 卓	社会福祉法人 会津若松市社会福祉協議会	常務理事兼事務局長
6	委 員	強 口 暢 子	社会福祉法人 いわき市社会福祉協議会	会長
			市町村社会福祉協議会連絡協議会	会長
7	委 員	皆 川 誠 司	社会福祉法人 福島県共同募金会	常務理事兼事務局長
8	委 員	中 鉢 博 之	一般社団法人 ふくしま連携復興センター	理事
9	委 員	作 田 謙太郎	認定特定非営利活動法人 ふくしま NPO ネットワークセンター	副理事長
10	委 員	佐 藤 喜 也	特定非営利活動法人 福島県レクリエーション協会	事務局長
11	委 員	富 塚 まり子	福島県ボランティア連絡協議会	事務局長
12	委 員	池 田 洋 子	桜の聖母短期大学	生活科学科教授
			福島県社会福祉協議会ボランティア活動推進委員会	委員長
13	委 員	星 光一郎	福島県社会福祉協議会社会福祉法人経営者協議会	会長
14	委 員	森 美 樹	福島県社会福祉士会	
			福島県広域災害福祉支援ネットワーク協議会	
15	委 員	齋 藤 千恵子	公益財団法人 福島県老人クラブ連合会	常務理事兼事務局長
16	委 員	齋 藤 正 博	福島県民生児童委員協議会	会長
17	委 員	高 野 成 一	福島県立福島北高等学校	校長
			福島県高等学校長協会	
18	委 員	森 涼	福島県私立中学高等学校協会	会長
19	委 員	遠 野 馨	ふくしま総合相談支援センター	理事長
20	委 員	岸 波 庄 一	日本赤十字社福島県支部	総務課長兼組織振興課長
21	委 員	斎 藤 隆	公益財団法人 福島県国際交流協会	専務理事
22	委 員	洲 崎 毅 浩	独立行政法人国際協力機構 二本松青年海外協力隊訓練所	所長
23	委 員	長 嶺 東 夫	公益社団法人 日本青年会議所東北地区福島ブロック協議会	会長
24	委 員	今 泉 裕	日本労働組合総連合会福島県連合会	会長
25	委 員	佐 藤 一 夫	福島県生活協同組合連合会	専務理事
26	委 員	石 井 浩	福島県商工会議所連合会	常任幹事
27	委 員	後 藤 麻理子	認定特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会	事務局長
			広がれボランティアの輪連絡会議	
28	委 員	田 尻 佳 史	認定特定非営利活動法人日本 NPO センター	常務理事
			広がれボランティアの輪連絡会議	
29	委 員	佐 甲 学	社会福祉法人全国社会福祉協議会	地域福祉部長

第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会専門部会設置規程

(目的)

第1条 この規程は、第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会（以下「実行委員会」という。）設置要綱第8条に基づき、専門部会に関する必要な事項を定める。

(種類)

第2条 専門部会は次のとおりとする。
（１）分科会の企画・運営に関する部会（複数）
（２）企画・広報に関する部会
（５）その他、必要な部会

(組織)

第3条 専門部会は実行委員会を組織する機関・団体をもって構成する。

(任務)

第4条 専門部会は、次の事項について協議し、その結果を実行委員会に報告する。
（１）分科会の具体的な企画・立案・運営に関すること。
（２）実行委員会から各部会に指示、提案された事項に関する企画・立案・広報啓発、実施に関すること。
（３）その他、実行委員会が具体的に協議する必要があると認めた事項に関すること。

(部会長、副部会長)

第5条 専門部会には、部会長１名、副部会長１名を置く。
２ 部会長、副部会長は専門部会委員の互選とする。
３ 部会長は、部会を代表し会務を総括する。
４ 副部会長は、部会長の職務を補佐し、部会長に事故あるときはその職務を代理する。

(委員の任期)

第6条 委員の任期は、平成26年5月1日～平成28年3月31日とする。
２ 委員に欠員が生じ、補充により就任した委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(部会)

第7条 専門部会は、部会長が招集し、議長を務める。
２ 委員はやむを得ない理由により専門部会を欠席するときは、代理人を出席させることができる。
３ 専門部会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開くことができない。
４ 議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは部会長がこれを決する。
５ 専門部会には、必要な人材を加えるとともに、福島県社会福祉協議会職員及びボランティア等のスタッフが参加することができるものとする。
６ 専門部会は、必要に応じて関係する機関からオブザーバーの出席を求めることができる。

(部会間の調整)

第8条 専門部会で協議した内容の調整及び実施に係る調整は正副部会長会議で行う。

(その他)

第9条 この規程に定めるもののほか、必要な事項は委員長が別に定める。

附則

この要綱は、平成26年5月1日から施行する。

第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま 専門部会名簿

平成27年8月18日
第9回専門部会現在

①たすけあい・支え合いのまちづくり部会

No.	職名	氏名	所属	役職
			推薦母体	
1	部会長	添 田 祐 司	社会福祉法人 郡山市社会福祉協議会	地域福祉課長
2	副部会長	幕 田 順 子	公益財団法人 福島県国際交流協会	主任主査
3	委員	岡 崎 達 也	社会福祉法人 会津若松市社会福祉協議会	事務局次長兼地域福祉課長
4	委員	源 後 正 崇	社会福祉法人 福島県共同募金会	副主査
5	委員	遠 野 馨	ふくしま総合相談支援センター	理事長

②つながり・次世代ボランティア部会

6	部会長	遠 藤 徳 雄	日本労働組合総連合会福島県連合会	副事務局長
7	副部会長	富 塚 まり子	福島県ボランティア連絡協議会	事務局長
8	委員	遠 藤 君 子	福島県民生児童委員協議会	副会長
9	委員	佐 藤 喜 也	特定非営利活動法人 福島県レクリエーション協会	事務局長
10	委員	福 田 義 夫	独立行政法人国際協力機構 二本松青年海外協力隊訓練所	業務課長

③ふくしまの今と未来部会

11	部会長	中 鉢 博 之	一般社団法人 ふくしま連携復興センター	理事
12	副部会長	志 賀 大 祐	社会福祉法人 いわき市社会福祉協議会	事務局長
			市町村社会福祉協議会連絡協議会	事務局長会長
13	委員	天 野 和 彦	福島大学うつくしまふくしま未来支援センター	客員准教授
14	委員	久 保 芳 宏	日本赤十字社福島県支部	ボランティア係長
15	委員	佐 藤 一 夫	福島県生活協同組合連合会	専務理事
16	委員	松 原 文 隆	公益社団法人 日本青年会議所東北地区福島ブロック協議会	副会長
17	委員	古 山 郁	特定非営利活動法人 市民公益活動パートナーズ	代表理事
			福島県社会福祉協議会ボランティア活動推進委員会	委員
18	委員	渡 邊 由味子	福島県医療ソーシャルワーカー協会	県北方部長
			福島県広域災害福祉支援ネットワーク協議会	

④企画・広報部会

19	部会長	遠 藤 潔	社会福祉法人 福島市社会福祉協議会	事務局長兼総務課長
20	副部会長	齋 藤 美 佐	特定非営利活動法人 ふくしま NPO ネットワークセンター	常務理事
21	委員	朽 木 薫	公益財団法人 福島県老人クラブ連合会	総務課長

平成28年度 日本国内でのボランティア活動中のケガや賠償責任を補償!!

ボランティア活動保険

全国200万人
加入!!

補償金額（保険金額）

保険金の種類		プラン	Aプラン	Bプラン
ケガの補償	死亡保険金		1,200万円	1,800万円
	後遺障害保険金		1,200万円 (限度額)	1,800万円 (限度額)
	入院保険金日額		6,500円	10,000円
	手術 保険金	入院中の手術	65,000円	100,000円
		外来の手術	32,500円	50,000円
	通院保険金日額		4,000円	6,000円
	特定感染症の補償		上記後遺障害、入院、通院の 各補償金額（保険金額）に同じ	
賠償責任の補償	葬祭費用保険金 (特定感染症)		300万円(限度額)	
	賠償責任保険金 (対人・対物共通)		5億円(限度額)	

年間保険料（1名あたり）

タイプ	プラン	Aプラン	Bプラン
基本タイプ		300円	450円
天災タイプ(※) (基本タイプ+地震・噴火・津波)		430円	650円

(※)天災タイプでは、天災(地震、噴火または津波)に起因する被保険者自身のケガを補償します(天災危険担保特約条項)が、賠償責任の補償については、天災に起因する場合は対象になりません。

●後遺障害も
フルカバーなので
安心です!!

保険金をお支払いする主な場合

- ・清掃ボランティア活動中、転んでケガをして通院した。(ケガの補償)
- ・活動に向かう途中、交通事故にあって亡くなられた。(ケガの補償)
- ・活動中、食べた弁当でボランティア自身が食中毒になって入院した。(ケガの補償)
- ・家事援助ボランティア活動で清掃中、誤って花びんを落としてこわした。(賠償責任の補償)
- ・自転車ボランティア活動に向かう途中、誤って他人にケガをさせた。(賠償責任の補償)

ボランティア行事用保険

(傷害保険、国内旅行傷害保険特約付傷害保険、賠償責任保険)

地域福祉活動や
ボランティア活動の
さまざまな行事における
ケガ、賠償(主催者責任)
を補償!!

補償金額（保険金額）

Aプラン・Bプランとも(Aプランは熱中症危険補償特約セット)

保険金の種類		補償内容
ケガの補償	死亡保険金	400万円
	後遺障害保険金	400万円(限度額)
	入院保険金日額	3,500円
	手術 保険金	入院中の手術 35,000円
		外来の手術 17,500円
	通院保険金日額	2,200円
賠償責任の補償	対人事故	1名・1事故 2億円(限度額)
	対物事故	1事故 1,000万円(限度額)

※賠償責任の補償の限度額は、補償の対象となるリスクの種類ごとに適用されます。

保険料（1名あたり）

※A1、A2、A3の行事の内容は、パンフレットをご覧ください。

Aプラン (宿泊を伴わない行事)		
A1の行事	A2の行事	A3の行事
1日 28円 (最低保険料 560円) (最低加入人数 20名)	1日 126円 (最低保険料 2,520円) (最低加入人数 20名)	1日 248円 (最低保険料 4,960円) (最低加入人数 20名)
Bプラン (宿泊を伴う行事)		
1泊2日(2日間) 239円	4泊5日(5日間) 352円	
2泊3日(3日間) 293円	5泊6日(6日間) 357円	
3泊4日(4日間) 298円	6泊7日(7日間) 362円	

※Aプランにおける区分は、開催する行事の内容によって異なります。パンフレットにない行事は別途お問い合わせください。

※Bプランの行事で上記以外の日程につきましては、別途お問い合わせください。

送迎サービス補償

(傷害保険)

- ◆送迎・移送サービス中の自動車事故などによるケガを補償!

福祉サービス総合補償

(傷害保険、賠償責任保険、約定履行費用保険(オプション))

- ◆ヘルパー・ケアマネジャーなどの活動中のケガや賠償責任を補償!

●お申込み、パンフレット・詳しい内容のお問い合わせは、あなたの地域の社会福祉協議会へ●

団体契約者 社会福祉法人 全国社会福祉協議会

〈引受幹事〉 損害保険ジャパン日本興亜株式会社 医療・福祉開発部 第三課
TEL:03(3593)6824
受付時間:平日の9:00~17:00(土日・祝日、12/31~1/3を除きます。)

取扱代理店 株式会社 福祉保険サービス

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3丁目3番2号 新霞が関ビル17F
TEL:03(3581)4667 FAX:03(3581)4763
営業時間:平日の9:30~17:30(12/29~1/3を除きます。)

●この保険は、全国社会福祉協議会が損害保険会社と一括して締結する団体契約です。

“ありがとう”

未来につなごう ふくしまから

第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま 報告書

発行／第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会

事務局 社会福祉法人福島県社会福祉協議会

〒960-8141 福島県福島市渡利字七社宮111

TEL:024-523-1254 FAX:024-523-4477

発行月／平成28年3月

